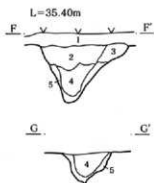


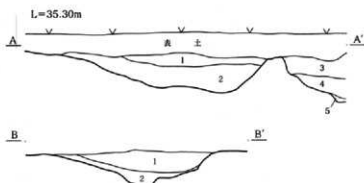
第4章 八反田遺跡の遺構と遺物



33号溝FG

- 1 暗灰褐色土 砂質。細かい砂粒を多く含む。粘性中。しまり弱。
- 2 暗灰褐色土 細かい砂粒を多く含む。粘性弱。しまり弱。
- 3 暗灰褐色土 砂質土。粗い砂粒を多く含む。粘性弱。しまり中。
- 4 暗灰褐色土 砂質土。細かい砂粒。灰色粘質土ブロックを多く含む。粘性中。しまり中。
- 5 暗灰褐色土 細かい砂粒・灰色粘質土ブロックを含む。粘性弱。しまり弱。

第237図 33号溝



25号溝AB

- 1 暗褐色土 白色軽石・砂質土を少し含む。粘性弱。しまり強。
- 2 暗灰褐色土 砂質土。細かい砂粒を多く含む。粘性・しまり弱。
- 3 暗灰褐色土 砂質土。粗い砂粒を多く含む。粘性弱。しまり弱。
- 4 暗灰褐色土 細かい砂粒を多く含む。粘性弱。しまり弱。
- 5 暗灰褐色土 砂質土。微細な砂粒を多く含む。粘性・しまり弱。

25号溝 (第238図、P L66・67)

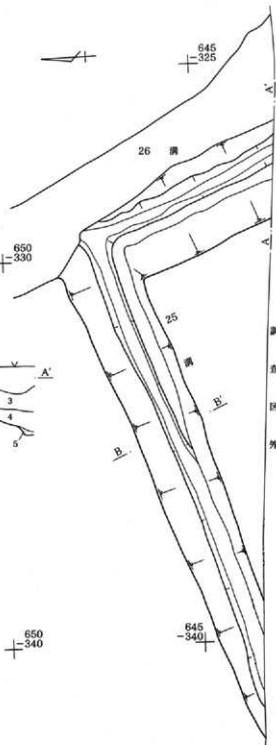
位置 Ⅲ区上面640-325~640-340G

重複 26号溝と重複している。本溝が26号溝より新しい。

規模 検出全長14.8m、上端0.8~1.0m、下端0.2~0.3m、深さ0.5~0.7mを測る。

走向 南南東から北北西へ (N-24° -W) → 東北東から南南西へ (N-70° -E)

形態 方形区画を成す。断面形は逆台形を呈する。



第238図 25号溝

遺物 掲載遺物はないが、覆土からカワラケ片、須恵器片112g、軟質陶器片100g、陶磁器片6gが出土している。

所見 出土遺物・覆土から、時期は近代と思われる。溝の形状が逆台形で直角に曲がって走向していることなどから、区画溝と考えられる。南側が調査区外のため内部施設等は検出されなかった。

27号溝 (第239図)

位置 N区上面670-355-660-380G

重複 なし。

規模 検出全長22.6m、上端0.7-1.5m、下端0.4-1.0m、深さ0.2-0.3mを測る。

走向 東北東から南南西へ(N-65°-E)

形態 ほぼ直線的に延びていき、1号トレンチ付近で消滅する。断面形は蒲鉾状を呈する。

遺物 掲載遺物はないが、覆土からカワラケの小片などとともに須恵器片60gが出土している。

所見 出土遺物・覆土から時期は中世と思われる。

29号溝 (第240図、P L67・69)

位置 III~IV区上面655-355-650-335G

重複 23・24号溝と重複している。本溝が古い。

規模 検出全長22.4m、上端0.4-1.0m、下端0.2-0.6m、深さ0.1-0.2mを測る。

走向 西北西から東南東へ(N-70°-W)

形態 ほぼ直線的に走向するが、両端は攪乱・2号トレンチで壊されており、全容は不明。断面形は浅い椀状を呈する。

遺物 土師器環が出土している。他に、須恵器片60gが出土。

所見 出土遺物・覆土から時期は古代と思われる。

32号溝 (第239図、P L67)

位置 N区上面650-380-645-380G

重複 なし。

規模 検出全長6.8m、上端0.3-0.5m、下端0.2-0.3m、深さ0.05-0.1mを測る。

走向 北西から南東へ(N-36°-W)→南から北へ(N-4°-E)

形態 ほぼ直線的に走向するが、途中で南方向へ走向を変え調査区外で消滅する。断面形は浅い椀状を呈する。

遺物 出土遺物はない。

所見 出土遺物もなく、時期は確定できなかったが、近世と思われる。

34号溝 (第240図、P L67)

位置 N区上面675-395-660-390G

重複 なし。

規模 検出全長12.7m、上端0.4-0.9m、下端0.3-0.6m、深さ0.05-0.1mを測る。

走向 北北西から南南東へ(N-18°-W)

形態 ほぼ直線的に走向し、途中で消滅する。断面形は皿状を呈する。

遺物 出土遺物はない。

所見 出土遺物もなく、時期は確定できなかったが、近世と思われる。

26号溝 (第241・242図、P L67-69)

位置 III~IV区下面660-395-640-320G

重複 35・38・39・41・46号溝、3号井戸、5号土坑と重複している。本溝が古い。

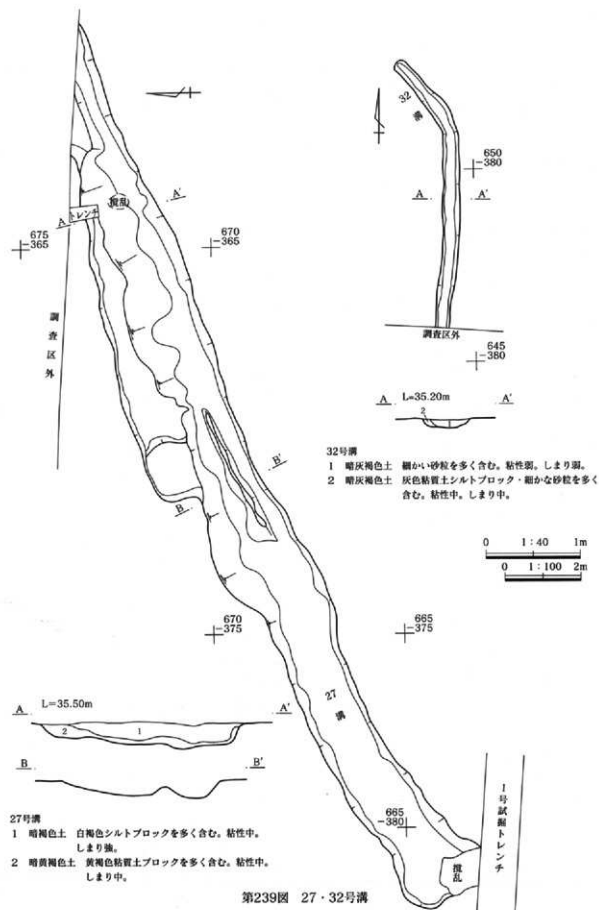
規模 検出全長80.8m、上端1.2-3.2m、下端0.4-0.6m、深さ0.1-0.15mを測る。

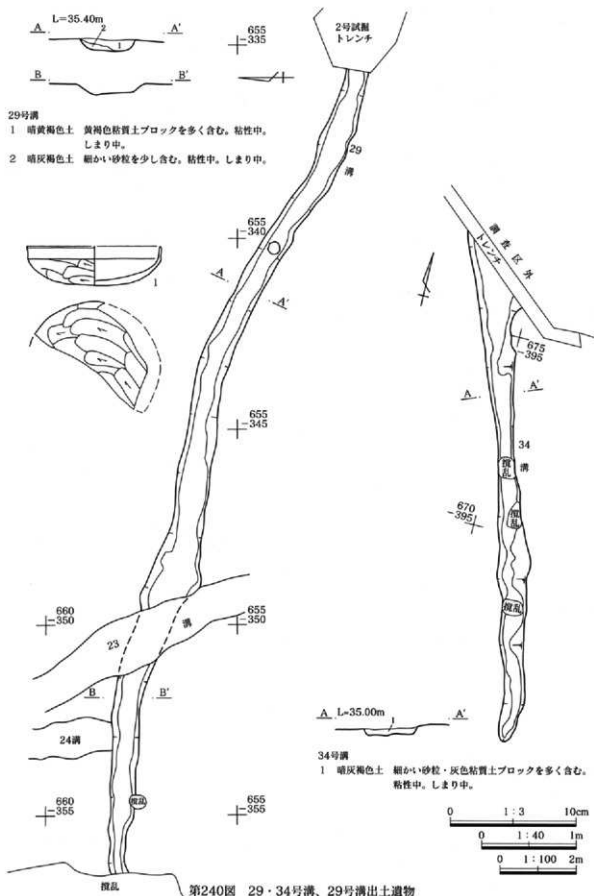
走向 西から東へ(N-86°-E)→北西から南東へ(N-48°-W)

形態 緩やかに蛇行しながら、調査区のはほぼ西から東へ走向する。断面形は浅い逆台形を呈する。

遺物 土師器環・高環・埴・台付甕・甕、石製の勾玉が出土している。他に、土師器片670g、須恵器片120g、軟質陶器片107g、陶磁器片125gなどが出土し、本遺跡では遺物の出土量が一番多い遺構である。軟質陶器・陶磁器は後世の攪乱・耕作等による混入遺物である。

所見 出土遺物・覆土から時期は古代と思われる。





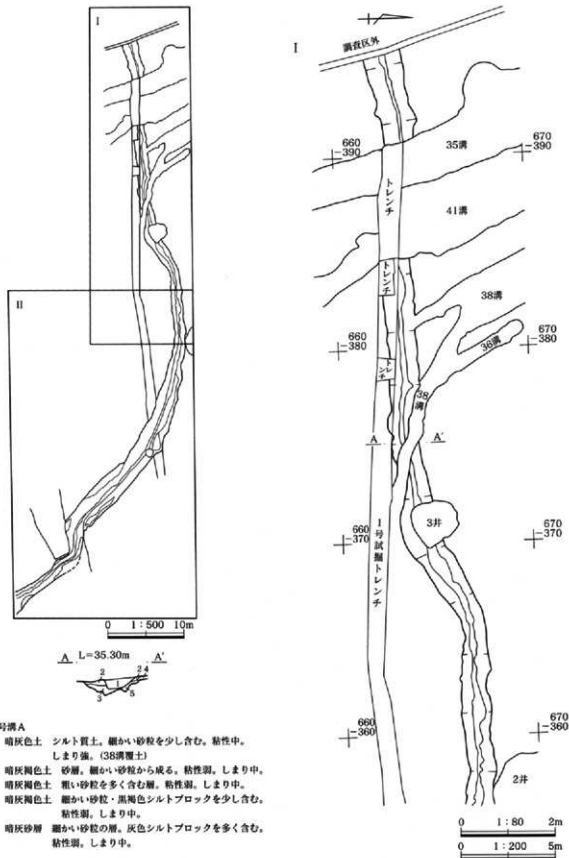
29号溝

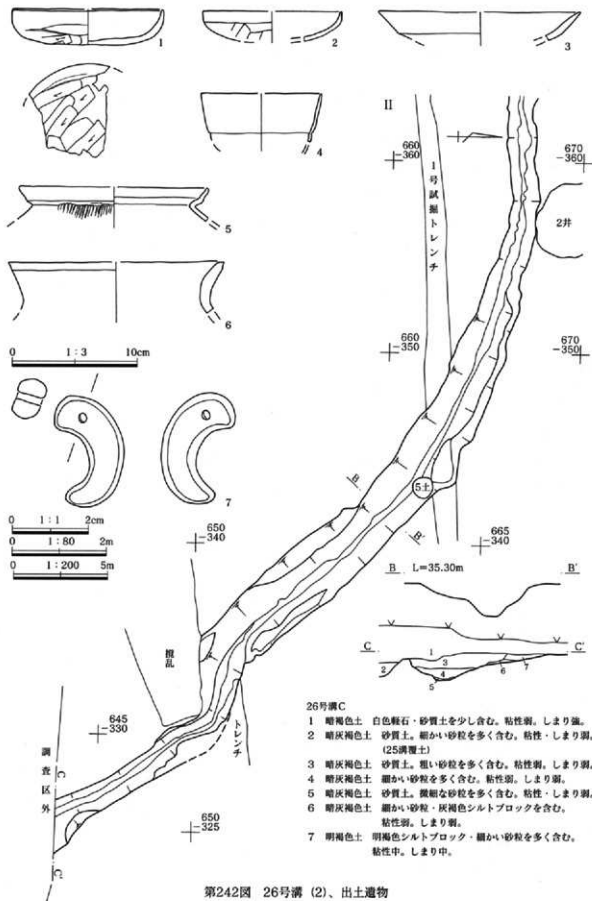
- 1 暗灰褐色土 黄褐色粘質土ブロックを多く含む。粘性中。しまり中。
- 2 暗灰褐色土 細かい砂粒を少し含む。粘性中。しまり中。

34号溝

- 1 暗灰褐色土 細かい砂粒・灰色粘質土ブロックを多く含む。粘性中。しまり中。

第240図 29・34号溝、29号溝出土遺物





第242図 26号溝 (2)、出土遺物

35号溝 (第243・244図、P L68・69)

位置 N区下面675-395-645-385G

重複 26・40・41号溝と重複している。本溝が26・40号溝より新しく、41号溝より古い。

規模 検出全長32.8m、上端0.8-2.4m、下端0.8-1.2m、深さ0.3-0.5mを測る。

走向 北北西から南南東へ(N-14°-W)

形態 ほぼ直線的に走向し、両端は調査区外へ延びていく。断面形は浅い逆台形を呈する。

遺物 土師器片、須恵器片が出土している。他に、土師器片480g、須恵器片25gなどが出土。

所見 出土遺物・覆土から時期は古代と思われる。

40号溝 (第243図、P L68)

位置 N区下面670-390-670-395G

重複 35号溝と重複している。本溝が古い。

規模 検出全長3.4m、上端2.6-3.0m、下端0.8-1.2m、深さ0.8-1.1mを測る。

走向 北東から南西へ(N-61°-E)

形態 ほぼ直線的に走向し調査区外へ延びる。断面形はV字状を呈する。

遺物 掲載遺物はないが、覆土から土師器片50gが出土している。

所見 出土遺物・覆土から時期は古代と思われる。

41号溝 (第243・244図、P L68・69)

位置 N区下面670-385-645-380G

重複 26・35・40号溝と重複している。本溝がこれらの溝より新しい。

規模 検出全長29.6m、上端1.0-2.8m、下端0.8-1.2m、深さ0.3-0.5mを測る。

走向 北北西から南南東へ(N-8°-W)

形態 ほぼ直線的に走向し、両端は調査区外へ延びていく。断面形は浅い椀状を呈する。

遺物 土師器片が出土している。他に、覆土から土師器片600gが出土している。

所見 出土遺物・覆土から時期は古代と思われる。

36号溝 (第245図、P L68)

位置 N区下面665-380-665-375G

重複 38号溝と重複している。本溝が古い。

規模 検出全長5.6m、上端0.7-0.8m、下端0.2-0.4m、深さ0.1-0.15mを測る。

走向 北西から南東へ(N-31°-W)

形態 直線的に走向し、南端は38号溝で壊され、消滅する。断面形は皿状を呈する。

遺物 出土遺物はない。

所見 覆土等から時期は古代と思われる。

37号溝 (第245図、P L68)

位置 N区下面670-385-670-380G

重複 38号溝と重複している。ほぼ同時期か。

規模 検出全長2.8m、上端0.7-0.8m、下端0.2-0.3m、深さ0.1-0.15mを測る。

走向 北西から南東へ(N-26°-W)

形態 ほぼ直線的に走向し、38号溝に合流する。断面形は椀状を呈する。

遺物 出土遺物はない。

所見 覆土等から時期は古代と思われる。

38号溝 (第245図、P L68)

位置 N区下面670-385-660-370G

重複 26・36・37・39号溝と重複している。本溝が26号溝より新しい。他の溝とは同時期か。

規模 検出全長19.1m、上端0.6-0.8m、下端0.2-0.3m、深さ0.1-0.2mを測る。

走向 北西から南東へ(N-32°-W)→西北西から東南東へ(N-70°-W)

形態 ほぼ直線的に走向し、途中でやや東側に緩やかに走向を変え、やがて消滅する。断面形は蒲鉾状を呈する。

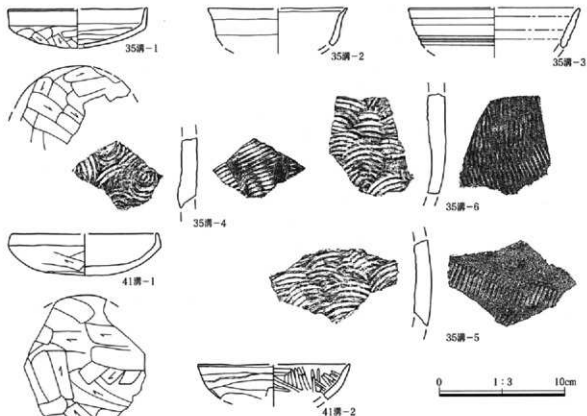
遺物 出土遺物はない。

所見 覆土等から時期は古代と思われる。



第243図 35・40・41号溝

第4章 八反田遺跡の遺構と遺物



第244図 35・41号溝出土遺物

39号溝 (第245図, P L68)

位置 N区下面670-385-660-380G

重複 26・38号溝と重複している。本溝が26号溝より新しく、38号溝とはほぼ同時期か。

規模 検出全長11.6m、上端0.6-1.4m、下端0.3-1.0m、深さ0.1-0.15mを測る。

走向 北西から南東へ (N-27° -W)

形態 38号溝から分かれて、ほぼ直線的に走向し26号溝付近で消滅する。断面形は扇状を呈する。

遺物 出土遺物はない。

所見 覆土等から時期は古代と思われる。

42号溝 (第246図, P L68)

位置 N区下面655-380-645-375G

重複 46号溝と重複している。本溝が新しい。

規模 検出全長10.6m、上端0.4-0.8m、下端0.2-0.6m、深さ0.2-0.3mを測る。

走向 北北西から南南東へ (N-14° -W)

形態 ほぼ直線的に走向し、調査区外へ延びていく。

断面形は浅い逆台形を呈する。

遺物 出土遺物はない。

所見 覆土等から時期は古代と思われる。

46号溝 (第246図, P L68)

位置 N区下面665-375-655-365G

重複 42号溝と重複している。本溝が古い。

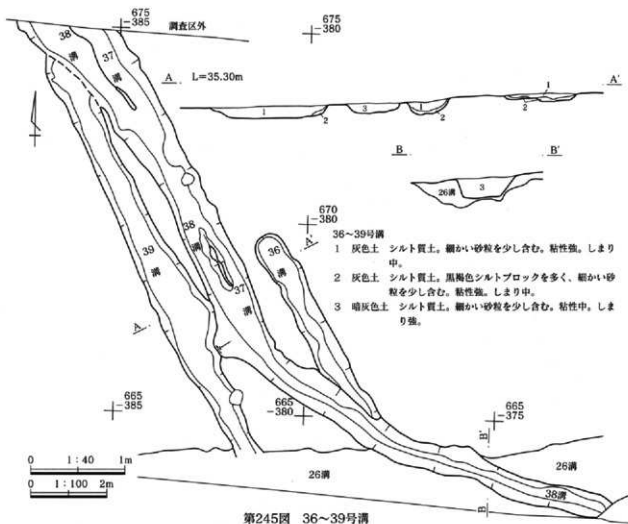
規模 検出全長25.2m、上端1.0-2.2m、下端0.3-0.8m、深さ0.1-0.2mを測る。

走向 西北西から東南東へ (N-65° -W) → 南西から北東へ (N-46° -E)

形態 ほぼ直角に、くの字状に曲がって走向する。断面形は皿状を呈する。

遺物 掲載遺物はないが、覆土から土師器片460g、須恵器片15g、陶磁器片10gが出土している。

所見 出土遺物・覆土から時期は古代と思われる。



43号溝 (第247図、P L68)

位置 IV区下面660-350G 重複 なし。

規模 検出全長3.0m、上端0.3~0.4m、下端0.2~0.6m、深さ0.1mを測る。

走向 西北西から東南東へ (N-71°-W)

形態 ほぼ直線的に走向し、断面形は腕状を呈す。

遺物 出土遺物はない。

所見 覆土等から時期は古代と思われる。

44号溝 (第247図、P L68)

位置 IV区下面660-355~655-350G

重複 45号溝と重複している。本溝が古い。

規模 検出全長4.2m、上端0.3~0.4m、下端0.2~0.3m、深さ0.1~0.15mを測る。

走向 西北西から東南東へ (N-82°-W)

形態 直線的に走向し、45号溝に壊され消滅する。

断面形は浅い逆台形を呈する。

遺物 出土遺物はない。

所見 覆土等から時期は古代と思われる。

45号溝 (第247図、P L68)

位置 III~IV区下面655-355~655-340G

重複 44号溝と重複している。本溝が新しい。

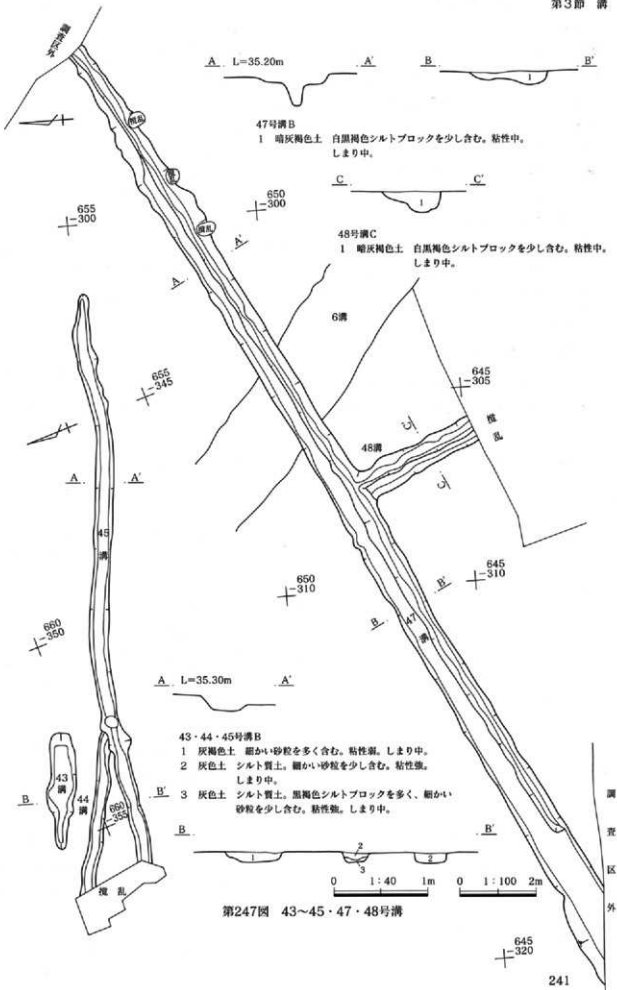
規模 検出全長15.1m、上端0.3~0.5m、下端0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。

走向 西北西から東南東へ (N-75°-W)

形態 ほぼ直線的に走向し、調査区の中で消滅する。断面形は浅い箱形を呈する。

遺物 出土遺物はない。

所見 覆土等から時期は古代と思われる。



第4章 八反田遺跡の遺構と遺物

47号溝 (第247図、P.L67)

位置 II区650-295~640-320G

重複 6・48号溝と重複している。6号溝よりは新しく、48号溝とはほぼ同時期と思われる。

規模 検出全長26.9m、上端0.9~1.1m、下端0.4~0.8m、深さ0.1~0.2mを測る。

走向 北東から南西へ (N-67° - E)

形態 直線的に走向し、両端は調査区外へ延びている。断面形は椀状を呈する。

遺物 掲載遺物はないが、覆土から陶磁器片80gが出土している。

所見 出土遺物・覆土から時期は近代と思われる。

48号溝 (第247図、P.L67)

位置 II区645-305~640-305G

重複 47号溝と重複しているが、ほぼ同時期と思われる。

規模 検出全長3.8m、上端0.6~0.8m、下端0.3~0.4m、深さ0.2~0.3mを測る。

走向 北西から南東へ (N-23° - W)

形態 47号溝から分かれ直線的に走向し、擾乱に壊され消滅する。断面形は椀状を呈する。

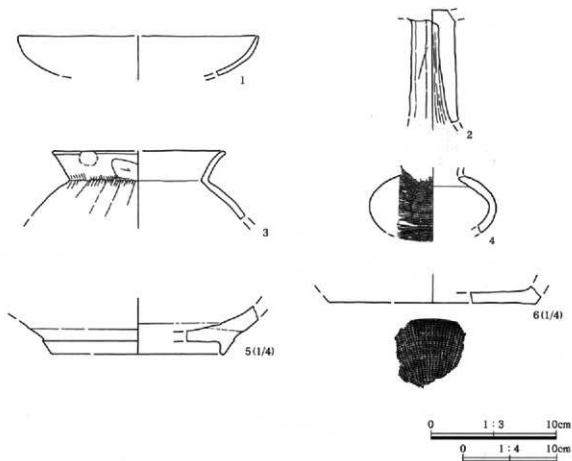
遺物 出土遺物はない。

所見 覆土等から時期は近代と思われる。

第4節 遺構外出土遺物 (第248図、P.L69)

本節では、溝・土坑等の遺構出土以外のグリット上げ遺物を扱う。内訳は、古墳時代の土師器高坏・

甕、須恵器器、古代(奈良時代)の土師器坏、中世の焼締陶器播り鉢、近世の軟質陶器火鉢の6点である。



第248図 遺構外出土遺物

第5章 調査の成果

第1節 調査のまとめ

(1) 高林三入遺跡

高林三入遺跡で検出された遺構数は、第34表の通りである。ここでは、時代毎に調査の成果を報告する。

旧石器時代

A-1②区では、As-BP層から2ヶ所の石器ブロック及び礫群ブロックを検出した。出土した石器は、総数78点で、石核・敲石・切出形石器なども含まれ、そのうち13例の接合資料（内7例は礫群の接合資料）を確認した。また、暗色帯上部から剥片1点（A-2区）、剥片3点（A-1①区）が出土している。B区では暗色帯下部を中心としたブロックを5ヶ所確認した。出土した石器総数は98点で、石核・ナイフ形石器なども含まれ、そのうち13例の接合資料を確認した。時期は、テフラ分析によりAs-BPをブロック状に含む黄色硬質ローム層（Ⅶ層）から、暗色帯下部にかけてである。C区では、暗色帯の下層から石刃1点が出土した。また、D区でもAs-BPを含む層から剥片2点、暗色帯下部からナイフ形石器1点が出土している。

縄文・弥生時代

A-3区で縄文時代後期初頭（称名寺式期）の土器を伴う27号土坑1基が検出されているが、弥生時代の遺構は検出されなかった。遺物としては、縄文時代の土器片計約100点、石鏃・石槍などの石器十数点が出土している。時期は前期後半から後期前半で、前期後半（諸磯式b・C式期）の土器片が比較的多く出土しており、周辺には縄文時代後期後半の集落があったと想定される。弥生時代では後期の土器片が数点出土しているのみである。

古墳時代

A区では前期の竪穴住居1軒・方形周溝墓1基が検出され、S字甕や壺などが出土している。B・C区の低台地上では、竪穴住居21軒と竪立柱建物11棟と土坑・井戸・ピット多数を確認した。B・C区

は、広範囲で攪乱や削平を受けており、残存状態が良好ならば、さらに多くの前期から中期の竪穴住居・竪立柱建物が存在していた集落があったと想定される。出土遺物の中で特筆すべきものは、B区10号土坑出土の手柄り形土器とC区7号住居出土の初期須恵器把手付埴である。ともに県内では出土例が少なく、特に把手付埴は多数の土師器と共存して出土しており、貴重な資料である。（本章第2節、第3節参照）

奈良・平安時代

A区では、竪穴住居2軒（9世紀中葉）を検出している。ともに東に竪が検出されたが、後世の耕作などで削平されており残存状態が悪かった。西側に接する福沢新田遺跡では、9世紀代の住居が数軒検出されていることから、高林三入遺跡A-1区から福沢新田遺跡には、この時期の集落があったと想定される。また、この時期の遺物を出土する溝を数条確認した。

中近世以降

D～F区では、用水路と思われる、低台地を南北に横切る溝・低台地から沖積地へ西から東へ走向する溝が何条も検出された。溝からは近世末（18～19世紀）の陶磁器・瓦などの遺物が多量に出土している。E区では水田跡が検出され、畦・溝が確認されている。また、A-1②区では、近世末の土坑墓が15基検出され、人骨（歯）・馬骨・陶磁器・カワラケなどが出土している。人骨（歯）・馬骨については、第6章第4節を参照されたい。

(2) 八反田遺跡

八反田遺跡で検出された遺構は、溝46条、井戸5基、土坑6基、ピット15基である。以下、各時代ごとに調査の成果を記すことにする。なお、旧石器～弥生時代の遺構・遺物は検出されていない。

古墳時代

はっきりと認定できる古墳時代の遺構は、検出さ

れなかったが、26号溝からは、前期～中期の土師器・須恵器片・勾玉など出土している。

奈良・平安時代

検出された多くの溝覆土中より、8～10世紀頃の土師器・須恵器片が出土している。6号溝は、幅2m・深さ1mほどの大規模な溝で、東山道武蔵路と推定される現市道に沿って検出された。平成14年度の調査では武蔵路の側溝の可能性があるとされたが、平成16年度に行われた現市道の東側（V区＝I区の残り）の調査でも反対側の側溝を確認できなかったため、確証は得られていない。

【東山道武蔵路と6号溝との関係】

東山道武蔵路はおおよそ7世紀末頃には成立していたことが、東京都内などの発掘調査例により確認されている。基本的には東山道駅路整備と同時に整えられ、武蔵路が東山道に位置づけられたものとされる。その後、宝亀2年（771年）に武蔵国が東山道から東海道に所属替えされるとともに、その官道としての位置づけは終了したものとされている。ただし、実際の道路としての機能はその後も坂東の南北を結ぶ主要経路の一つとしてある程度維持されていたものと考えられる。平安期においても坂東の南北往來を前提とした諸事象の記録も散見せられ、それらは旧武蔵路に代表される道筋の存在を物語るものであり、さらにこうした道筋が母体となって中世のいわゆる鎌倉街道の幾つかの道路へと発展してい

ったものと考えられている。

今回発見された6号溝は、埋設した覆土の状況から12世紀初頭以前においてある時期にまとまった形で土砂が崩落している状況が、2、3回あったことが看取できた。このことは、溝もしくは溝を伴う遺構の維持・管理にかかわる局面が何度かあったことを物語っている。しかし、調査では残念ながら、この溝が古代官道東山道武蔵路の側溝である確証は得られなかった。ただ、6号溝はAs-B軽石の堆積がレンズ状を呈しており12世紀初頭の時点ではまだ溝状の窪地としてある程度は残っていたものと思われ、中世においても溝もしくは道として機能していた可能性が想定される。

中世以降

4号溝は、調査区を東西に走向し、規模も大きく近世まで機能していた可能性も考えられる。13号溝からは中国青磁塊（口縁部片）が出土している。その他の溝覆土中からは、カワラケや内耳、陶磁器片などが出土した。ほとんどの溝は流水の痕跡があり、水田に伴う用水路と思われるが、数条の溝は直角に曲がるものがあり、区画溝と考えられる。井戸・土坑からは、古銭（開元通宝）やカワラケ・磁石などが出土している。

第34表 高林三入遺跡遺構数

遺構名・区名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計
旧石路ブロック	2	5								7
礎群ブロック	2									2
石器出土数	82	98	1	3						184
竪穴住居	3	12	9	0	0	0	0	0	0	24
竪穴状遺構	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
方形周溝墓	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
掘立柱礎物	0	5	8	0	0	1	0	0	0	14
溝	25	22	9	15	15	6	0	0	0	92
水田跡	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
土坑	81	43	31	10	1	3	0	0	0	169
井戸	1	2	1	0	0	1	0	0	0	5
ピット	18	174	108	69	2	5	0	0	0	376
風車木	9	0	0	0	0	0	0	0	0	9

第2節 群馬県内出土初期須恵器把手付塊について

高林三入遺跡C区7号住居から出土の初期須恵器把手付塊は、県内では9例目の発見で、また、竪穴住居内から多数の土師器と共伴して出土しており、貴重な資料である。

把手付塊は、別名コップ形土器とも呼ばれている。我が国の須恵器生産の開始期である陶器窯址群大庭寺遺跡からも出土しており、以後TK47形式までその存在が確認できるが、その後、国内では生産されなくなる。その変化の方向性は、把手の加飾性の喪失、体部の柳描き波状文や沈線の簡略化・喪失などに端的に現れている。

そこで、本稿では、県内出土の初期須恵器把手付塊の出土遺跡とその概要を紹介したい。県内では、第249図(第35表)のように、9遺跡計9点の把手付塊が出土している。詳細は観察表を参照されたがい、ここでは、9点の把手付塊について、年代を含め、形や法量(大きさ)、成形・整形の技法、胎土など類似点・相違点を簡単に言及してみたい。残念ながら遺物番号5(穴池遺跡)、8、9(ともに前橋市内表採資料)は実見することができなかつたので、実測図からの観察である。

まず、年代観であるが、遺物番号1~3、6~9には体部に柳描き波状文があるが、波状文が喪失している4(阿曾岡権現堂遺跡)、5は他の土器に比べて新しいと考えられる。特に、4は器形が歪んでいる稚拙な作りで、胎土は秋間が高崎市観音山丘陵産と看取できた。また、第249図の共伴している土師器等から検討すると、1(本遺跡)、3(仙石丘山遺跡)は、5世紀第2四半期、2・5~7は第3四半期のものと考えられる。

次に、形や大きさであるが、2(成塚住宅団地遺跡)・6(下高瀬上之原遺跡)・8は、口縁部径10cm程の椀形を呈し、類似している。4と5も径8cmほどの椀形を呈すが、4は口縁部が内湾し、5は口縁部が直立する。1・3・7・9は、口径7~8cmで、まさにコップ形を呈する。

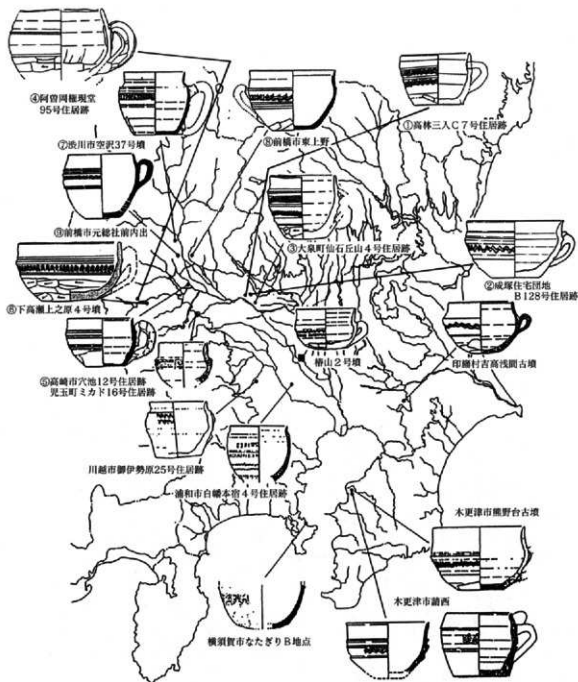
最後に、成形・整形、把手の取り付け方について観察してみたい。3・7は左回転轆轤整形、1・2・4・6は右回転轆轤整形、5・8・9は不明である。特に、1(本遺跡)だけに看取できる技法が二つある。一つは把手部の付け方で、上の部分は体部に穴を開けてから、把手を差し込んで取り付けられている。二つ目は、体部の作り方で、円盤状の粘土に、粘土を巻き上げて成形した後に、腰部に再度粘土を巻き付けて成形したと考えられる。そのため、底部が低い高台のような作りになっている。この二つの技法は、2~9には看取できない。特に、把手部は体部に貼り付けてから、指で押さえて取り付けられているため、3・5~8のように把手が剥がれて喪失してしまっているものが多い。体部下半はへら削り・へら撫で調整、底部は手持ちへら削りで切り離されている。

今回、本遺跡C区7号住居から初期須恵器把手付塊が出土したことは大変意義深く、今後、該期土器研究の上で活用されていくことを期待して、本稿のまとめとしたい。なお、本稿をまとめるにあたり、下記の方々からご教示・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

石川正之助、関本寿雄、藤塚徳司、矢島博文、吉田好孝、綿貫邦男、坂口一、石塚久則

引用・参考文献

- 1999『東国土器研究第5号』(東国土器研究会)
 1994『下高瀬上之原遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 1992『成塚住宅団地遺跡』(太田市教育委員会)
 1997『東八木遺跡、阿曾岡・権現堂遺跡』
 (富岡市教育委員会)
 1989『空沢遺跡第8次-Q・R・S地点発掘調査報告書-1』(渋川市教育委員会)
 1987『第8回三県シンポジウム東国における古式須恵器をめぐる諸問題』(北武蔵古代文化研究会・



第249図 関東地方(群馬県内)出土の把手付埴
(東国土器研究会(1999年)第5号328頁を改変)

第35表 群馬県内出土須恵器把手付埴

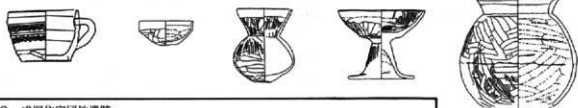
No.	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の時期	文献(報告書等)	年代等
1	高林三入遺跡	太田市増瀬川町	C区7号住居	5世紀中期(竊なし)	本書	TK216
2	成塚住宅団地遺跡	太田市成塚町	B区126号住居	5世紀前半(竊なし)	成塚住宅団地遺跡(太田市教委)1992	
3	仙石丘山遺跡	邑楽郡大泉町仙石	4号住居跡	5世紀後半(竊あり)	大泉町跡下巻部史蹟(大泉町)1963	
4	阿曾岡椎屋遺跡	富岡市宇田阿曾岡	96号住居	古墳中期	東八木遺跡、阿曾岡・椎屋遺跡(富岡市教委)1997	在地産か。
5	穴池遺跡	高崎市金賀野町穴池	12号住居	5世紀後半(竊あり)	第8回三原シロジウム 東面における古式須恵器をめぐる論問題1967	TK23(在地産)
6	下高瀬上之原遺跡	富岡市下高瀬	4号墳	5世紀後半	下高瀬上之原遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1994	TK208
7	空沢遺跡	渋川市行幸田空沢	13号墳+37号墳	Hr-FA下	空沢遺跡第8次-Q・R-S地点発掘調査報告書(渋川市教委)1989	大塚陶器産
8	表採資料	前橋市東上野町	畑地	—	第8回三原シロジウム 東面における古式須恵器をめぐる論問題1968	
9	表採資料	伊勢崎市中央町	台地上	—	石川正之助氏のご教示による	

第36表 群馬県内出土須恵器把手付埴観察表

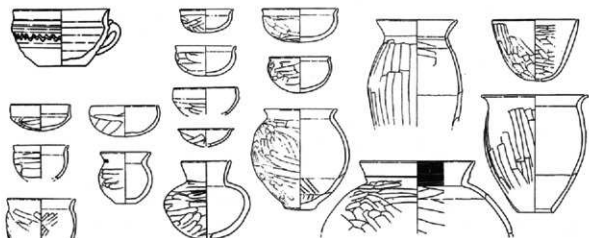
No.	遺跡名 遺構名	部 位 存 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成	成・変形技法の特徴	備考
1	高林三入遺跡 C区7号住居床直	宛形	口 7.2 底 4.8 高 5.3	①緻密 ②還元焼 ③N4/灰	口縁部が僅かに3mm欠損。欠け口の胎土は濃いセピア色に焼き締まっている。外面には2段の沈線とその下に6本1単位の御描き波状文を2条施す。体部下半は手持ちへう割り。	本書
2	成塚住宅団地遺跡 B区126号 住居床直	ほぼ宛形	口 10.4 底 5.0 高 6.0	記載なし	口縁部内外面横撫で。胴部外面へう割で。底部外面撫で。胴部に流水文、沈線あり。	報告書の記載事項をそのまま転載。
3	仙石丘山遺跡 4号住居 覆土	把手部分欠損	口 7.0 底 4.5 高 6.4	記載なし	左回転輪軸形。口縁部内外面横撫で。体部に3条の突帯を持ち、その間に6本1単位の2条の丁寧な御描き波状文を施す。体部下半は手持ちへう割り。底部はへう割り。	実測図一部訂正し、筆者が観察した。
4	阿曾岡椎屋遺跡 96号住居	口一部1/3 (把手残存)	口 8.6 底 — 高 (6.8)	①緻密、黒色胎物 ②還元焼 ③N6/灰	口縁部内外面横撫で。体部に2条の突帯を持ち、文様はない。全体的に鈍重で、成形が稚拙である。体部下半は手持ちによる弱いへう割りが認められる。把手は体部に比べ大きく、成形は指頭による押さえが看取できる。胎土は軟弱が顕著な山丘陵産。在地産。	富岡市教委から借用し実測・観察した。
5	穴池遺跡 12号住居 覆土	宛形	口 7.8~8.2 底 4.8 高 5.7	①砂粒が多い。	上下の太い沈線による「相対的な凸線」で3段に区画され、文様はない。全体的に鈍重で、口唇部も内面に沈線状の段を持つがシャープではなく、体部下半・底部は手持ちによる弱いへう割りが認められる。把手は体部に比べ大きくアンバランスの態を抱き、成形は指頭による押さえにより外側がやや劣る。在地産。	第8回三原シロジウム 東面における古式須恵器をめぐる論問題から転載。
6	下高瀬上之原遺跡 4号墳 周墓北東	把手部分欠損	口 10.9 底 5.6 高 6.0	①細砂 ②還元焼、良好 ③灰	口縁部調整。体部に5本1単位の御描き波状文。体部下半・底部外面手持ちへう割り。内外面に自然胎付。把手は胎付部より割れる。	報告書の記載事項をそのまま転載。
7	空沢遺跡 13号墳周墓南十 37号墳周墓北	把手部分欠損	口 7.1~8.0 底 4.9 高 7.1	①緻密、白色粒 ②還元焼、良好 ③内面灰黒色、外面青灰色、断面紫灰色	マキアゲ、水焼成形。把手貼り付けて輪軸回転方向は時計と逆回転。口縁は一旦内湾したのち直立し、口唇部は丸い。体部上半に2条の突帯が走り、その間を7本1単位の波状文が通る。体部下半は横方向へう割り調整。底部外面横方向へう割り(弱くへう割で)回転で調整。大塚陶器産。	第8回三原シロジウム 東面における古式須恵器をめぐる論問題から転載。
8	前橋市東上野町 畑地表採資料	宛形	口 7.6 底 3.8 高 7.4	記載なし	口縁部内外面横撫で。体部に2条の突帯を持ち、その間に5本1単位の御描き波状文を施す。	実測図から筆者が観察し記載。
9	伊勢崎市中央町	把手部分欠損	口 10.3 底 5.0 高 6.8	記載なし	口縁部内外面横撫で。体部に2条の突帯を持ち、その間に6本1単位の御描き波状文を施す。体部下半は手持ちへう割りか。	実測図から筆者が観察し記載。

第5章 調査の成果

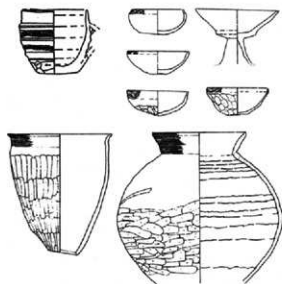
1 高林三入遺跡 (他の土師器の実面図は72・73頁に掲載)



2 成塚住宅団地遺跡



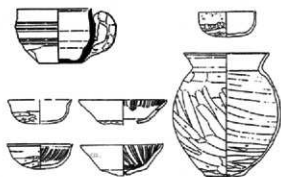
3 仙石丘山遺跡



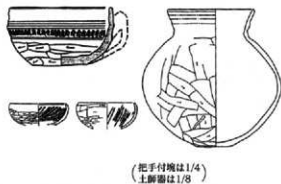
7 空沢遺跡



5 穴池遺跡



6 下高瀬上之原遺跡 (他に円筒埴輪が出土)



第250図 県内出土の把手付埴と共伴土師器

第3節 群馬県内出土手焙り形土器について

高林三入遺跡B区10号土坑からは、手焙り形土器の面片1点が出土している。群馬県内では出土例(5例目)が少なく貴重な資料である。

手焙り形土器は、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけて作られた土器(土師器)である。鉢形の上部に覆いが付き、その一方に口が開く形状をしている。この特異な形をした土器は一体何に使ったのか?他の土師器(環・甕・甕など)に比べて著しく個体数が少なく、また篇(周溝篇・古墳)から出土することが多いので、祭祀的な機能が考えられる。また、内面に煤が付着しているものも多く、火を焚いていたことは確実であり、覆いは火を守るためと思われる。用途としては、照明か手焙り火鉢かと思われるが祭祀的な側面を重視するならば、聖なる「火」を灯した照明として使われたのだろうと思われる。

そこで、本稿では、県内出土の手焙り形土器出土遺跡とその概要を紹介したい。県内では、第249図(第36表)のように、5遺跡から手焙り形土器が出

土しているが、編遺跡・公田東遺跡以外は破片資料である。今回、本遺跡B区10号土坑から手焙り形土器が出土したことは大変意義深く、該期土器研究の上で重要な資料となると考える。

本稿をまとめるにあたり、当事業団大木紳一郎氏からご教示・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

引用・参考文献

2005『年報23』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

2002『上滝堰町北遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1997『藤島川堰・公田東・公田池尻遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1998『手焙り土器の研究』(高橋一夫)

2000『壱から埴輪へ—3・4世紀の東日本における畿内型埴輪の受容—』(明治大学考古学博物館)

1964『弥生土器集成 本編』(小林行雄・杉原荘介)

第37表 群馬県内出土手焙り形土器

事業団：(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

番号	遺跡名	所在地	遺構名	遺構の時期	文献(報告書等)	土器の年代
1	高林三入遺跡 B区10号土坑	太田市岩瀬川町	B区10号土坑	古墳初頭	本書	
2	編遺跡	高崎市上並榎町	溝	不明	弥生式土器集成本編(弥生式土器集成刊行会)、 新編高崎市史資料編1原始古代(高崎市)	古墳初頭
3	公田東遺跡	前橋市公田町	E区2号周溝	古墳初頭	藤島川堰・公田東・公田池尻遺跡(事業団)	
4	上滝堰町北遺跡	高崎市上滝町	E区遺構外		上滝堰町北遺跡(事業団)	4世紀初頭
5	成塚岡山古墳群	太田市成塚町	1号墳(方墳)	古墳前期	年報23(事業団)	

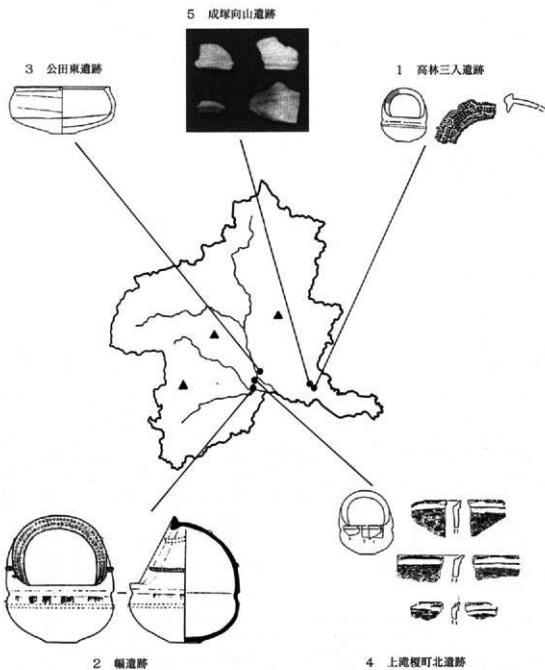
第38表 群馬県内出土手焙り形土器観察表

番号	遺跡名 遺構名	部位 埋存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	高林三入遺跡 B区10号土坑	面片	長さ 11.8 幅 5.8 厚さ 0.4~0.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③SYR7/6黄	楕円形的な刺突痕を施す。円形貼付2ヵ所あり。調整は丁寧な模様で。	本書
2	編遺跡 溝埋土	完形	口径 11.8 底 4.4 高 19.8	①粗砂粒、褐色粒 ②酸化焙 ③明褐色	鉢の部分に1条と覆いの部分に2条の粘土線をめぐらし、それに帯指きの列点文をつけている。覆いの部分の口縁端は内外に厚くして幅を持たせ、その周囲に溝による刻み目を内側に竹管の刺突文を連続して施している。	弥生式土器集成より転載。
3	公田東遺跡 西側周溝	下半部(鉢部)	埋存高 7.4 口縁部径 15.0 体部最大径18.7	①砂粒を多く含む ②酸化焙 不美 ③流黄色2.SYR7/3	体部は圓球形をなし下接合部で屈曲する。底部は突出する平底。胴部内外面模様が、内面に接合痕が残る。	報告書より転載。
4	上滝堰町北遺跡	口縁部片3片		①細砂粒 ②酸化焙 ③	口縁部断面はS字状を呈し、内外面に刷毛目調整が施される。口縁部内側に溝合痕と思われる粘土塊がある。弥生後期～古墳初頭(4世紀初頭)	報告書より転載。
5	成塚岡山古墳群	口縁部片など		不明	1号古墳から4片(他に数片あり)が出土	未報告



1	鉢部	6	開口部
2	覆部	7	口縁端部
3	底部	8	耳
4	体部	9	面
5	口縁部	10	突帯

部位名称
 (「手埴形土器の研究」より)



第251図 群馬県内出土の手埴形土器

第6章 自然科学分析

第1節 高林三入遺跡の自然科学分析 (1)

株式会社 古環境研究所

1. 高林三入遺跡C区の土層とテフラ

1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間、榛名、赤城など北関東地方とその周辺の火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、堆積年代の不明な石器が検出された高林三入遺跡においても、地質調査を行って土層層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ組成分析や屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、遺物や土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、C-4区のHM-19グリッド、HK-18グリッド、HG-18グリッド、南東地点の4地点である。

2. 土層の層序

(1) C-4区HM-19グリッド

C-4区HM-19グリッドでは、下位より灰色砂礫層（層厚3cm以上、礫の最大径18mm）、円磨された黄色軽石を含む灰色砂層（層厚2cm、軽石の最大径21mm）、ラミナの発達した灰色砂礫層（層厚61cm、礫の最大径16mm）、円磨された黄色軽石を多く含む灰色砂礫層（層厚4cm、軽石の最大径7mm、礫の最大径8mm）、礫や砂を含む黄褐色土（層厚42cm、礫の最大径5mm）、暗灰褐色土（層厚2cm、いわゆる暗色帯）が認められる（図1）。

(2) C-4区HK-18グリッド

C-4区HK-18グリッドでは、下位より褐灰色砂層（層厚6cm）、黄灰色シルト層（層厚9cm）、灰褐色土（層厚13cm）、灰褐色砂層（層厚6cm）、灰色砂層（層厚6cm）、若干色調の暗い灰褐色土（層厚

17cm）、砂混じり黄色土（層厚24cm）、暗灰褐色土（層厚11cm、いわゆる暗色帯）が認められる（図2）。この地点では、発掘調査により灰褐色砂層の直下から石器が検出されている。

(3) C-4区HG-18グリッド

C-4区HG-18グリッドでは、下位より黄灰色シルト層（層厚3cm以上）、若干色調の暗い灰褐色土（層厚10cm）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚25cm）、暗灰褐色土（層厚9cm）、褐色土（層厚9cm）が認められる（図3）。これらのうち、若干色調の暗い灰褐色土から暗灰褐色土にかけての土層は、いわゆる暗色帯に相当する。

(4) C-4区南東地点

C-4区南東地点では、下位より暗褐色土（層厚5cm、いわゆる暗色帯）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）、若干灰色がかつた褐色土（層厚13cm）、黄褐色土（層厚10cm）、暗褐色土（攪乱土）が認められる（図4）。

3. テフラ組成分析

(1) 分析試料と分析方法

C-4区のHK-18グリッドおよびHG-18グリッドの2地点において、基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの14点を対象に、火山ガラスの形態別比率を求める火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行って、示標テフラの降灰層序の把握を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料20gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4~1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別比率を求める（火山ガラス比分析）。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

(2) 分析結果

C-4区HK-18グリッドとC-4区HG-18グリッドにおけるテフラ組成分析の結果を、各々図5と図6に示す。また火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を、各々表1と表2に示す。C-4区HK-18グリッドでは、試料11より上位の試料に火山ガラスが認められた。試料11、9、3には、透明なバブル型(平板状)ガラスが認められる。また、試料7より上位では軽石型ガラス、試料3より上位では、分厚い中間型ガラスが認められる。一方、重鉱物組成では、試料11から5にかけて、比較的斜方輝石や単斜輝石が多く含まれる傾向にある。また試料3や1では、角閃石の比率が増大する。

C-4区HG-18グリッドでは、いずれの試料からも火山ガラスが検出された。とくに試料3に透明なバブル型ガラスの明瞭な出現ピーク(7.6%)が認められる。重鉱物組成では、下位より上位にむかって角閃石の比率が減少し、逆に斜方輝石や単斜輝石が増大する傾向が伺える。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

水成層中に含まれる軽石の起源を明らかにするために、C-4区HM-19グリッドの試料2の軽石について、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)により屈折率の測定を行った。また重鉱物組成分析の結果、角閃石で特徴づけられるテフラの降灰層の可能性が考えられたC-4区HK-18グリッドの試料3についても、同じ方法により屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表3に示す。C-4区HM-19グリッドの試料2の軽石には、班晶中の重鉱物として斜方輝石や角閃石が認められる。斜方輝石(γ)と角閃石(n_2)の屈折率は、各々1.707-1.710と1.671-1.677である。また、HK-18グリッドの試料3にも、重鉱物として斜方輝石や角閃石が認められる。斜方輝石(γ)と角閃石(n_2)の屈折率は、各々1.708-1.711と1.670-1.677である。

5. 考察—示標テフラとの同定とその層位について

C-4区HM-19グリッドの試料2の軽石は、その岩相などから約3.1~3.2万年前に赤城火山から噴出したと考えられている赤城鹿沼軽石(Ag-K, 新井, 1962, 鈴木, 1976, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。

また、HK-18グリッドの試料3にも、その重鉱物の組み合わせ、斜方輝石や角閃石の屈折率などから、Ag-Kに由来する粒子が二次的に混入していると考えられる。

C-4区HG-18グリッドにおいて、いわゆる暗色帯の上部にある試料3付近に出現ピークがある透明なバブル型ガラスは、その形態や色調などから、約2.4~2.5万年前^{*)}に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995)に由来すると考えられる。したがって、試料3付近にATの降灰層があると考えられる。C-4区南東地点において、いわゆる暗色帯の直上にある黄灰色粗粒火山灰層については、その層位や層相などから、約1.9~2.4万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1996, 未公表資料)のうちの1層と考えられる。

以上のことから、C-4区HK-18グリッドにおいて検出された石器の層位は、Ag-Kの上位でATの下位の洪水堆積物の直下にあると考えられる。

6. 小結

高林三入遺跡において、地質調査、テフラ組成分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より赤城鹿沼軽石(Ag-K, 約3.1~3.2万年前)に由来する軽石、始良Tn火山灰(AT, 約2.4~2.5万年前^{*)})、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.9~2.4万年前^{*)})が検出された。C-4区HK-18グリッドにおいて発掘調査により検出された石器は、Ag-Kの上位でATの下位の洪水堆積物の直下に層位があると考えられる。

*1 放射性炭素 (^{14}C) 年代。

文献：新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定-テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究11, p.254-269.

新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法-研究対象別分析法」, p.138-148.

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隈降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による ^{14}C 年代。第四紀研究, 34, p.377-379.

町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義。科学, 46, p.339-347.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の ^{14}C 年代。第四紀研究, 26, p.79-83.

早田 勉 (1996) 関東地方~東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

鈴木正男 (1976) 過去をさぐる科学。講談社, 234p.

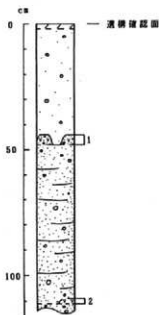


図1 HM-19グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

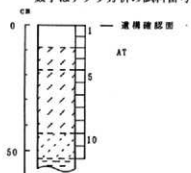


図3 HG-18グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

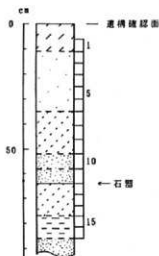


図2 HK-18グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

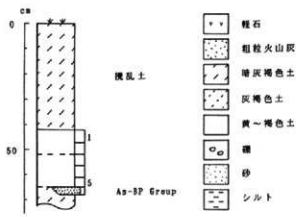


図4 C-4区南東地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

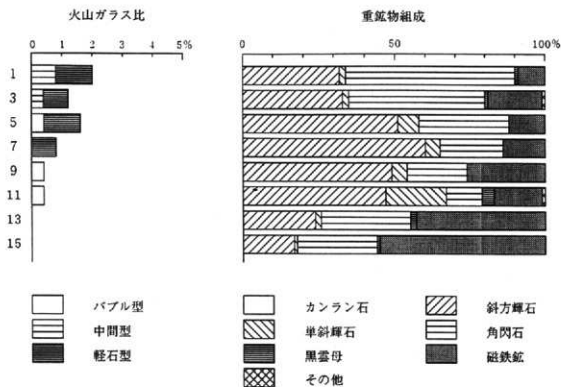


図5 C-4区HK-18グリッドのテフラ組成ダイアグラム

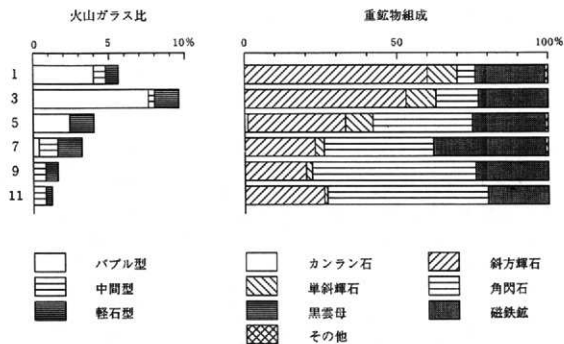


図6 C-4区HG-18グリッドのテフラ組成ダイアグラム

表1 高林三入遺跡における火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw	md	pm	その他	合計	
C-4区	1	0	2	3	245	250	
	HK-18	3	0	1	2	247	250
	グリッド*	5	1	0	3	246	250
	7	0	0	2	248	250	
	9	0	0	1	249	250	
	11	0	0	1	249	250	
	13	0	0	0	250	250	
15	0	0	0	250	250		

C-4区	1	10	2	2	236	250	
	HK-18	3	19	1	4	226	250
	グリッド*	5	6	0	4	240	250
	7	1	3	4	242	250	
	9	0	2	2	246	250	
	11	0	2	1	247	250	

数字は粒子数。bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型。

表2 高林三入遺跡における重鉱物組成分析結果

地点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計	
C-4区	1	0	79	5	141	2	23	0	250	
	HK-18	3	0	83	6	112	3	44	2	250
	グリッド	5	0	127	17	76	0	29	1	250
	7	0	151	12	53	0	34	0	250	
	9	0	122	12	49	0	66	1	250	
	11	0	118	51	31	10	39	1	250	
	13	0	59	5	73	5	107	1	250	
15	0	43	1	65	1	139	1	250		

C-4区	1	0	151	24	15	0	58	2	250	
	HK-18	3	0	133	24	34	0	57	2	250
	グリッド	5	2	81	23	82	0	61	1	250
	7	0	58	7	91	0	93	1	250	
	9	0	51	5	135	0	59	0	250	
	11	0	65	1	133	0	50	1	250	

数字は粒子数。ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, bi: 黒雲母, mt: 磁鉄鉱。

表3 C-4区における屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	opx (γ)	ho (n_z)
HM-19グリッド	2	opx>ho	1.707-1.710	1.671-1.677
HK-18グリッド	3	opx>ho	1.708-1.711	1.670-1.677

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1983)による。opx: 斜方輝石, ho: 角閃石。

II. 高林三入遺跡C-4区における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

グリッド	試料	種類	重量	前処理・調整	測定法
HK-18	^{14}C -1	腐植質土壌	338.3g	酸洗浄	β 線法(低濃度処理)

2. 測定結果

試料	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代	測定No.
^{14}C -1	15000 \pm 90	-21.7	15050 \pm 90	交点: BC 16050 2 σ : BC 16255 to 15840 1 σ : BC 16155 to 15945	Beta-131262

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。較正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。暦年代の交点とは較正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率)・2 σ (95%確率)は、較正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

3. 考察

放射性炭素(^{14}C)年代測定の結果、C-4区HK-18グリッドの ^{14}C -1では、15050 \pm 90y.BPの年代

値が得られた。この年代値は、テフラ分析の結果から推定される年代(約3.2万年前~2.4万年前)より新しい。高林三入遺跡の土層中には、植物根が認められたことから、年代測定の前段階として年代測定試料から、可能な限り植物根を除去した。今回の年代値が新しくなった原因としては、肉眼で観察できない新しい炭素を含む物質による汚染の可能性が考えられる。

III. 高林三入遺跡C区における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、おもにイネ科植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。

2. 試料

分析試料は、C-4区HK-18グリッドとC-4区HG-18グリッドの2地点から採取された計9点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属 (ヨシ) の換算係数は6.31、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族A (チガヤ属など)、

シバ属

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) C-4区HK-18グリッド

遺構確認面 (試料1) から石器出土層 (試料4) までの各層について分析を行った。その結果、石器出土層 (試料4) では植物珪酸体がほとんど検出されなかった。灰褐色土層 (試料3) から遺構確認面 (試料1) にかけては、キビ族型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。

2) C-4区HG-18グリッド

遺構確認面 (試料1) から灰褐色土層 (試料5) までの各層について分析を行った。その結果、灰褐色土層 (試料5) ではキビ族型、ヨシ属、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。ATの下層 (試料3、4) から上層 (試料1) にかけても、おおむね同様の結果であるが、試料1ではネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型が増加している。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

始良Tn火山灰 (AT, 約2.4-2.5万年前) の下層から上層にかけては、クマザサ属 (ミヤコザサ節を含む) やネザサ節などのタケ亜科を主体としてキビ族やウシクサ族なども生育するイネ科植生が継続されていたと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率 (両者の推定生産量の比率) の変遷は、地球規模の水期-

間氷期サイクルの変動とよく一致することが知られている(杉山・早田, 1996, 杉山, 1997)。ここでは、クマザサ属が優勢であることから当時は比較的寒冷な気候条件下で推移したと考えられるが、ネザサ属も30%前後を占めていることから、その前後の時期よりもやや温暖であった可能性が考えられる。この温暖期は、ATとの層位関係などから、最終氷期の亜間氷期の一つに対比される可能性が考えられる。

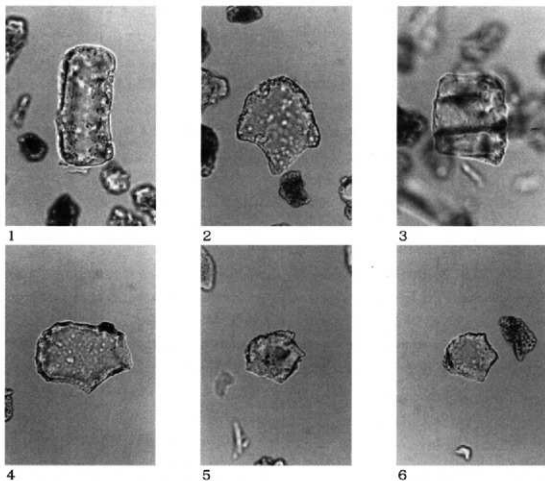
文献: 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号,

p.27-37.

杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.

杉山真二・早田勉 (1996) 植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定—中期更新世以降の氷期—間氷期サイクルの検討—. 日本第四紀学会 講演要旨集, 26, p.68-69.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.



植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真
(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	キビ属型	HG-18グリッド	5
2	ヨシ属	HG-18グリッド	5
3	ネザサ属型	HG-18グリッド	1
4	クマザサ属型	HG-18グリッド	1
5	ミヤコザサ属型	HG-18グリッド	5
6	ミヤコザサ属型	HK-18グリッド	2

0 100 200 μ m

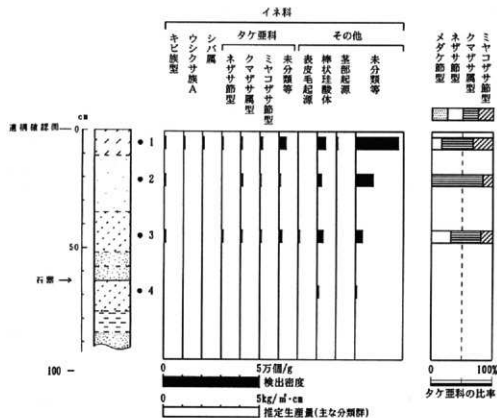


図1 高林三入遺跡、C-4区HK-18グリッドにおける植物珪酸体分析結果

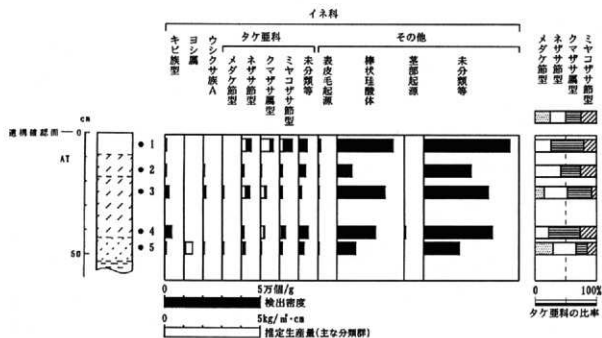


図2 高林三入遺跡、C-4区HG-18グリッドにおける植物珪酸体分析結果

第2節 高林三入遺跡の自然科学分析(2)

株式会社 古環境研究所

1. 高林三入遺跡B・1区のテフラ分析

1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な石器が検出された高林三入遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象に火山ガラス比分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、石器の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、B-4区IN19・20グリッド、I-1区西壁、I-1区北壁の3地点である。

2. 土層の層序

(1) B-4区IN19・20グリッド

B-4区IN19・20グリッドでは、下位より黒泥層(層厚10cm以上)、暗灰色泥層(層厚7cm)、鉄分を多く含んだ黄褐色粘質土(層厚9cm)、黒褐色のマンガン濃集層(層厚3cm)、灰褐色土(層厚7cm)、暗灰褐色土(層厚21cm)、灰褐色土(層厚17cm)、灰色土(層厚7cm)、黄褐色土(層厚10cm)、黄白色粗粒火山灰混じり黄褐色土(層厚13cm)、成層したテフラ層(層厚10cm)、黄褐色土(層厚6cm)が認められる(図1)。ここでは、暗灰褐色土から石器が検出されている。

(2) I-1区西壁

I-1区西壁では、黒灰色土(層厚12cm)の上位に、下位より暗灰褐色土(層厚10cm)、黒褐色土(層厚1cm)、黄白色細粒火山灰層(層厚2cm)、灰色土(層厚2cm)、暗灰色土(層厚0.5cm)、黄灰色粗粒

火山灰層(層厚5cm)、暗灰色土(層厚15cm)が認められた(図2)。

(3) I-1区北壁

I-1区北壁では、暗灰褐色土(層厚8cm)の上位に、下位より黒灰色泥層(層厚4cm)、成層したテフラ層(層厚6.8cm)、黒色土(層厚0.8cm)、黄褐色砂層(層厚4cm)、灰色砂質土(層厚10cm以上)が認められた(図3)。これらのうち、成層したテフラ層は、下位より桃褐色粗粒火山灰層(層厚3cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚1cm)、褐色粗粒火山灰層(層厚1cm)、桃色細粒火山灰層(層厚0.8cm)からなる。このテフラ層は、その層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

B-4区IN19・20グリッドおよびI-1区西壁において、基本的に厚さ5cmごとまたはテフラ層について採取された試料14点を対象に、火山ガラス比分析を行いガラス質示標テフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別比率を求める(火山ガラス比分析)。

(2) 分析結果

B-4区IN19・20グリッドとI-1区西壁における火山ガラス比ダイヤグラムを、各々図4および図5に示す。また、火山ガラス比分析の結果の内訳を表1に示す。

試料21から8にかけて、連続的に透明で平板状のバブル型ガラスが検出される。なかでも試料13にこの火山ガラスの出現ピークが認められる(2.0

%)。試料11から試料7にかけては、マフィック(mafic)鉱物が多く含まれる傾向にある。とくに斜方輝石や単斜輝石のしめる割合が大きい。試料7より上位では、分厚い中間型ガラスが比較的多く含まれる傾向にある。さらに試料5より上位では、これに軽石型のガラスが増加する。とくに試料1には、多くの中間型ガラス(5.6%)や軽石型ガラス(2.4%)が含まれている。

以上のことから、試料13付近に透明なバブル型火山ガラス、試料11付近に斜方輝石や単斜輝石、試料8付近に中間型ガラス、試料5付近および試料1付近に中間型ガラスや軽石型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層があると考えられる。これらのうち、試料1付近に降灰層のあるテフラは、その層位や特徴などから、約1.3~1.4万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に同定される可能性が非常に高い。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

示標テフラとの同定精度を向上させるために、テフラの降灰層があると考えられた試料のうち、試料1を除く4点について、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)により屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。試料13に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.498-1.500(modal range: 1.499-1.500)である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、わずかに角閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.699-1.704である。試料11に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.499-1.501(mode: 1.500)である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、わずかに角閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.703-1.707である。試料8に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.499-1.508である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほ

か、わずかに角閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.703-1.708である。試料5に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.500-1.502である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.704-1.709である。

5. 考察—示標テフラとの同定

試料13に含まれる火山ガラスは、その形態や色調さらに屈折率から、約2.4~2.5万年前^{*)}に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995)と考えられる。したがって、試料13付近に降灰層のある火山ガラス質テフラは、ATと考えられる。なお斜方輝石は、その屈折率から、ATの下位にある八ヶ岳4テフラ(Yt-Pm4, Kawachi et al., 1967, 中谷, 1970, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。

試料11に含まれる火山ガラスは、その屈折率からATに由来すると考えられる。一方、斜方輝石は、その屈折率から、約1.9~2.4万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1996, 未公表資料)に由来すると考えられる。この試料には、ほかに高温型石英が含まれていることから、As-BP Groupの最下部の室田軽石(MP, 森山, 1971, 早田, 1996)の降灰層のある可能性が考えられる。

試料8に含まれるテフラ粒子のうち、火山ガラスについては、比較的屈折率の高い火山ガラスが認められる。斜方輝石の屈折率を合わせて考慮すると、この試料付近に約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石(As-Sr, 町田ほか, 1984, 早田, 1996)の降灰層があると思われる。試料5付近に降灰層のあるテフラについては、その特徴から約1.7万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)や、約1.6万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第2軽石(As-Ok2, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)が考えられる。

以上のことから、検出された石器の層位については、ATの下位からAs-BP Group下部付近にかけてと考えられる。なお1区西壁の黄白色粗粒火山灰層については、透明なバブル型ガラスが非常に多く含まれている。したがって、このテフラはATに同定される。そのすぐ上位にある黄灰色粗粒火山灰層(層厚5cm)については、その層位や層相からMPに同定される可能性が非常に高い。

6. まとめ

高林三入遺跡において地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、下位よりハヶ岳4テフラ(Yt-Pm4)、始良Tn火山灰(AT, 約2.4~2.5万年前¹⁾)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.9~2.4万年前¹⁾)、浅間白糸軽石(As-Sr, 約1.8万年前)、浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1, 約1.7万年前¹⁾)、浅間大窪沢第2軽石(As-Ok2, 約1.6万年前¹⁾)、浅間板鼻黄褐色軽石(As-YP, 約1.3~1.4万年前¹⁾)に由来する可能性の高いテフラ粒子を検出することができた。本遺跡において検出された石器の層位は、ATの下位からAs-BP Group下部付近にかけてと推定される。

¹⁾ 放射性炭素 (¹⁴C) 年代。

文献：新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.

新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.

新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州、始良カルテラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代。第四紀研究, 34, p.377-379.

Kawachi, S., Nakaya, S. and Muraki, K. (1967) YPm-

IV pumice bed in northern Yatsugatake, Yatsugatake volcanic chain, central Japan—studies on Yatsugatake tephra, Part 1-. Bull. Geol. Surv.

Japan, 29, p.21-33.

町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義。科学, 46, p.339-347.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究に關係するテフラのカタログ。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰(AT)の¹⁴C年代。第四紀研究, 26, p.79-83.

森山昭雄 (1971) 榛名火山東・南麓の地形—とくに軽石流の地形について。愛知教育大地理学報告, no.36・37, p.107-116.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山、黒班—前掛期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.

中谷 進 (1970) ハヶ岳東麓のテフラ—特に八那池軽石流を覆うテフラ層中の軽石—。軽石誌, 3, p.30-35.

早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間火山の活動史。御代田町誌自然編, p.22-43.

早田 勉 (1996) 関東地方—東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究に關係するテフラのカタログ—。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰(AT)の¹⁴C年代。第四紀研究, 26, p.79-83.

表1 B-4区IN19・20グリッドにおける火山ガラス比分析結果

試料	bw	md	pm	その他	合計
1	0	14	6	230	250
2	0	1	0	249	250
3	0	7	9	234	250
5	0	6	9	235	250
7	0	4	1	245	250
8	3	4	1	242	250
9	1	0	0	249	250
11	2	0	1	247	250
13	5	1	1	243	250
15	2	1	0	247	250
16	1	0	1	247	250
17	1	0	1	248	250
19	2	0	0	248	250
21	1	1	1	247	250

数字は粒子数, bw: バブル型, md: 中間型,
pm: 軽石型。

表2 B-4区IN19・20グリッドにおける屈折率測定結果

試料	gl (n)	重鉱物	opx (γ)
5	1.500-1.502	opx>cpx	1.704-1.709
8	1.499-1.508	opx>cpx(ho)	1.703-1.708
11	1.499-1.501(1.500)	opx>cpx(ho)	1.703-1.707
13	1.498-1.500(1.499-1.500)	opx>cpx(ho)	1.699-1.704

屈折率の測定は, 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による。屈折率の()は, modeおよびmodal rangeを示す。重鉱物の()は, 量の少ないことを示す。gl: 火山ガラス, opx: 斜方輝石, ho: 角閃石。

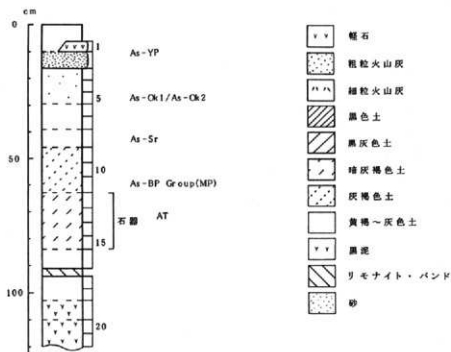


図1 B-4区IN19・20グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

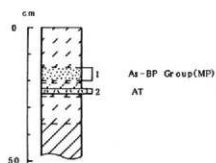


図2 I-1区西壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

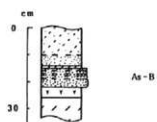


図3 I-1区北壁の土層柱状図

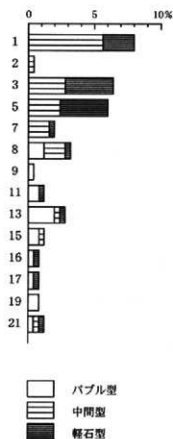


図4 B-4区IN19・20グリッドの火山ガラス比ダイヤグラム

II. 高林三人遺跡B・I区における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO₂) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。

2. 試料

分析試料は、B-4区IN19・20グリッド、I-1区西壁、I-1区北壁の3地点から採取された計10点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキッパ) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮

比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10⁻⁵g) をかけて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヒエ属 (ヒエ) は8.40、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)、Bタイプ

[イネ科-タケ亜科]

ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

[シダ類]

[樹木]

はめ絵バズル状 (ブナ科ブナ属など)

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) B-4区IN19・20グリッド

ATよりも下位層 (試料1～4) について分析を行った。その結果、黒泥～泥層 (試料3、4) では、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族A、イネ科Bタイプ、ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型などが検出された。黄褐色粘質土 (試料2) および灰褐色

土(試料1)でも、おおむね同様の結果であるが、クマザサ属型やミヤコザサ節型が増加傾向を示しており、試料2ではイネ科Bタイプが多量に検出された。イネ科Bタイプはヌマガヤ属に類似しており、水期の湿地性堆積物からは普通に検出されている。タケ亜科の比率を見ると、試料4ではネザサ節型が優勢であるが、試料3から試料2にかけてはクマザサ属型の割合が増加し、試料1ではクマザサ属型が卓越していることが分かる。

2) I-I区西壁

As-BP Group直下層(試料1)からATの下層(試料3)までの層層について分析を行った。その結果、ATより下位の黒灰色土(試料3)では、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族A、イネ科Bタイプ、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、ブナ科コナラ属などが検出された。AT直下層(試料2)からAs-BP Group直下層(試料1)にかけては、イネ科Bタイプが大幅に増加しており、クマザサ属型やミヤコザサ節型は見られなくなっている。タケ亜科の比率を見ると、ATの下層ではクマザサ属型が圧倒的に卓越していることが分かる。

3) I-I区北壁

As-B直上層(試料1)およびAs-B直下層(試料2)について分析を行った。その結果、As-B直下層(試料2)ではヨシ属が多量に検出され、ヒエ属型、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族Aなども検出された。As-B直上層(試料1)では、イネが検出され、ヨシ属は減少している。イネの密度は1,300個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを下回っている。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

(1) B-4区IN19・20グリッド・I-I区西壁

始良Tn火山灰(AT, 約2.4-2.5万年前)より下位の黒泥～泥層の堆積当時は、ヨシ属やイネ科Bタイプの給源植物(ヌマガヤ属?)などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺ではネザサ節やクマザサ属(ミヤコザサ節を含む)なども生育し

ていたと考えられる。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率(両者の推定生産量の比率)の変遷は、地球規模の水期-間水期サイクルの変動とよく一致することが知られている(杉山・早田, 1996)。黒泥層ではネザサ節が優勢であることから、当時はその後の時期よりも比較的温暖な気候であったと推定される。この温暖期は、約3万年前とされる最終水期の亜間水期(酸素同位体ステージ3)に対比される可能性が考えられる。

ATの下層の時期には、周辺にブナ科ブナ属などの落葉広葉樹が生育していたと考えられ、その林床などにクマザサ属などのササ類が分布していたと推定される。クマザサ属が卓越していることから、当時は寒冷な気候条件であったと推定される。AT直下層からAT直上層にかけては、イネ科Bタイプの給源植物(ヌマガヤ属?)を主体としてヨシ属なども生育する湿地的な環境であったと考えられる。

(2) I-I区北壁

浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下層の堆積当時は、ヨシ属が繁茂する湿地的な環境であったと考えられ、周辺ではススキ属やチガヤ属、ヒエ属なども生育していたと推定される。ヒエ属には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを完全に識別することは困難である(杉山ほか, 1988)。また、密度も1,000個/g程度と低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

As-B直上層では比較的少量ながらイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

第6章 自然科学分析

文献：杉山真二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究，第2号，p.27-37.

杉山真二(1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

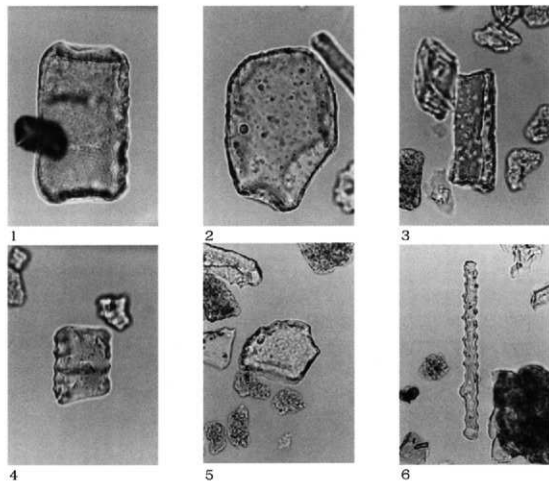
杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕遺跡のための基礎資料として—。考古学と自然科学，20，p.81-92.

杉山真二・早田勉(1996) 植物珪酸体分析による宮城

県高森遺跡とその周辺の古環境推定—中期更新世以降の氷期—間氷期サイクルの検討—。日本第四紀学会講演要旨集，26，p.68-69.

藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学，17，p.73-85.



植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

No.	分類群	地点	試料名
1	ヒエ属型	I-1区北壁	1
2	ヨシ属	I-1区西壁	2
3	イネ科B	B-4区IN19・20	1
4	ネザサ属型	B-4区IN19・20	4
5	クマザサ属型	B-4区IN19・20	3
6	棒状珪酸体	I-1区西壁	1

0 100 200 μm

表1 群馬県、高林三人遺跡における植物遺体分析結果
 輸出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料						I-1区西壁			I-1区北壁									
		1	2	3	4	1	2	2'	3	1	2	3								
イネ科	Gramineae (Grasses)																			
	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)																			13
	Echinochloa type																			7
	Panicum type																			7
	<i>Phragmites</i> (reed)		7	7	14															13
	<i>Miscanthus</i> type																			7
	Andropogoneae A type																			7
	B. type																			47
	B. C. type																			28
	タケ科	37	191	64	28					289	379	61	50							13
	Bambusoideae (Bamboos)																			
	<i>Phaiobolus</i> sect. <i>Nezazor</i>	7	21	7	28															
	<i>Sasa</i> (except <i>Miyabanzasa</i>)	45	28	7	14															
	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyabanzasa</i>	67	14	14	7															
	Others	52	21		71					7		27	22							
	その他のイネ科																			
	表皮毛起源	15	7	14																
	棒状結晶体	157	354	242	85					176	168	273	445							575
	茎部起源									28										7
	茎分節等																			7
	葉分節等	403	425	335	291					387	442	457	424							456
	シダ類																			
	樹木起源																			
	多角形板状(コナラ属など)																			
	Arboreal																			
	Polygonal plate shaped (<i>Quercus</i>)																			
	植物遺体総数	783	1075	705	547					915	1045	927	1092							1166
	Total																			775

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²-cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)																			
ヒエ属型	Echinochloa type																			0.39
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)					0.45				0.44	3.10	0.43	0.45							0.58
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type																			0.85
ネササ草型	<i>Phaiobolus</i> sect. <i>Nezazor</i>	0.04	0.10	0.03	0.14															5.29
ネササ草型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyabanzasa</i>)	0.34	0.21	0.05	0.11															0.08
クマササ草型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyabanzasa</i>	0.20	0.04	0.04	0.02															0.09
ミヤコササ草型																				
タケ類科の比率(%)																				
メタケ草型	<i>Phaiobolus</i> sect. <i>Misake</i>	6	29	26	52															
ネササ草型	<i>Phaiobolus</i> sect. <i>Nezazor</i>	59	60	41	40															86
クマササ草型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyabanzasa</i>)																			92
ミヤコササ草型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyabanzasa</i>	35	12	33	8															14
																				8

III. 高林三入遺跡B区における花粉分析

1. 試料

試料は、B-4区1N19・20グリッドから採取された4点である。これらは植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。

5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。

6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1500rpm、2分間)の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。検鏡は生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

3. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉4、草本花粉5、シダ植物胞子2形態の計11である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真

に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕 カバノキ属、クリ、シイ属、ニレ属
ーケヤキ

〔草本花粉〕 イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科
ーヒユ科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕 単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

分析の結果、試料4からはカバノキ属、クリ、ヨモギ属、イネ科などが検出されたが、いずれも少量である。その他の試料からは、花粉は検出されなかった。

4. 考察

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、始良Tn火山灰(AT, 約2.4-2.5万年前)より下位の黒泥層の堆積当時は、カバノキ属やクリなどの落葉広葉樹が生育する温帯もしくは温帯上部の冷温帯気候であったと推定される。また、周囲にはヨモギ属やイネ科などが生育する草原も分布していたと推定される。花粉などの有機質遺体が検出されない原因として、土壌生成作用などによって花粉などの有機質遺体が分解されたことが考えられる。

文献

- 中村純(1973)花粉分析, 古今書院, p.82-110.
金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
中村純(1980)日本産花粉の標微, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

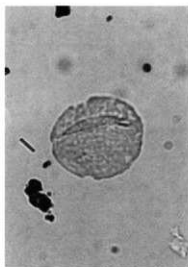
表1 高林三入遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	B-4区IN19・20グリッド			
		1	2	3	4
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Betula</i>	カバノキ属				1
<i>Castanea crenata</i>	クワ				1
<i>Castanopsis</i>	シイ属				1
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ				1
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科				2
Cyperaceae	カヤツリグサ科				1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科				1
Asteroidae	キク亜科				17
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属				1
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolete type spore	単条溝胞子				1
Tribilate type spore	三条溝胞子				1
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	0	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	0	22
Total pollen	花粉総数	0	0	0	26
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	2
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	0	2
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかでない消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)

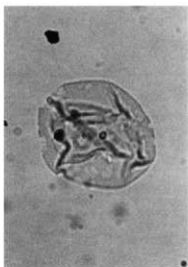
高林三入遺跡の花粉・胞子遺体



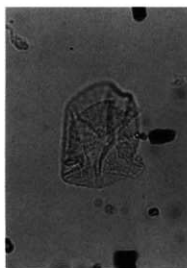
1 カヤツリグサ科



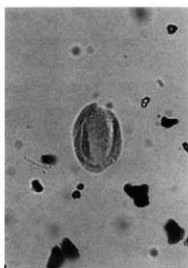
2 ニレ属-ケヤキ



3 イネ科



4 カヤツリグサ科



5 ヨモギ属



6 シダ植物三条溝胞子

— 10μm

第3節 八反田遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

群馬県中央部とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の推定年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された八反田遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層や遺構の層位および年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、深掘トレンチおよび6号溝SPC-C'の2地点である。

2. 土層層序

(1) 深掘トレンチ

深掘トレンチでは、下位より灰色粘質土（層厚3cm以上）、灰白色粗粒火山灰混じり黒泥層（層厚14cm）、黒泥層（層厚7cm）、白色粘土層（層厚0.3cm）、正の酸化構造が認められる灰色火山灰層（層厚5cm）、灰色粘土層（層厚0.6cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚11cm）、黒泥層（層厚3cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚12cm）、白色粘土層（層厚0.8cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚7cm）、灰色粘土層（層厚3cm）、白色粗粒火山灰混じり灰色粘土層（層厚2cm）、灰色粘土層（層厚2cm）、白色粗粒火山灰層（層厚2cm）、白色粘土層（層厚9cm）、灰色粘質土（層厚11cm）、暗灰色粘質土（層厚9cm）、灰色砂質土（層厚34cm）が認められる（図1）。

これらのうち、正の酸化構造が認められる火山灰層については、層相から約2.4~2.5万年前¹に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976、1992、松本ほか、1987、村

山ほか、1993、池田ほか、1995）に同定される可能性が高い。またその上位の3層の黄色粗粒火山灰層については、層位や層相などから、約1.9~2.4万年前²に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group、新井、1962、早田、1996、未公表資料）と考えられる。

(2) 6号溝SPC-C'

6号溝SPC-C'における覆土は、下位より砂混じり暗灰色泥層（層厚5cm、6層）、砂混じり暗灰色泥層（層厚10cm、5層）、砂混じり暗褐色粘質土（層厚11cm、4層）、黒灰色粘質土（層厚25cm、3層）、桃色細粒火山灰層ブロック混じり暗褐色砂質土（層厚29cm、2層）、砂混じり暗褐色土（層厚23cm、1層）からなる（図2）。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

6号溝SPC-C'において、基本的に厚さ5cmごとに設定採取された試料のうち、5cmおきの9点についてテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を記載する。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。6号溝SPC-C'では、試料17や試料15さらに試料11には、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径2.1mm）が少量ずつ含まれている。この軽石の班品には、角閃石や斜方輝石が認められる。また試料15には、スポンジ状に比較的良好に発泡した灰白色軽石（最大径1.3mm）も含まれている。この軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

さらに試料9より上位では、スポンジ状に比較的良好に発泡した淡褐色軽石（最大径3.1mm）が含

れている。この軽石の班皿には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、とくに試料7より上位に多く含まれており、土層観察の結果と合わせると、試料7付近にその降灰層があると考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

示標テフラとの同定精度を向上させるために、6号溝SPC-C'の試料15および試料7の2点について、日本列島とその周辺のテフラ・カタログ作成にも利用された温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。6号溝SPC-C'の試料15に含まれる重鉱物としては、斜方輝石のほか、単斜輝石や角閃石がある。斜方輝石(γ)と角閃石(n_2)の屈折率は、各々1.708-1.710と1.672-1.677である。

一方、試料7に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.528-1.533である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.708-1.710である。

5. 考察

6号溝SPC-C'の試料15に含まれるテフラのうち、灰白色軽石や斜方輝石の多くについては、その特徴から4世紀中葉¹⁾に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来すると考えられる。

また、白色軽石や角閃石については、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳浅川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)、または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名伊香保二ツ岳軽石(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。本遺跡とテフラの分布の関係からは、前者の可能性がより高いように思われる。

一方、試料7(2層基底部)に含まれるテフラは、軽石の特徴や重鉱物の組合せ、さらに火山ガラスや

斜方輝石の屈折率などから、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来すると考えられる。このことは、その降灰層付近にAs-B最上部付近の桃色細粒火山灰層がブロック状に含まれていることとも矛盾しない。以上のことから、6号溝については、Hr-FAより上位でAs-Bより下位にあると考えられる。

6. まとめ

八反田遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、6号溝の覆土からは、下位より浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉²⁾)、榛名二ツ岳浅川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)などを検出することができた。とくに覆土中にAs-Bの降灰層があることから、6号溝の層位については、Hr-FAより上位でAs-Bより下位にあると考えられる。また溝の基盤にあたる土層では、始良Tn火山灰(AT, 約2.4~2.5万年前¹⁾)や浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.9~2.4万年前¹⁾)など後期旧石器時代の示標テフラを観察することができた。

¹⁾ 放射性炭素(¹⁴C)年代。

²⁾ 現在では4世紀を越えるとする説が有力になっているようである(たとえば、若狭, 2000)。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「3世紀後半」あるいは「3世紀終末」と考えておくのが妥当なかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献: 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79。

新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフラクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269。

新井房夫(1979)関東平野北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, p.41-52。

新井房夫(1993)温度一定型屈折率測定法。日本第四

紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」, p.138-148.

荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質. 地質研専報, 14, 45p.

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流の炭化樹木の加速器 ^{14}C 年代. 第四紀研究, 34, p.377-379.

町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰－始良Tn火山灰の発見とその意義－. 科学, 46, p.339-347.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の ^{14}C 年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ピストンコア試料を用いたAT

火山灰噴出年代の再検討－タンデム加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の ^{14}C 年代. 地質雑, 99, p.787-798.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 黒班～前揚期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.

坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.

早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御厩第1テフラより上位のテフラについて－. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

若狭 徹 (2000) 群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
6号溝SPC-C'	1	+++	淡褐	3.1
	3	+++	淡褐	2.9
	5	+++	淡褐	2.1
	7	+++	淡褐	2.4
	9	+	淡褐	1.0
	11	+	白	0.9
	13	-	-	-
	15	+	白, 灰白	1.3, 1.3
	17	+	白	2.1

+++ : とくに多い, ++ : 多い, + : 中程度, - : 少ない, - : 認められない.
最大径の単位は, mm.

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)	角閃石 (m)
6号溝SPC-C'	7	1.528-1.533	opx>cpx	1.708-1.710	-
6号溝SPC-C'	15	-	opx>cpx, ho	1.708-1.710	1.672-1.677

屈折率の測定法は、温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993). () : modal range.
 opx: 斜方輝石, ho: 角閃石. 重鉱物の()は、量が少ないことを示す.

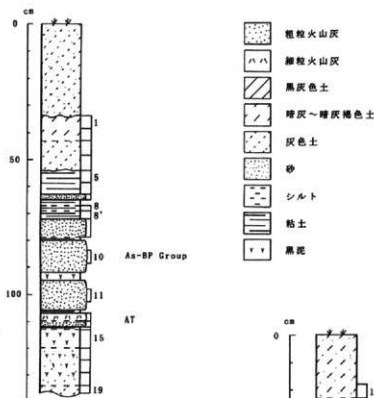


図1 深掘トレンチの土層柱状図
 数字はテフラ分析の試料番号

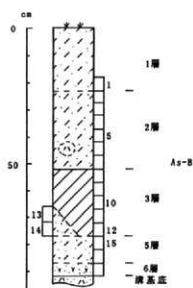


図2 6号溝SPC-C'の土層柱状図
 数字はテフラ分析の試料番号

第4節 高林三入遺跡出土人骨・馬骨

1 高林三入遺跡出土人骨

はじめに

高林三入遺跡は、群馬県太田市高林北町・同岩瀬川町・同福沢町に所在する。東毛幹線道路建設事業に伴う発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により、平成11(1999)年度・同15(2003)年度・同16(2004)年度に4回に分けて行われた。出土人骨は、すべて、平成16(2004)年8月に出土している。本遺跡のA区72号土坑及び同80号土坑より、人骨が出土したので以下に報告する。

出土人骨は、水洗あるいは清掃後、できる限りの接着及び復元を行い、写真撮影・観察・計測を行った。なお、人骨の計測はマルティン [Martin] の方法(馬場、1991)に従い、歯の計測は藤田(藤田、1949)の方法に従った。

1. A区72号土坑出土人骨

時代は、出土遺物及び出土状況から、近世末に比定されている。

橋崎 修一郎

(1) 人骨の出土状況

本土坑は、1号方形周溝墓と重複して検出されている。土坑は、長軸118cm・短軸81cm・深さ42cmの規模である。但し、深さは、もう少し深かった可能性があるという。

(2) 人骨の出土部位

人骨の残存状態は、非常に悪い。人骨の出土部位は、遊離歯7本のみである。

(3) 副葬品

副葬品は、銭貨(寛永通宝)が出土している。

(4) 被葬者の頭位・埋葬状態

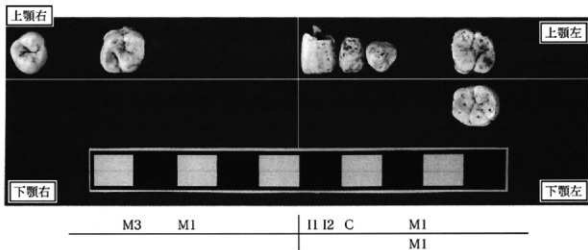
土坑の北東部から歯が出土しているので、被葬者の頭位は北東で、埋葬状態は恐らく屈葬であると推定される。

(5) 被葬者の個体数

出土遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は、1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別

性別推定の示標となる頭蓋骨や寛骨が出土してい



註：歯式は、II (第1切歯)・I2 (第2切歯)・C (犬歯)・M1 (第1大白歯)・M3 (第3大白歯)を意味する。

写真1. 高林三入遺跡A区72号土坑出土歯

ないので、性別推定は困難である。しかしながら、歯冠計測値、特に上顎犬歯の大きさが小さいので、被葬者の性別は女性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の咬耗度を観察すると、上顎犬歯及び下顎大白歯は象牙質が点状に露出する状態である。また、その他の歯の咬耗は、エナメル質に限定されている。したがって、被葬者の死亡年齢は約20歳代であると推定される。

(8) 出土人骨の古病理

①歯石

出土遊離歯7本の内、上顎右第1大白歯の頰側面に一部歯石の付着が認められた。

②齧蝕(虫歯)

出土遊離歯7本には、俗に虫歯と呼ばれる齧蝕は認められなかった。

2. A区80号土坑出土人骨

時代は、出土遺物及び出土状況より、近世末に比定されている。

(1) 人骨の出土状況

本土坑は、1号方形周溝墓と重複して検出されている。土坑は、長軸94cm・短軸86cm・深さ60cmの規模である。但し、深さは、もう少し深かった可能性があるという。

(2) 人骨の出土部位

人骨の残存状態は、悪い。遊離歯19本及び下肢骨(左右大腿骨・左脛骨・左距骨)が出土している。

(3) 副葬品

副葬品は、銭貨(寛永通宝)及び木製の櫛が出土している。

(4) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の頭位は不明であるが、下肢骨が土坑の南西部から出土しているため、恐らく北東であると推定される。埋葬状態は、恐らく屈葬であると推定される。

(5) 被葬者の個体数

出土遊離歯及び出土人骨には重複部位が認められ

ないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別

性別推定の示標となる頭蓋骨及び寛骨は出土していないが、出土歯の歯冠計測値及び出土四肢骨の計測値が比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、上下顎の切歯・犬歯・小白歯では、象牙質が線状あるいは点状に露出する程度である。ところが、上下顎左右第1大白歯は、エナメル質がほとんどなくなり象牙質が全面に露出する程度であるが上顎左第2大白歯はエナメル質のみの咬耗である。この上下顎左右第1大白歯の咬耗は通常の咬耗ではなく、異常増耗であると推定される。恐らく、歯を使用して皮をなめしたり樹皮をしごいて繊維にする作業等を行ったのであろう。したがって、ここでは、上下顎の切歯・犬歯・小白歯の咬耗度を採用し、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

(8) 被葬者の古病理

①歯石

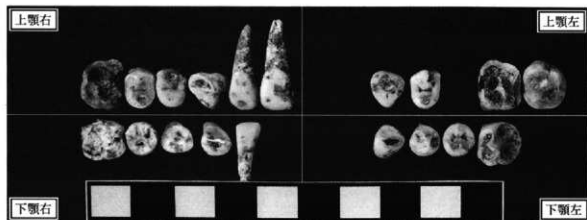
出土遊離歯19本には、歯石の付着は認められなかった。

②齧蝕(虫歯)

俗に虫歯と呼ばれる齧蝕は、上顎右第2小白歯の遠心面歯頸部にエナメル質の齧蝕である第1度齧蝕(C1)が、また上顎左右第1大白歯の近心面に象牙質に達する第2度齧蝕(C2)が認められた。

③斑状歯

上顎右第1及び第2切歯の歯冠唇側面に、暗褐色の斑状歯が認められた。これは、歯冠のエナメル質表面が白濁あるいは暗褐色に色素沈着している状態であり、世界中で報告事例があり、花崗岩が多く存在する地方で飲料水に含まれるフッ素に関係があるとされている(鈴木, 1964)。実は、群馬県北部において飲料水にフッ素が多い地域が認められているが、この斑状歯が実際にフッ素によるものかどうか



M1 P2 P1 C I2 I1	C P1 M1 M2
M1 P2 P1 C I2	C P1 P2 M1

註：歯式は、I1（第1切歯）・I2（第2切歯）・C（犬歯）・P1（第1小臼歯）・P2（第2小臼歯）
 ・M1（第1大白歯）・M2（第2大白歯）を意味する。

写真2. 高林三入遺跡A区80号土坑出土歯

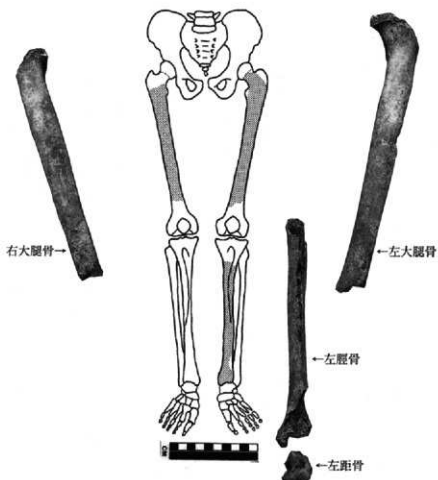


写真3. 高林三入遺跡A区80号土坑出土四肢骨

は、将来的に化学分析を行う必要がある。

II人骨計測法」、雄山園出版

謝辞

本出土人骨を記載する機会を与えていただき、考古学的情報をいただいた(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の今井和久氏に感謝いたします。

藤田恒太郎 1949 歯の計測規準について、「人類学雑誌」、61:1-6.

植田和良 1959 歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」、67:151-163.

MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum monographs No.9, National Science Museum.

引用文献及び参考文献

馬場悠男 1991 「人類学講座別巻1、人体計測法、

表1. 高林三入道跡出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	項目	高林三入道跡				中世時代人		江戸時代人		現代人			
		72号土坑		80号土坑		♂	♀	♂	♀	♂	♀		
		右	左	右	左								
上	I1	MD	8.8	8.5	—	8.48	8.29	8.78	8.38	8.67	8.55		
		BL	—	破損	7.2	—	7.29	7.00	7.52	7.00	7.35	7.28	
	I2	MD	—	6.5	7.3	—	6.96	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05	
		BL	—	破損	6.5	—	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51	
	C	MD	—	7.4	8.2	8.4	7.96	7.43	8.01	7.80	7.94	7.71	
		BL	—	7.7	8.9	8.9	8.50	7.94	8.66	8.03	8.52	8.13	
	P1	MD	—	—	7.5	7.4	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37	
		BL	—	—	9.6	9.6	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43	
	P2	MD	—	—	7.3	—	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94	
		BL	—	—	10.0	—	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23	
	M1	MD	10.6	10.8	10.0	10.1	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47	
		BL	11.0	11.3	11.6	11.7	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40	
M2	MD	—	—	—	10.4	9.65	9.42	9.88	9.48	9.91	9.74		
	BL	—	—	—	11.7	11.72	11.19	12.00	11.52	11.85	11.31		
M3	MD	8.9	—	—	—	—	—	—	—	8.94	8.86		
	BL	10.6	—	—	—	—	—	—	—	10.79	10.50		
下	I2	MD	—	—	6.1	—	6.04	5.78	6.09	5.97	6.20	6.11	
		BL	—	—	6.2	—	6.22	5.98	6.29	6.11	6.43	6.30	
	C	MD	—	—	7.4	7.3	6.88	6.55	7.06	6.69	7.07	6.88	
		BL	—	—	8.2	8.3	7.82	7.33	8.04	7.39	8.14	7.50	
	P1	MD	—	—	7.7	7.4	7.07	6.96	7.32	7.05	7.31	7.19	
		BL	—	—	7.8	7.7	8.10	7.72	8.34	7.89	8.08	7.77	
	P2	MD	—	—	8.3	8.0	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42	7.29	
		BL	—	—	8.3	8.3	8.49	8.06	8.68	8.30	8.53	8.26	
	M1	MD	—	—	11.7	破損	11.8	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72	11.32
		BL	—	—	10.3	破損	11.0	11.00	10.49	11.15	10.62	10.89	10.55

注1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。

注2. 歯種は、I1(第1切歯)・I2(第2切歯)・C(犬歯)・P1(第1小臼歯)・P2(第2小臼歯)・M1(第1大臼歯)・M2(第2大臼歯)・M3(第3大臼歯)を意味する。

注3. 計測項目は、MD(歯冠近遠心径)・BL(歯冠唇舌径)を意味する。

注4. 「破損」は、歯冠が破損しており計測ができなかったことを示す。

注5. 「♂」は、MATSUMURA(1995)より引用。なおMATSUMURA(1995)には、

M3(第3大臼歯)のデータは無い。

注6. 「**」は、植田(1959)より引用。

表2. 高林三入道跡80号土坑出土人骨四肢骨計測値及び比較表

大 腿 骨	高林三入道跡		由比ヶ浜遺跡(中世)		近世人骨		
	右	左	♂	♀	♂	♀	
6 骨体中央矢状径	27 mm	27 mm	27.32 mm	25.06 mm	28.3 mm	24.8 mm	
7 骨体中央横径	30 mm	30 mm	26.27 mm	24.13 mm	27.4 mm	24.1 mm	
8 骨体中央周	90 mm	88 mm	84.90 mm	77.69 mm	87.2 mm	76.9 mm	
9 骨体上横径	—	33 mm	31.01 mm	28.69 mm	30.7 mm	26.5 mm	
10 骨体上矢状径	—	25 mm	24 mm	23.95 mm	21.94 mm	27.8 mm	25.5 mm
6:7 骨体中央断面指数	90.0	90.0	104.49	104.2	103.9	103.1	
10:9 骨体上断面指数	—	72.7	77.68	76.54	91.2	97.3	
前 脛 骨	右	左	♂	♀	♂	♀	
6 最大下脚径	—	41 mm	51.71 mm	49.00 mm	49.6 mm	43.6 mm	
7 下脚矢状径	—	36 mm	36.47 mm	32.33 mm	35.7 mm	31.3 mm	
9a 茎突孔位横径	—	21 mm	23.50 mm	21.57 mm	23.7 mm	21.2 mm	
10a 茎突孔位周	—	86 mm	89.93 mm	81.00 mm	89.3 mm	78.1 mm	
10b 骨体最小周	—	67 mm	72.88 mm	65.83 mm	70.8 mm	63.7 mm	

2 高林三入遺跡出土馬骨

はじめに

高林三入遺跡は、群馬県太田市高林北町・同岩瀬川町・同福沢町に所在する。東毛幹線道路建設事業に伴う発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により、平成11(1999)年度・同15(2003)年度・同16(2004)年度に4回に分けて実施された。本遺跡のA区78号土坑より、近世末の馬骨[*Equus caballus*]が出土したので以下に報告する。なお、馬骨の計測方法は、フォン・デン・ドリッシュに従った(von den Driess, 1976)。また、馬骨の出土部位図は、図1は久保・松井(1999)を、図2～図5は望月(1999)をそれぞれ改変して使用した。

1. 馬骨の出土状況 [写真1参照]

馬骨は、長軸1.52m・短軸76cm・深さ72cmの楕円形土坑より出土している。しかしながら、本土坑の東側は調査区外であったために、全容は不明である。



写真1 高林三入遺跡A区78号土坑出土馬骨出土状況

2. 馬骨の出土部位 [図1～図5参照]

馬骨の出土部位は、左右の前後肢骨である。しかしながら、前後肢の内、出土しているのは中手骨・中足骨・基節骨・中節骨であり、上腕骨・橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨は出土していない。恐らく、馬骨の大部分は、調査区外である土坑の東側に残存して

横崎 修一郎

いるものと推定される。

3. 馬骨の頭位・埋葬状態

馬骨の頭位及び埋葬状態は、不明であるが、馬骨の出土状況から、前肢及び後肢がX状に交差している状態である。このような埋葬状態は、群馬県では中尾遺跡に認められる。大江正直によると、馬の死後硬直は、死後1.5時間～8.5時間で頭頸部から始まり、その状態が10時間～20時間継続した後、18時間～55時間で緩解するという(大江, 2000)。前肢に死後硬直が現れるのは、死後4～11時間であり、後肢は前肢に引き続いて始まるという。そこで、死後半日以内に埋葬し、後肢は前肢に比べて筋肉が大きく、人の手の力ではなかなか曲げがたいので、前に引いているという解釈を行っている(大江, 2000)。

4. 馬骨の個体数

出土馬骨には、重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。

5. 馬骨の性別

馬の性別は、犬歯の有無及び寛骨で推定することが可能である。しかしながら、今回、頭蓋骨及び寛骨は出土しておらず前後肢骨のみであるため、犬歯の有無及び寛骨による性別の推定は不可能である。したがって、馬骨の性別は不明である。

6. 馬骨の死亡年齢

馬の死亡年齢は、歯の咬耗の状態で推定することが可能である。しかしながら、今回、頭蓋骨及び歯が出土していないため、死亡年齢の推定は困難である。出土前後肢骨の骨端の骨化を観察すると、すべて骨化が完了している状態である。馬の中手骨及び中足骨の場合、骨化は近位端では生前に、遠

位端は約1.5歳で完了すると言われている。また、指骨の場合、近位端は約1歳で、遠位端は生前に完了すると言われている。したがって、本個体の死亡年齢は約1.5歳以上としか推定することはできない。

7. 体高

中手骨及び中足骨の最大長から、体高を推定すると、中手骨からは約137cm、中足骨からは約133cmという結果になった。したがって、本個体の体高は、約133cm～約137cmであると推定される。馬の場合、体高105cm～122cmを小型馬に、また129cm～138cmを中型馬に分類するのが一般的であるので、本個体は中型馬に分類される。

8. 群馬県出土馬骨の体高

群馬県から出土した馬骨で、体高が推定されているものには、以下の遺跡がある。

それらは、下佐野遺跡（宮崎、1986）・三ッ寺遺跡（宮崎、1988）・上栗須遺跡（宮崎、1989）・下川田下原遺跡（宮崎、1993）・元総社寺田遺跡（宮崎、1996）・上栗須寺前遺跡（宮崎、1996）・中里見原遺跡（大江、2000）である。

これらの遺跡から出土した馬骨から推定された生前の体高は、それぞれ、下佐野遺跡 [132cm・119cm]・三ッ寺遺跡 [102cm]・上栗須遺跡 [平均126.4cm]・下川田下原遺跡 [120.5cm・124.7cm・133.7cm]・元総社寺田遺跡 [159.4cm・131.6cm・142.8cm・133.3cm・130.7cm・128.7cm]・上栗須寺前遺跡 [平均122.1cm]・中里見原遺跡 [平均126.5cm] である。このように、群馬県出土馬骨は、小型馬及び中型馬が多く出土している。

9. 馬骨の古病理

出土馬骨には、病的な所見及びカット・マーク等は認められなかった。

まとめ

高林三人遺跡の近世末に推定されるA区78号土坑より、馬骨が出土した。出土馬骨の出土部位は、前後肢のみで、距骨・中手骨・中足骨・基節骨・中節骨が主である。恐らく、馬骨本体の頭蓋骨・脊椎骨・肩甲骨・上腕骨・尺骨・橈骨・寛骨・大腿骨・脛骨等は、調査区外であった土坑の東側に残存しているものと推定される。馬骨は、1個体で、性別不明で死亡年齢は約1.5歳以上であると推定された。中手骨及び中足骨の計測値から体高を推定すると、約133cm～137cmという結果になった。これは、本出土馬骨が、中型馬に分類されることになる。

謝辞

本出土馬骨を記載する機会を与えていただき、考古学的情報をいただいた（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団の今井和久氏に感謝いたします。また、文献をご提供いただいた、元群馬県畜産試験場場長で獣医師の大江正直氏に感謝いたします。

引用文献及び参考文献（著者のABC順）

- 久保和士・松井 章 1999 第10章. 家畜その2：ウマ・ウシ、『考古学と自然科学②：考古学と動物学』（西本豊弘・松井 章編）、同成社、p.169-208.
- 近藤誠司 2001 『ウマの動物学』、東京大学出版会
- 宮崎重雄 1986 下佐野遺跡（13地区）出土の馬骨について、『下佐野遺跡』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎重雄 1988 三ッ寺I遺跡出土の獣骨類について、『三ッ寺I遺跡』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎重雄 1989 上栗須遺跡の馬骨、『上栗須遺跡・下大塚遺跡・中大塚遺跡』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎重雄 1993 下川田下原遺跡出土馬骨、『下川田下原遺跡・下川田平井遺跡』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎重雄 1996 元総社寺田遺跡Ⅵ区・Ⅶ区出土人骨・獣骨の分析、『元総社寺田遺跡Ⅲ』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

宮崎重雄 1996 上栗須寺前遺跡3区出土の馬骨・馬骨、『上栗須寺前遺跡群Ⅱ』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

望月公子監訳 1992 『獣医解剖カラーアトラス馬の解剖』(Raymond R. ASHDOWN & Stanley H. DONE 著)、西村書店

大江正直 2000 第2節第1項 中里見原遺跡出土の獣

骨・獣骨観察について、『中里見遺跡群』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

大江正直 2002 『動物遺存体調査の手びき』、私家版。

Von Den DRIESCH, Angela 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*, Harvard University.

表1. 高林三入遺跡出土馬骨計測値

計測部位と計測項目〔()内は、Von den Drieschの定義〕	計測値	
前 肢		
中 手 骨		
最大長 (GL: Greatest Length)	224mm	224mm
近位端幅 (Bp: Greatest Breadth of the Proximal End)	45mm	破損
近位端厚 (Dp: Greatest Depth of the Proximal End)	33mm	破損
骨幹最小幅 (SD: Smallest Breadth of the Diaphysis)	34mm	破損
遠位端幅 (Bd: Greatest Breadth of the Distal End)	46mm	46mm
基 節 骨		
最大長 (GL: Greatest Length)	86mm	89mm
近位端幅 (Bp: Greatest Breadth of the Proximal End)	破損	51mm
近位端厚 (Dp: Greatest Depth of the Proximal End)	破損	34mm
骨幹最小幅 (SD: Smallest Breadth of the Diaphysis)	破損	33mm
後 肢		
距 骨		
最大幅 (GB: Greatest Breadth)	58mm	破損
外側関節面幅 (BFd: Breadth of the Facies Articularis Distalis)	50mm	55mm
足 根 骨		
最大幅 (GB: Greatest Breadth) [中心足根骨]	49mm	49mm
最大幅 (GB: Greatest Breadth) [第4足根骨]	44mm	45mm
中 足 骨		
最大長 (GL: Greatest Length)	267mm	265mm
近位端幅 (Bp: Greatest Breadth of the Proximal End)	46mm	45mm
遠位端幅 (Bd: Greatest Breadth of the Distal End)	46mm	破損
基 節 骨		
最大長 (GL: Greatest Length)	81mm	84mm
近位端厚 (Dp: Greatest Depth of the Proximal End)	破損	37mm
中 節 骨		
近位端厚 (Dp: Greatest Depth of the Proximal End)	破損	31mm

註: 「破損」は、馬骨が破損しており計測ができなかったことを示す。

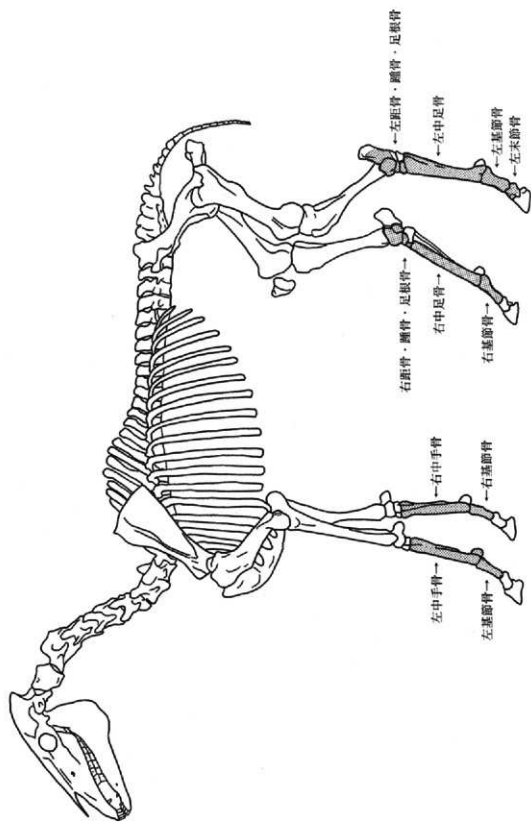


图1. 高林三入遺跡A区78号土坑出土馬骨出土部位圖 [久保・松井, 1999を改変]

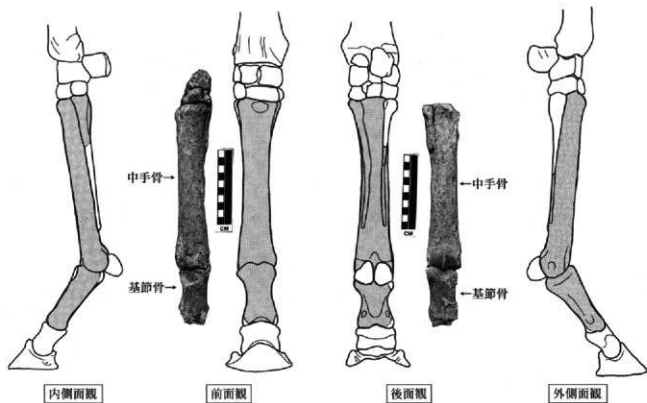


图2. 高林三入遺跡A区78号土坑出土馬骨右前肢写真及ひ出土部位図 [望月、1992を改変]

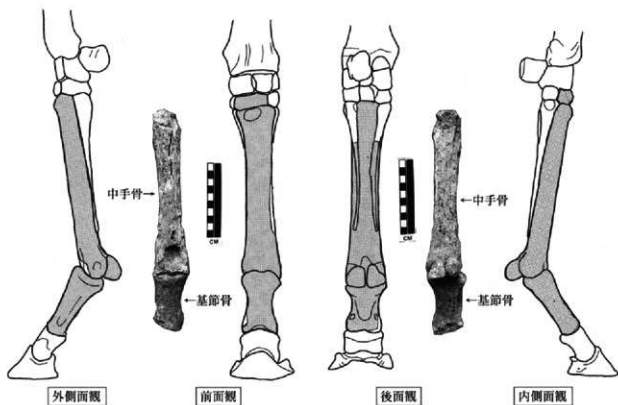


图3. 高林三入遺跡A区78号土坑出土馬骨左前肢写真及ひ出土部位図 [望月、1992を改変]

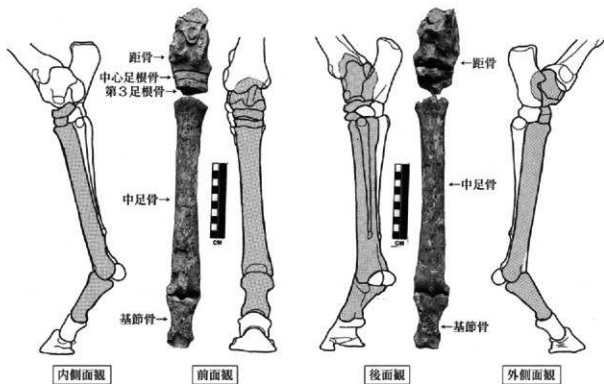


图4. 高林三入道跡A区78号土坑出土馬骨右後肢写真及び出土部位图 [望月、1992を改变]

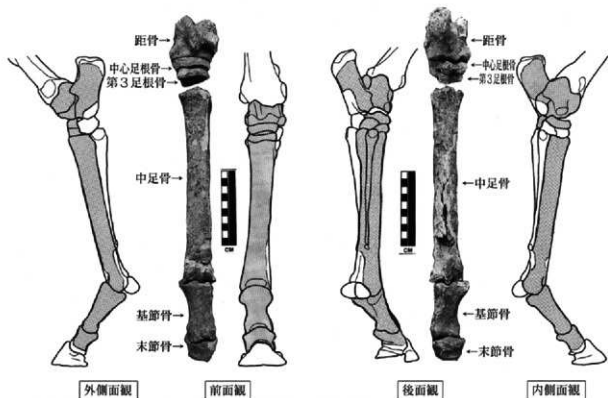


图5. 高林三入道跡A区78号土坑出土馬骨左後肢写真及び出土部位图 [望月、1992を改变]

遺物觀察表

高林三入遺跡

A区1号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
26-1 PL43	須恵器 杯	床直	体~底部 1/3	口 - 底 6.6 高 (2.5)	①細砂粒、白色粒 ②還元焼 ③5YR6/1灰	成・整形技法の特徴	右回転軸整形。底部右回転糸切り。
26-2 PL43	須恵器 杯	床直	口縁部片	口 (12.6) 底 - 高 (3.1)	①細砂粒、白色粒 ②還元焼 ③5YR6/1灰	成・整形技法の特徴	右回転軸整形。口縁部はやや丸味を帯びて立ち上がる。
26-3 PL43	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (20.6) 底 - 高 (4.2)	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR6/8橙	成・整形技法の特徴	「コ」の字状の口縁部。内外面口縁部横溝で。

A区2号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
28-1 PL43	土師器 杯	床直	口縁部片	口 (12.0) 底 - 高 (2.9)	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR6/4にぶい橙	成・整形技法の特徴	外面へう削り。内外面口縁部横溝で。内面へう無し。

A区3号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
29-1 PL43	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (12.0) 底 - 高 (2.2)	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR6/8橙	成・整形技法の特徴	S字状の口縁部。内外面口縁部横溝で。

A区1号方形周溝墓遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (周溝内)	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
30-1 PL43	土師器 甕	覆土	底部片	口 - 底 丸底 (3.1) 高 -	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にぶい橙	成・整形技法の特徴	外面へう削り。内面へう磨き。内面器面摩滅。
30-2 PL43	土師器 甕	+38	頸部片	口 - 底 - 高 (6.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR7/2黄橙	成・整形技法の特徴	外面丁寧な刷毛目。内面刷毛目工具による磨で。
30-3 PL43	土師器 高杯	+40	頸部片	口 - 底 12.3 高 (7.3)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③5YR6/6橙	成・整形技法の特徴	外面丁寧なへう磨き。裾部内外面横溝で。内面へう無し。
30-4 PL43	土師器 高杯	覆土	裾部片	口 - 底 (16.0) 高 (0.8)	①細砂粒 ②酸化焼 ③2.5YR5/6明赤褐	成・整形技法の特徴	内外面丁寧なへう磨き。内外面赤色塗彩。
30-5 PL43	土師器 台付甕	+28~38	胴~有部片	口 - 底 (9.2) 高 (15.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい橙	成・整形技法の特徴	外面刷毛目。内面へう磨で。結合部に砂粒の多い粘土を付着。
30-6 PL43	土師器 台付甕	+21	口縁部片	口 (17.3) 底 - 高 (5.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③5YR6/8橙	成・整形技法の特徴	外面斜位の刷毛目後、横位の刷毛目。内面へう磨で。器面摩滅。
30-7 PL43	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (18.2) 底 - 高 (4.4)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR6/4にぶい黄橙	成・整形技法の特徴	外面斜位の刷毛目後、横位の刷毛目。内面へう磨で。器面摩滅。
30-8 PL43	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (17.0) 底 - 高 (3.8)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にぶい橙	成・整形技法の特徴	外面斜位の刷毛目後、横位の刷毛目。内外面口縁部横溝で。内面へう磨で。
30-9 PL43	土師器 壺	覆土	胴部片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい橙	成・整形技法の特徴	胴部に磨滅横線。その上下に棒状工具による連続刺突文を施す。
30-10 PL43	土師器 壺	+27~36	口~底部 2/3	口 (23.9) 底 9.2 高 (43.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③5YR6/8橙	成・整形技法の特徴	外面胴部丁寧なへう磨き。口~頸部刷毛目後磨で。口唇部に棒状刺突文を施す。内面へう磨で。器面摩滅。

B区2号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
36-1 PL43	土師器 杯	隅り方	ほぼ丸形	口 13.4 底 - 高 5.2	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にぶい橙	成・整形技法の特徴	底部へう削り。外面体部へう削り。口縁部内外面横溝で。内面へう磨で。
36-2 PL43	土師器 甕	貯蔵穴 隅り方	ほぼ丸形	口 (15.4) 底 7.8 高 28.5	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR7/4にぶい黄橙	成・整形技法の特徴	外面へう削り。口縁部内外面横溝で。内面へう磨で。

遺物観察表

B区3号住居遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
38-1 PL43	土師器 罌	貯蔵穴	頸～胴部片	口 底 高 (10.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にふい煙	外面横方向の網毛目。内面へう襷で。胴部は丸みを帯びる。	

B区4号住居遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
40-1 PL43	土師器 短頸壺	掘り方	口縁部片	口 (12.2) 底 高 (4.8)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR5/4にふい煙	内外面口縁部は縦位の丁寧なへう磨き。内面体部は斜位のへう磨き。	
40-2 PL43	土師器 台付罌	掘り方	胴下部～台部片	口 底 (6.9) 高	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR5/4にふい煙	外面斜位の網毛目。内面網毛目とへう襷で。	
40-3 PL43	土師器 台付罌	掘り方	接合部～台部片	口 底 高 (4.9)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR5/4にふい煙	外面縦位の網毛目後襷で。内面縦位の網毛目後襷で。	
40-4 PL43	土師器 台付罌	掘り方	台部片	口 底 9.5 高 (6.4)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にふい煙	外面雑な斜位の網毛目。内面へう襷で。台部端部は襷で。	

B区5号住居遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
41-1 PL43	土師器 小型壺	掘り方	口～頸部片	口 (13.2) 底 高 (2.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③2.5YR5/6明赤褐	外面頸部縦位の網毛目。内外面口縁部網毛目後、襷襷で。	
41-2 PL43	土師器 小型壺	掘り方	口縁部片	口 (12.5) 底 高 (5.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③2.5YR5/6明赤褐	外面網毛目。内外面口縁部縦位の網毛目。胴部へう襷で。	
41-3 PL44	土師器 壺	掘り方	胴部片	口 底 高	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にふい煙	胴部に磨造模様と波状文の交互施文を施す。上位に円形貼付文。	パレス壺
42-4 PL43	土師器 台付罌	掘り方	口縁部片	口 (17.0) 底 高 (6.3)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR5/2灰黄褐	外面網毛目。内外面口～頸部襷襷で。内面へう襷で。	
42-5 PL44	土師器 台付罌	掘り方	接合部～台部片	口 底 (8.4) 高 (4.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR6/3にふい黄煙	外面網毛目。内面へう襷で。	
42-6 PL44	土師器 台付罌	掘り方	接合部～台部片	口 底 9.5 高 (6.4)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にふい煙	外面網毛目後、丁寧なへう襷で。内面へう襷で。	

B区6号住居遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
43-1 PL44	土師器 罌	掘り方	口縁部片	口 (15.0) 底 高 (4.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にふい煙	外面へう襷。内外面口縁部は横襷で。内面へう襷で。	

B区7号住居遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
44-1 PL44	土師器 台付罌	伊	口～胴部片	口 (14.0) 底 高 (18.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR5/4にふい黄煙	外面斜位の網毛目。内外面口～頸部襷襷で。内面へう襷で。やや外反するS字状口縁。	
44-2 PL44	土師器 台付罌	+13	口縁部片	口 (7.3) 底 高 (4.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/5にふい煙	外面網毛目。内外面口～頸部襷襷で。内面へう襷で。直立気味のS字状口縁。	

B区10号住居遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
45-1 PL44	土師器 直口壺	貯蔵穴	完形	口 11.3 底 高 18.7	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR6/6橙	外面体部斜位のへう磨き。口縁部縦位のへう磨き。内外面口縁部縦位のへう磨き。内面体部縦位のへう磨き。	

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
46-2 PL44	土師器 埴	貯蔵穴	ほぼ完成	口 17.0 底 6.5 高 27.3	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR7/4にふい塵	外面胴部丁寧なヘラ磨き。内外面口縁部ヘラ磨き。内面胴部ヘラ磨で。	

B区11号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
49-1 PL44	土師器 埴	+5	頸~底部 2/5	口 - 底 (4.2) 高 (5.0)	①細砂粒 ②酸化態 ③2.5YR5/6明赤褐	外面体部丁寧なヘラ磨き。内外面口縁部横撫で。内面ヘラ磨で。底部は平底を呈す。	内面荒れ。
49-2 PL44	土師器 埴	覆土	口縁部片	口 (8.6) 底 - 高 (4.2)	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR4/2灰黄褐	外面体部ヘラ磨き。内外面口縁部横撫で。内面ヘラ磨き。	
49-3 PL44	土師器 鉢	甕廻り方	口縁部片	口 (11.0) 底 - 高 (3.9)	①細砂粒 ②酸化態 ③5YR5/4にふい赤褐	外面体部ヘラ磨り。内外面口縁部横撫で。内面胴部ヘラ磨で。	
49-4 PL44	土師器 壺	床直	体~底部片	口 - 底 (3.4) 高 (3.0)	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR6/4にふい黄褐	外面体部・底部丁寧なヘラ磨き。内面刷毛目。底部は平底を呈す。	
49-5 PL44	土師器 高坏	床直~+7 P3、廻り方	4/5	口 19.3 底 (14.7) 高 14.8	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR6/4にふい塵	外面肩部・脚部・坏部ヘラ磨き。坏下部ヘラ磨り。内面ヘラ磨き。内面底部横撫で。	
49-6 PL44	土師器 高坏	+5	坏部	口 18.4 底 - 高 (5.2)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③7.5YR6/6橙	外面坏上部ヘラ磨き。坏下部ヘラ磨り。内面丁寧な横位のヘラ磨き。	
49-7 PL44	土師器 高坏	+6~8 北甕	坏部片	口 (17.0) 底 - 高 (4.7)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③7.5YR5/4にふい褐	外面縦位のヘラ磨き。内面縦位のヘラ磨き。	
49-8 PL44	土師器 高坏	住居覆土 21溝覆土	坏部片	口 (18.0) 底 - 高 (4.6)	①細砂粒 ②酸化態 ③2.5YR5/6明赤褐	外面縦位のヘラ磨き。内外面口縁部横撫で。内面斜位のヘラ磨き。	
49-9 PL44	土師器 高坏	床直	脚部片	口 (13.4) 底 (8.2) 高 (5.2)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③10YR4/1褐灰	外面肩部・脚部縦位のヘラ磨き。内面ヘラ磨で。内面胴部横撫で。	
49-10 PL44	土師器 甕	床直	2/3	口 (17.1) 底 - 高 (14.3)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③7.5YR6/6橙	外面ヘラ磨り。内外面口縁部横撫で。内面ヘラ磨で。	
49-11 PL44	土師器 甕	床直~+12、21溝 覆土	口~胴部片	口 (14.0) 底 - 高 (14.0)	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR5/4にふい塵	外面ヘラ磨り。内外面口縁部横撫で。内面ヘラ磨で。	
49-12 PL44	土師器 甕	床直	頸~胴部片	口 - 底 (11.1) 高 (11.1)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③10YR8/3にふい黄褐	外面胴部斜位のヘラ磨り。内外面口縁部横撫で。内面胴部縦位のヘラ磨で。	
50-13 PL44	土師器 甕	+9~17 北甕	口~胴部片	口 (19.5) 底 8.7 高 36.1	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR7/4にふい黄褐	外面胴部上部縦位のヘラ磨り。下部縦位のヘラ磨り。内外面口縁部横撫で。内面胴部縦位のヘラ磨で。	
50-14 PL45	土師器 甕	床直	胴部片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③10YR5/4にふい黄褐	外面ヘラ磨り後彫りヘラ磨き。内面ヘラ磨で。胴部内面に幅約1cm、短径3cmの外面に幅約1cmの凹みを残す。	
50-15 PL44	土師器 台付甕	+6、甕溝 廻り方	口縁部片	口 (16.7) 底 - 高 (7.1)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化態 ③7.5YR5/4にふい塵	外面胴毛目。内外面口~頸部横撫で。内面ヘラ磨で。直立気味のS字状口縁で、丁寧な面取り調整を施す。	
50-16 PL45	土師器 台付甕	廻り方	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 (3.2)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化態 ③10YR5/3にふい黄褐	外面胴毛目。内外面口~頸部横撫で。内面ヘラ磨で。外反するS字状口縁。口縁部は丁寧な面取り調整を施す。	
50-17 PL45	土師器 台付甕	+4~12	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 (5.3)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化態 ③10YR8/3にふい黄褐	外面胴毛目。内外面口~頸部横撫で。内面ヘラ磨で。やや外反するS字状口縁。	
50-18 PL45	土師器 台付甕	床直	口~胴部片	口 (15.2) 底 - 高 (5.5)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化態 ③7.5YR5/3にふい褐	外面胴毛目。内外面口~頸部横撫で。内面ヘラ磨で。	
50-19 PL45	土師器 台付甕	床直~+14	口~胴部片	口 (16.0) 底 - 高 (5.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化態 ③10YR6/3にふい黄褐	外面胴毛目。内外面口~頸部横撫で。内面ヘラ磨で。口縁部は丁寧な面取り調整を施す。	
50-20 PL45	土師器 台付甕	+16	口縁部片	口 (19.0) 底 - 高 (3.2)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化態 ③7.5YR5/3にふい褐	外面胴毛目。内外面口~頸部横撫で。内面ヘラ磨で。口縁部は丁寧な面取り調整を施す。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
50-21 PL45	土師器 手捏ね土器	貯蔵穴	口~底部 4/5	口 (5.4) 底 4.8 高 4.7	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼 ③5YR3/1黒褐色	手捏ね土器の高坏、坏部口縁横線で、脚部外面指撫で、外面に指頭圧痕残る。	
50-22 PL45	土師器 手捏ね土器	覆土	脚部片	口 - 底 - 高 (2.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR6/3にふい、黄橙	手捏ね土器の高坏の脚部片が、脚部外面指撫で、外面に指頭圧痕残る。	
50-23 PL45	土製品 勾玉か	覆土	破片	長 1.5 幅 1.1 厚 0.9	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR7/4にふい、橙	径2mmの孔を穿つ。土製の勾玉か。	
検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
50-24 PL45	石製品 砥石	掘り方	旧時 半穴か	球質粘板岩	長さ 8.0 幅 6.7 厚さ 2.1 重量 170	石材質は朝生の砥石。仕上げ砥粒、使用は表面は浅く、右側部は着しい。そのため手持ち感らしい。左側部にも部分的に小研磨面あり。側部は自然内縁を打ち欠き整形したらしい面磨多い。下手は旧穴。	

B区12号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
51-1 PL45	土師器 鉢	掘り方	口縁部片	口 (10.5) 底 - 高 (3.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5Y5/6明褐色	外面へラ磨き。内外面口縁部横線で、内面へラ磨き。	
51-2 PL45	土師器 高坏	掘り方	口縁部片	口 (20.0) 底 - 高 (5.3)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5Y5/4にふい、褐	外面丁寧なへラ磨き。内外面口縁部横線で、内面へラ磨き。	

B区1号竪穴状遺構遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
54-1 PL45	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (14.0) 底 - 高 (3.3)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR7/4にふい、橙	外面頸部無毛目。内外面口縁部横線で、頸部へラ磨き。	
54-2 PL45	土師器 手捏ね土器	P3覆土	完形	口 5.8 底 - 高 8.4	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR6/3にふい、黄橙	外面へラ磨り。内面へラ磨で、内外面に指頭圧痕残る。コップ型のミニチュア土器か。	

C区1号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
57-1 PL45	土師器 鉢	貯蔵穴	ほぼ完形	口 13.8 底 - 高 4.9	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にふい、橙	外面体部へラ磨り。口縁部内外面横線で、内面へラ磨で。	
57-2 PL45	土師器 鉢	掘り方	口~底部 1/6	口 (8.4) 底 2.0 高 3.3	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にふい、橙	外面体部へラ磨り。口縁部内外面横線で、内面へラ磨で。底部は平底。	
57-3 PL45	土師器 高坏	覆土	坏部片	口 - 底 - 高 (3.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR6/3にふい、黄橙	内外面丁寧なへラ磨き。	
57-4 PL45	土師器 直口壺	貯蔵穴	ほぼ完形	口 8.7 底 2.4 高 13.7	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼 ③5YR5/4赤褐色	外面丁寧なへラ磨き。内外面口縁部縦位へラ磨き。口唇部横位のへラ磨き。	
57-5 PL45	土師器 甗台	覆土	口縁部片	口 - 底 - 高 (4.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR5/4にふい、赤褐	外面丁寧なへラ磨き。内面横線で位置いへラ磨き。器受け部に孔を穿つ。器受け部の突体に肩目を施す。	
57-6 PL45	土師器 甗台	掘り方	器受け部 1/4	口 (9.2) 底 - 高 (2.5)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③5YR6/6橙	外面頸部縦位のへラ磨き。内外面口縁部横線で、内面横位の丁寧なへラ磨き。	
57-7 PL45	土師器 壺	掘り方	口縁部片	口 (16.8) 底 - 高 (6.0)	①細砂粒、小礫 ②酸化焼 ③10YR6/3にふい、黄橙	外面頸部縦位のへラ磨き。内外面口縁部横位のへラ磨き。内面横位の丁寧なへラ磨き。	
57-8 PL45	土師器 壺	P1	口縁部片	口 (12.0) 底 - 高 (3.6)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/3にふい、橙	外面頸毛目、横線で、内外面口縁部横線で。	
58-9 PL45	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (19.0) 底 - 高 (3.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にふい、橙	外面頸毛目。口唇部に刺突痕を施す。内面横線で。	

探頭番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
58-10 PL45	土師器 台付壺	覆土	台部片	口 - 底 (7.6) 高 (4.1)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にぶい橙	外面縦位の撫で、内面横位の刷毛目。	
58-11 PL45	土師器 台付壺	覆土	口縁部片	口 (14.0) 底 - 高 (3.9)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR8/4透黄橙	外面斜位の刷毛目。内外面口縁部横撫で、直立するS字状口縁。	
探頭番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm,g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
58-12 PL45	石製品 未製品	覆土	未製品	緑色透明蛇紋岩	長さ 0.95 幅 1.25 厚さ 0.35 重量 0.77	石製道具品の未製品。裏面に磨痕あり。光沢なし。	
58-13 PL45	石製品 白玉	貯蔵穴	完形	蛇紋岩	径 0.55 孔径 0.2 厚さ 0.3 重量 0.12	表裏面・断面ともに丁寧に研磨して仕上げている。光沢あり。	

C区2号住居遺物観察表

探頭番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
62-1 PL45	土師器 鉢	覆土	口~体部 1/3	口 (24.0) 底 - 高 (5.9)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR7/4にぶい黄橙	外面へう撫で、粗いへう磨き。内外面口縁部横撫で。内面粗いへう磨き。大型丸底鉢。	
62-2 PL45	土師器 高杯	覆土	口縁部片	口 (16.0) 底 - 高 (3.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR6/6橙	外面へう削り。内外面口縁部横撫で。内面へう撫で後、粗いへう磨き。	
62-3 PL45	土師器 台付壺	貯蔵穴	脚部1/2	口 - 底 (10.0) 高 (6.4)	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にぶい橙	外面へう削り。台部へう撫で。	
62-4 PL45	土師器 台付壺	貯蔵穴	胴~脚部片	口 - 底 (5.5) 高 (5.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/3にぶい橙	外面刷毛目。内面へう撫で。内面に煤痕残る。	

C区3号住居遺物観察表

探頭番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
63-1 PL45	土師器 杯	掘り方	口~底部 2/3	口 10.9 底 - 高 6.9	①粗砂粒、輝石 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい橙	外面体部へう削り。内外面口縁部横撫で。内面へう撫で。底部は丸底。	
63-2 PL45	土師器 杯	掘り方	口~底部 1/2	口 12.6 底 4.9 高 6.3	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR7/3にぶい黄橙	外面体部へう削り。内外面口縁部横撫で。内面へう撫で。底部は平底。	
63-3 PL45	土師器 土壺	貯蔵穴	ほぼ完形	口 19.4 底 7.9 高 27.5	①細砂粒、輝石 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい橙	外面胴部へう削り。内外面口縁部横撫で。内面へう撫で。胴部は球磨形、底部は平底を呈す。	
63-4 PL45	土師器 手捏ね土器	掘り方	口~底部 2/3	口 (6.4) 底 - 高 3.7	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい橙	ミニチュア土器の鉢。内外面へう撫で。	
63-5 PL45	土師器 手捏ね土器	掘り方	ほぼ完形	口 3.0 底 - 高 2.9	①細砂粒、輝石 ②酸化焼 ③10YR6/3にぶい黄橙	ミニチュア土器の器台が高杯。外面へう撫で。	
探頭番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	材 材	計測値(cm,g)	成・整形技法の特徴	備考
63-6 PL45	石製品 有孔円盤	覆土	完形	蛇紋岩	長さ 1.65 幅 1.45 厚さ 0.25 重量 1.4	孔径0.15。両面に磨痕残る。光沢あり。	

C区4号住居遺物観察表

探頭番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
66-1 PL45	土師器 高杯	覆土	口縁部片	口 (16.0) 底 - 高 (3.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③5YR6/6橙	外面へう撫で。内外面口縁部横撫で。内面へう撫で。	
66-2 PL45	土師器 高杯	覆土	口縁部片	口 (18.0) 底 - 高 (4.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③5YR6/6橙	外面丁寧なへう磨き。内面へう磨き。	
66-3 PL45	土師器 高杯	覆土	脚部片	口 - 底 (12.0) 高 (2.7)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい橙	外面丁寧なへう磨き。内面へう撫で。	

遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②灰成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
66-4 PL45	土師器 高坪	貯蔵穴	脚部片	口 - 底 (17.0) 高 (2.8)	①細砂粒 ②酸化塩 ③2.5YR5/6明赤褐色	外面へラ磨き。内外面口縁部横線で、内面へラ削で。	

C区5号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②灰成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
67-1 PL46	土師器 高坪	掘り方	脚部片	口 - 底 - 高 (3.4)	①細砂粒 ②酸化塩 ③5YR6/8橙	内外面へラ削でか。器面厚成しい。	
67-2 PL46	土師器 附	掘り方	口縁部片	口 (10.4) 底 - 高 (3.1)	①細砂粒 ②酸化塩 ③5YR6/8橙	外面丁寧なへラ磨き。内外面口縁部横線で、内面へラ磨き。	

C区6号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②灰成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
69-1 PL46	土師器 鉢	掘り方	口～体部片	口 (6.6) 底 - 高 (4.0)	①細砂粒 ②酸化塩 ③10YR6/2灰黄褐色	外面へラ磨き。内外面口縁部横線で、内面粗いへラ削で。小型丸底鉢。	
69-2 PL46	土師器 直口壺	掘り方	口縁部片	口 (9.1) 底 - 高 (4.0)	①細砂粒 ②酸化塩 ③10YR7/2黄褐色	外面へラ削で後、粗いへラ磨き。内外面口縁部横線で、内面粗いへラ磨き。	
69-3 PL46	土師器 壺	掘り方	口縁部片	口 - 底 - 高 (5.4)	①細砂粒 ②酸化塩 ③7.5YR6/4にぶい褐色	外面刷毛目。内面へラ磨き。	
70-4 PL46	土師器 壺	掘り方	口縁部片	口 (23.6) 底 - 高 (3.0)	①細砂粒 ②酸化塩 ③6YR5/4にぶい赤褐色	外面刷毛目。外面口縁部縦位に3単位の隆帯を貼付。内面矢羽根状の刺突痕を施す。赤色塗彩。	
70-5 PL46	土師器 小型甕	掘り方	口縁部片	口 (13.2) 底 - 高 (4.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③7.5YR7/4にぶい褐色	外面頸部刷毛目。内外面口縁部横線で、内面へラ削で。	
70-6 PL46	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (19.0) 底 - 高 (3.1)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③2.5YR7/3浅黄	外面へラ削り。内外面口唇部横線で、内面へラ削で。	
70-7 PL46	土師器 甕	掘り方	口縁部片	口 (14.0) 底 - 高 (3.2)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③10YR3/1黒褐色	外面刷毛目。内外面口唇部横線で、内面へラ削で。受け口状の口縁部。	
70-8 PL46	土師器 甕	+20	底部片	口 - 底 (8.0) 高 (3.8)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③10YR8/3浅黄褐色	外面へラ削り。内面へラ削で。	器面厚成。
70-9 PL46	土師器 台付甕	床直	口縁部片	口 (19.0) 底 - 高 (3.9)	①細砂粒、白色粒 ②酸化塩 ③5YR6/6橙	外面肩部縦位の刷毛目後、横位の刷毛目。内外面口唇部横線で、内面へラ削で。やや外反するS字状の口縁部。	
70-10 PL46	土師器 台付甕	床直	口縁部片	口 (17.0) 底 - 高 (4.0)	①細砂粒、白色粒 ②酸化塩 ③7.5YR5/4にぶい褐色	外面刷毛目。内外面口唇部横線で、内面へラ削で。S字状の口縁部に丁寧な面取り調整を施す。	
70-11 PL46	土師器 小型甕	+6	口縁部片	口 (16.0) 底 - 高 (3.7)	①細砂粒 ②酸化塩 ③7.5YR6/4にぶい褐色	外面刷毛目後削で。内外面口縁部横線で、内面へラ削で。	
70-12 PL46	土師器 台付甕	掘り方	口縁部片	口 (14.0) 底 - 高 (3.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③7.5YR6/4にぶい褐色	外面肩部縦位の刷毛目後、横位の刷毛目。内外面口唇部横線で、内面へラ削で。	
70-13 PL46	土製品 不明	掘り方	破片	長 (4.3) 幅 (2.1) 厚 1.3	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③7.5YR5/3にぶい褐色	外面丁寧なへラ磨き。形状から土製のスプーン(さじ)か。	

C区7号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②灰成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
72-1 PL46	土師器 杯	床直	完形	口 11.4 底 3.1 高 5.1	①細砂粒 ②酸化塩 ③5YR6/6橙	外面体部へラ削り。内外面口縁部横線で、内面へラ削で。底部は平底。	
72-2 PL46	土師器 壺	床直	口～胴部 2/3	口 (10.0) 底 - 高 (11.8)	①細砂粒 ②酸化塩 ③10YR7/3にぶい黄褐色	外面胴部へラ削で後粗いへラ磨き。内外面口縁上部横線で、下部粗いへラ磨き。内面へラ削で。内面下半に縦作り痕が残る。	

押出番号 図版番号	種 類	出土位置	部 位 現 存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
72-3 PL46	土師器 甕口壺	貯蔵穴	ほぼ完形	口 11.6 底 3.4 高 15.2	①細砂粒 ②酸化造 ③10YR7/3にふい貴橙	外面胴上部へラ削で後粗いへラ磨き、下部へラ削り。内外面口縁上部横溝で、下部粗いへラ磨き。内面へラ削で。	
72-4 PL46	土師器 甕口壺	床直	胴部2/3	口 - 底 4.0 高 (8.1)	①細砂粒 ②酸化造 ③10YR7/2にふい貴橙	外面へラ削で、下部へラ削り。内面へラ削で。内面下半に紐作り痕が残る。整形が粗。	
72-5 PL46	土師器 高杯	床直	杯部	口 14.0 底 - 高 (4.9)	①細砂粒 ②酸化造 ③10YR7/3にふい貴橙	外面横溝で後粗いへラ磨き。内外面口縁部横溝で。内面へラ削で。	
72-6 PL46	土師器 高杯	+10	杯部片	口 (17.4) 底 - 高 (4.3)	①細砂粒 ②酸化造 ③10YR5/2灰黄褐	外面へラ削り後横溝で。内外面口縁部横溝で。内面へラ削で、一部へラ磨き。	
72-7 PL46	土師器 高杯	貯蔵穴、翻り方	ほぼ完形	口 18.9 底 13.1 高 17.6	①細砂粒 ②酸化造 ③5YR7/4にふい橙	外面胴部へラ削で、杯へラ削横溝で後粗いへラ磨き。内外面口縁部横溝で。内面へラ削で、胴部に輪痕が残る。	
72-8 PL46	土師器 高杯	床直	杯へ脚部 2/3	口 18.2 底 (14.0) 高 14.2	①細砂粒 ②酸化造 ③5YR6/4にふい橙	外面胴へラ削で、杯部へラ削り後へラ削で。内外面口縁部横溝で。内面へラ削で後へラ磨き。	
73-9 PL46	土師器 高杯	床直	杯部片	口 - 底 - 高 (5.3)	①細砂粒 ②酸化造 ③2YR5/2暗灰黄	外面へラ削り。内面へラ削で後粗いへラ磨き。	
73-10 PL46	土師器 台付甕	翻り方	台部	口 - 底 10.0 高 (7.0)	①細砂粒 ②酸化造 ③10YR6/4にふい貴橙	外面胴毛目後横溝で。内面へラ削で。内面に紐作り痕が残る。	
73-11 PL46	土師器 甕	貯蔵穴	口へ胴部片 2/3	口 13.0 底 - 高 (14.0)	①細砂粒 ②酸化造 ③5YR6/4にふい橙	外面へラ削り。内外面口縁部横溝で。内面へラ削で後粗いへラ磨き。内面に紐作り痕が残る。	
73-12 PL46	土師器 甕	床直へ+7	口へ胴部片 1/2	口 (17.2) 底 - 高 (22.3)	①細砂粒 ②酸化造 ③5YR6/4にふい橙	外面へラ削で。下部のみ粗いへラ磨き。内外面口縁部横溝で。内面へラ削で。内面に紐作り痕が残る。	
73-13 PL46	土師器 手捏ね土器	床直	体へ底部 1/2	口 (5.4) 底 (2.3) 高 3.6	①細砂粒 ②酸化造 ③10YR6/3にふい橙	外面へラ削り。内面へラ削で。片口跡のミニチュア土器。	
73-14 PL46	土師器 手捏ね土器	床直	体へ底部 1/2	口 - 底 3.5 高 (4.0)	①細砂粒 ②酸化造 ③10YR6/3にふい貴橙	外面へラ削で後、粗いへラ磨き。内面へラ削で。コップ型のミニチュア土器。	
73-15 PL46	土師器 手捏ね土器	床直	体へ底部 1/2	口 (5.7) 底 (3.4) 高 3.01	①細砂粒 ②酸化造 ③10YR6/3にふい貴橙	内外面横溝で。コップ型のミニチュア土器。	
73-16 PL46	土師器 手捏ね土器	床直	体へ底部 2/3	口 5.8 底 - 高 5.3	①細砂粒 ②酸化造 ③10YR6/3にふい貴橙	外面へラ削で後、粗いへラ磨き。内面へラ削で。コップ型のミニチュア土器。	
73-17 PL46	土師器 不明?	翻り方	口縁部片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒 ②酸化造 ③5YR6/4にふい橙	内外面口縁部横溝で。器種不明?	
73-18 PL46	須恵器 把手付埴	床直	ほぼ完形	口 7.2 底 4.9 高 5.3	①緻密 ②還元造 ③N4/灰	石回転轆轤整形。口縁部が僅かに3カ所欠損。欠け口の胎土は濃いセピア色に焼き結まっている。外面には2段の沈線とその下に6本1単位の帯幅き波状文を2条施す。体部下平は手持ちへラ削り。	T K 208 (5 C 第2 西半期)

C区8号住居遺物観察表

押出番号 図版番号	種 類	出土位置	部 位 現 存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
75-1 PL47	土師器 埴	床直	口縁部片	口 (12.0) 底 - 高 (4.7)	①細砂粒、白色粒 ②酸化造 ③2YR5/6明赤褐	外面胴部刷毛目。内外面口縁部横溝で。	器面厚減。
75-2 PL47	土師器 台付甕	床直	台部片	口 - 底 (10.0) 高 (2.5)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化造 ③5YR6/4にふい橙	外面刷毛目。内面刷毛目。	
75-3 PL47	土師器 台付甕	床直	胴部片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒 ②酸化造 ③5YR6/4にふい橙	外面縦位の刷毛目後、横位の刷毛目。内面へラ削で。	

遺物観察表

C区9号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
76-1 PL47	土師器 鉢	床直	口~底部 1/4	口 (12.0) 底 - 高 (4.7)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焰 ③7.5YR5/3にふい煙	成・整形技法の特徴	外面体部粗い刷毛目。内外面口縁部横撫で、内面へラ撫で。小型の坏か。
76-2 PL47	土師器 鉢	掘り方	口縁部片	口 (7.6) 底 - 高 (3.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焰 ③7.5YR5/3にふい煙	成・整形技法の特徴	外面体部粗いへラ磨き。内外面口縁部横撫で。

B区2号獨立柱建物遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
79-1 PL47	土師器 甕	P4覆土	口縁部片	口 (12.0) 底 - 高 (3.9)	①細砂粒 ②酸化焰 ③7.5YR7/4にふい煙	成・整形技法の特徴	内外面口縁部横撫で。口縁部は5の字状を呈する。(北陸系)

B区3号獨立柱建物遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
80-1 PL47	土師器 鉢	P2覆土	口~体部片	口 - 底 - 高 (4.4)	①細砂粒 ②酸化焰 ③10YR7/4にふい黄煙	成・整形技法の特徴	外面体部へラ磨き。内外面口縁部横撫で、内面へラ磨き。

B区5号獨立柱建物遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
82-1 PL47	土師器 高坏	P5覆土	坏部片	口 (23.2) 底 - 高 (6.7)	①細砂粒 ②酸化焰 ③5YR6/6橙	成・整形技法の特徴	外面刷毛目後粗いへラ磨き。内外面口縁部横撫で、内面へラ撫で。

C区4号獨立柱建物遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
87-1 PL47	土師器 直口甕	P5覆土	口~体部片	口 - 底 3.2 高 (11.1)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焰 ③7.5YR7/4にふい煙	成・整形技法の特徴	外面全面に丁寧なへラ磨きを施す。内面口縁部へラ磨き。
87-2 PL47	土師器 甕	P5覆土	底部片	口 - 底 (5.0) 高 (2.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焰 ③7.5YR6/3にふい煙	成・整形技法の特徴	外面へラ磨き。内面へラ撫で。
87-3 PL47	土師器 台付甕	P1覆土、 表土	台部片	口 - 底 5.3 高 (4.5)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焰 ③7.5YR7/6橙	成・整形技法の特徴	外面へラ撫で。内面へラ撫で。

C区5号獨立柱建物遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
89-1 PL47	土師器 甕有	P6覆土	台部片	口 - 底 (13.0) 高 (3.5)	①細砂粒、小練 ②酸化焰 ③10YR7/3にふい黄煙	成・整形技法の特徴	外面へラ磨き。内外面裾部横撫で、内面へラ磨き。
89-2 PL47	土師器 鉢	P4覆土	底部片	口 - 底 (3.5) 高 (2.7)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焰 ③10YR6/3にふい黄煙	成・整形技法の特徴	外面へラ磨き。内面へラ磨き。
89-3 PL47	土師器 台付甕	P2、3覆 土	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 (4.5)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焰 ③10YR7/3にふい黄煙	成・整形技法の特徴	外面浅い刷毛目。内外面口縁部横撫で、内面へラ撫で。

C区7号獨立柱建物遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
91-1 PL47	土師器 台付甕	P3覆土	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 (4.8)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焰 ③10YR7/3にふい黄煙	成・整形技法の特徴	外面刷毛目。内外面口縁部横撫で。口縁部は丁寧な面取り調整を施す。

A区1号井戸遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
96-1 PL47	鉄師陶器 甕	下層覆土	胴部片	口 - 底 - 高 (9.0)	① ② ③5YR5/2灰褐色	成・整形技法の特徴	製作地不詳
97-2 PL47	鉄師陶器 甕	下層覆土	胴部片	厚さ 1.1	③外面2.5YR4/4にふい 赤褐色。内面7.5YRにふい い褐色	成・整形技法の特徴	常備。中世
97-3 PL47	石製品 砥石	下層覆土	旧時 半欠か	二ツ岳礫石	長さ 6.2 幅 3.3 厚さ 3.5 重量 40.0	成・整形技法の特徴	
97-4 PL47	石材	下層覆土	欠損多	滑結凝灰岩	長さ 19.2 幅 19.8 厚さ 17.1 重量 6800	成・整形技法の特徴	瓦磁織。軟質。使用は表、左側部。裏は自然口断面。研磨は金属または硬質の主体物。欠損は旧時。

A区1号土坑遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
98-1 PL47	土師器 直口甕	覆土	2/3	口 - 底 3.2 高 10.9	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR6/4にふい褐色	成・整形技法の特徴	外面へう無で後へう磨き。内面へう無で。胴下半部に。焼成後の穿孔あり。
99-2 PL47	土師器 直口甕	覆土	1/2	口 - 底 丸底 高 (20.6)	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR7/3にふい黄褐色	成・整形技法の特徴	外面口縁部縦位のへう磨き。胴部へう無で。後。縦位のへう磨き。内面へう無で。
99-3 PL47	土師器 甕	覆土	口~胴部片	口 (16.0) 底 - 高 (7.7)	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR7/4にふい褐色	成・整形技法の特徴	外面刷毛目後丁家無で。内外面口縁部横無で。内面へう磨き。内面口縁部に刻文(魚?鳥の足?)あり。
99-4 PL47	土師器 台付甕	覆土	口~胴部片	口 (11.1) 底 - 高 (6.7)	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR7/4にふい褐色	成・整形技法の特徴	外面縦位の刷毛目。内面へう磨き。
99-5 PL47	土師器 台付甕	覆土	台部片	底 11.2 高 (5.7)	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR6/4にふい褐色	成・整形技法の特徴	外面横無で後。浅い刷毛目。内面刷毛目。

A区3号土坑遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
99-1 PL47	土師 不明	覆土	2/3	口 - 底 (3.0) 高 (4.0)	①細砂粒 ②酸化態 ③5YR6/4にふい褐色	成・整形技法の特徴	外面に布目残。焼成前穿孔の穴が底部に2穴、体部に6穴(接合できなかつた破片も含む)あり。製法不明。

A区27号土坑遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
103-1 PL48	縄文土器 深鉢	覆土	口~胴部片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒 ②酸化態 ③2.5Y6/2灰褐色	成・整形技法の特徴	垂下する太めの弦線で「J」の字状の文様を描く。称名寺式期。他に同一個体が計白片出土。

A区32号土坑遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm.g)	成・整形技法の特徴	備考
103-1 PL48	石 材	覆土	板状の小片	滑結凝灰岩	長さ 16.8 幅 5.0 厚さ 4.8 重量 365.0	成・整形技法の特徴	表裏に横能時に生じたらしい酸化色と磨り石としたらしい面あり。その他は欠損。欠損は旧時。裏は軟質で白色に近い。

A区37号土坑遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm.g)	成・整形技法の特徴	備考
104-1 PL47	銅製品 筒金	覆土	1/2	長さ(3.9) 幅 1.9 厚さ 1.3 重量 10.9 長径 1.8 短径 1.3	成・整形技法の特徴	用途不明。上方に胴部内側に浅い盛りあり。下方旧時の割れ欠損あり。縦目目なし。

遺物観察表

A区53号土坑遺物観察表

神岡番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
105-1 PL48	土師器 杯	覆土	口縁部片	口 (12.4) 底 - 高 (2.6)	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR6/4にぶい橙	外面へう削り。内外面口縁部横線で。内面へう削りで。	

A区56号土坑遺物観察表

神岡番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
106-1 PL48	土師器 台付甕	覆土	口～胴部片	口 18.0 底 - 高 (8.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③2.5YR6/6橙	外面斜位の刷毛目。口縁部内外面横線で。内面へう削り。他にも胴部片が多数出土している。	2と同一個体か
106-2 PL48	土師器 台付甕	覆土	胴～台部片	口 - 底 10.2 高 (8.9)	①細砂粒 ②酸化焼 ③2.5YR6/6橙	外面縦位の刷毛目。内面へう削り。器面やや厚減。	1と同一個体か

A区60号土坑遺物観察表

神岡番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
106-1 PL48	鉄製品 不明	覆土	板状割片		長さ 2.1 幅 2.5 厚さ 0.35 重量 2.3	板状の鉄製品割片。直線的な筋割れ目が大きく入り時代性示唆。破片からやや大型製品か。	古代鉄 (鎌倉以前)
神岡番号 図版番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm, g)	書体・初鋳年等	備考
106-2 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.2 内輪径 0.7 重量 1.8	新寛永・1697年	ほぼ完形

A区61号土坑遺物観察表

神岡番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
106-1 PL48	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (16.1) 底 - 高 (4.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR6/8橙	外面斜位のへう先による調整後。胴部に横位の調整。内外面口縁部横線で。内面へう削り。口縁部は丁寧な面取り調整を施す。	

A区62号土坑遺物観察表

神岡番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
107-1 PL48	土師器 壺	覆土	口縁部片	口 - 底 - 高 (8.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5Y7/3にぶい橙	外面へう削り。赤色塗彩。内面刷毛目後へう削り。小型の壺か。	弥生後期

A区65号土坑遺物観察表

神岡番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
107-1 PL48	土製品 羽口	覆土	1/4	長さ 7.5 幅 8.9 厚さ 2.9		先端欠損。	
神岡番号 図版番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm, g)	書体・初鋳年等	備考
107-2 PL48	銅銭の塊	覆土	寛永通寶	日本	長さ 2.7 幅 2.6 厚さ 1.4 重量 35.9	銅銭 (寛永通寶) 11枚の塊。布が付着している。	完形
107-2-1 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.3	新寛永・背面文・1668年。	完形
107-2-2 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.5	新寛永・背面文・1668年。	完形
108-2-3 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 2.4	古寛永・1636年。	完形
108-2-4 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.7	新寛永・背面文・1668年。	完形
108-2-5 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.1	新寛永・背面文・1668年。	完形
108-2-6 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.5	新寛永・背面文・1668年。	完形
108-2-7 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 3.1	古寛永・1636年。	完形
108-2-8 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 4.0	古寛永・1636年。	完形
108-2-9 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.5 重量 3.5	古寛永・1636年。	完形
108-2-10 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.5 重量 3.8	古寛永・1636年。	完形

採掘番号 図版番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm, g)	書体・初鋳年等	備考
108-2-11 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 1.7	古寛永・1636年。裏面に布付着。	完形
108-3 PL48	銅銭の塊	覆土	寛永通寶	日本	長さ 2.8 幅 2.8 厚さ 0.85 重量 22.0	銅銭(寛永通寶)6枚の塊。布が付着している。	完形
108-3-1 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.4 内輪径 0.5 重量 3.9	古寛永・1636年。	完形
108-3-2 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.2	新寛永・背面文・1668年。	完形
108-3-3 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 4.1	新寛永・背面文・1668年。	完形
108-3-4 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 3.7	古寛永・1636年。	完形
109-3-5 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 4.3	古寛永・1636年。	完形
109-3-6 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 2.6	新寛永・背面文・1668年。	完形

A区66号土坑遺物観察表

採掘番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考	
107-1 PL48	銅貨品 砂貨	覆土	扉首	径 1.7 厚さ 0.1~0.2 高さ 1.0 重量 1.9	薄作り、口や大きく古様を思わせる。下半は旧時欠損。		
採掘番号 図版番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm, g)	書体・初鋳年等	備考
107-2 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.3 内輪径 0.6 重量 2.9	新寛永・1697年。	完形
107-3 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 2.2	新寛永・1697年。	完形
107-4 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.3 内輪径 0.6 重量 1.5	新寛永・1697年。	完形

A区67号土坑遺物観察表

採掘番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
109-1 PL48	カワラケ	覆土	完形	口 9.2 底 6.0 高 1.8	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR8/3残質層	龍轡整形左回転未切り無調整。底部内面周縁から口縁部強い回転痕跡で。	江戸時代

A区68号土坑遺物観察表

採掘番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
109-1 PL48	カワラケ	覆土	完形	口 9.0 底 6.0 高 2.0	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③5YR7/4にぶい層	龍轡整形左回転未切り無調整。底部内面周縁から口縁部強い回転痕跡で。	江戸時代
採掘番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm, g)	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
109-2 PL48	鉄製品 釘	覆土	1/2	長さ 5.2 幅 1.5 厚さ 0.7 重量 5.3		先端は旧時欠損か。頭部は打直しのまま。使用済。抜き取りと生じた曲がり見えず。釘目割れ少なく精錬を思わせる。	
109-3 PL48	鉄製品 釘	覆土	ほぼ完形	長さ 8.1 幅 1.8 厚さ 0.5 重量 4.3		先端は調査時欠損。頭部は打直しのまま。使用のためか先端折り返る。釘目割れ少なく精錬を思わせる。使用済高がりなし。	

A区69号土坑遺物観察表

採掘番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
109-1 PL48	鉄製品 鈴	覆土	完形	長さ 3.6 幅 2.7 厚さ 2.7 重量 7.0	薄金。合目不明。口・紐残存。口に少欠存在。旧時欠損。龍化表面に布目残存。	2と組物か。
109-2 PL48	鉄製品 鈴	覆土	完形	長さ 3.7 幅 2.9 厚さ 2.9 重量 11.3	薄金。合目不明。紐遺存。口は龍化のため不明。木質付着。	1と組物か。

A区71号土坑遺物観察表

採掘番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
109-1 PL48	磁器 碗	覆土	完形	口 10.0 底 3.9 高 5.5	① ② ③5Y8/1灰白	染付。透明輪。外面雪輪梅窓文。高台内「大明」刷れ跡か。 肥前・波佐見系。	18C中～後半
109-2 PL48	磁器 碗	覆土	完形	口 9.8 底 3.9 高 5.6	① ② ③5Y8/1灰白	染付。透明輪。外面雪輪梅窓文。高台内「大明」刷れ跡か。 肥前・波佐見系。	18C中～後半

遺物観察表

A区72号土坑遺物観察表

探検番号 区画番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm, g)	書体・初鋳年等	備考
110-1 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.5 重量 3.1	古寛永・1636年。裏面に布着。	完形
110-2 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.5	古寛永・1636年。2～7は付着した状態で出土。	完形
110-3 PL48	銅銭	覆土	洪武通寶	明	外輪径 2.3 内輪径 0.6	明・1368年。2～7は付着した状態で出土。	完形
110-4 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 2.4	古寛永・1636年。2～7は付着した状態で出土。	完形
110-5 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 2.5	古寛永・1636年。2～7は付着した状態で出土。	完形
110-6 PL48	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.9	古寛永・1636年。2～7は付着した状態で出土。	完形
110-7 PL49	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.4 内輪径 0.5 重量 4.5	古寛永・1636年。2～7は付着した状態で出土。	完形

A区73号土坑遺物観察表

探検番号 区画番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm, g)	成・彫形技法の特徴	備考
111-1 PL49	鉄製品 釘	覆土	3/4	長さ(6.5) 幅 0.9 厚さ 0.7 重量 16.0	和釘。頭部錆化消耗田欠。下方調整時欠損。跡ふくれ少なく、髪目割れ少。先側使用後の大曲り元部残存。	使用後抜き取り曲あり。
111-2 PL49	銅銭の塊	覆土		長さ 2.7 幅 2.6 厚さ 1.4 重量 30.8	銅銭(寛永通寶と公武通寶)11枚の塊。布が付着している。	完形
111-2-1 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.3 内輪径 0.6 重量 2.5	新寛永・1697年。	完形
111-2-2 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.6	古寛永・1636年。	完形
111-2-3 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 2.8	古寛永・1636年。	完形
111-2-4 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 3.3	新寛永・1697年。	完形
111-2-5 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.4 内輪径 0.7 重量 1.9	新寛永・1697年。	完形
111-2-6 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.0 内輪径 0.6 重量 1.7	明・1368年。	ほぼ完形
111-2-7 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.2	新寛永・青銅文・1668年。	完形
111-2-8 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.2 内輪径 0.6 重量 2.6	新寛永・1697年。	完形
111-2-9 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.6	新寛永・青銅文・1668年。	完形
111-2-10 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.4 内輪径 0.7 重量 3.0	新寛永・1697年。	完形
111-2-11 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.3 内輪径 0.6 重量 2.3	新寛永・1697年。	完形
111-3 PL49	銅銭の塊	覆土		長さ 2.7 幅 2.9 厚さ 0.6 重量 13.6	銅銭(寛永通寶と公武通寶)5枚の塊。布が付着している。	完形
111-3-1 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 3.2	古寛永・1636年。	完形
112-3-2 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 3.2	古寛永・1636年。	完形
112-3-3 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.3 内輪径 0.6 重量 3.0	新寛永・1697年。	完形
112-3-4 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.4 内輪径 0.6 重量 2.7	新寛永・1697年。	完形
112-3-5 PL49	銅銭	覆土		外輪径 2.2 内輪径 0.6 重量 1.3	新寛永・1697年。摩滅していて文字が不明。	完形

A区74号土坑遺物観察表

探検番号 区画番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm, g)	書体・初鋳年等	備考
112-1 PL49	鉄銭・銅銭の塊	覆土	寛永通寶など	日本	長さ 2.9 幅 2.8 厚さ 3.4 重量 41.9	鉄銭11枚と銅銭6枚の塊が、鉄錆によって覆着している。	ほぼ完形
112-1-1 PL49	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.5 内輪径 0.6 重量 3.2	新寛永・青銅文・1668年。鉄錆付着。	完形
112-1-2 PL49	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径 2.2 内輪径 0.7 重量 2.3	新寛永・1697年。鉄錆付着。	完形

押印番号 図版番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm, g)	書体・初鋳年等	備考
112-1-3 PL49	鉄銭・銅銭	覆土	不明	不明	外輪径2.5 厚さ0.9 重量 12.5	鉄銭3枚と銅銭2枚の塊。鉄錆によって裏面している。	ほぼ完成
112-1-4 PL49	鉄銭・銅銭	覆土	不明	不明	外輪径2.6 厚さ1.9 重量 23.7	鉄銭3枚と銅銭2枚の塊か。鉄錆によって裏面している。	ほぼ完成

A区75号土坑遺物観察表

押印番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
112-1 PL49	石製品 板押	覆土	破片	雲母石薄片 岩	長さ21.8 幅16.1 厚さ1.5 重量710	右側面、下端の一部残存。欠損は旧時。表・裏とも湾状彫。裏面自然磨面。15世紀。	

A区76号土坑遺物観察表

押印番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
113-1 PL49	土師器 高坏	覆土	脚部片	口— 底— 高(7.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化釉 ③10YR7/3にふい黄褐色	外面側で後、へら磨き。内面へら削で。	

A区77号土坑遺物観察表

押印番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
113-1 PL49	カワラケ	覆土	4/5	口 10.7 底 7.0 高 2.4	①細砂粒、白色粒 ②酸化釉 ③10YR8/3浅黄褐色	龍轡形左回転糸切り無調整。底部内面周縁から口縁部強い回転横溝で。	中世
113-2 PL49	カワラケ	覆土	1/3	口(9.3) 底(6.4) 高 2.0	①細砂粒、白色粒 ②酸化釉 ③7.5YR6/3にふい濁	龍轡形左回転糸切り無調整。底部内面周縁から口縁部強い回転横溝で。	江戸時代か
113-3 PL49	カワラケ	覆土	1/4	口(9.2) 底(6.0) 高 2.2	①細砂粒、白色粒 ②酸化釉 ③7.5YR7/4にふい濁	龍轡形左回転糸切り無調整。底部内面周縁から口縁部強い回転横溝で。	江戸時代か
113-4 PL49	カワラケ	覆土	1/5	口(9.2) 底(5.8) 高 1.7	①細砂粒、白色粒 ②酸化釉 ③7.5YR7/5にふい濁	龍轡形左回転糸切り無調整。底部内面周縁から口縁部強い回転横溝で。	江戸時代か
113-5 PL49	陶器 灯明皿	覆土	ほぼ完形 (口縁部1箇所欠損)	口 10.6 ① ② 高 5.0 2.5	① ② ③5YR3/4暗赤褐色	内面から底部外面周辺磨削。18世紀後半から19世紀前半。	瀬戸美濃
113-6 PL49	陶器 灯明受皿	覆土	完形	口 7.7 ① ② 底 4.0 高 1.6	① ② ③2.5YR7/2灰黄	小形。銷軸軸輪後。底部外面の釉を拭い取る。18世紀後半から19世紀前半。	瀬戸美濃
113-7 PL49	陶器 灯明受皿	覆土	4/5	口(11.2) ① ② 底 5.4 高 2.2	① ② ③10YR6/2灰黄濁	銷軸軸輪後。体部から底部外面の釉を拭い取る。18世紀後半から19世紀前半。	瀬戸美濃
113-8 PL49	磁器 皿	覆土	口縁部片	口(14.0) ① ② 底— 高(2.7)	① ② ③N8/灰白	外面直草文。口縁部内面は刷書状文。やや焼成不良。	肥前
113-9 PL49	磁器 皿	覆土	口縁部片	口(20.0) ① ② 底— 高(2.4)	① ② ③N8/灰白	口縁部内面打ち崩れによる白土掛け。	肥前
113-10 PL49	磁器 碗	覆土	底部片	口(8.0) ① ② 底 3.9 高(2.2)	① ② ③7.5GY8/1明緑灰	筒形碗。腰部外面1条の磨削。見込み五弁花は手書き。	肥前
113-11 PL49	磁器 碗	覆土	口〜底部片	口(7.5) ① ② 底 5.5 高(4.0)	① ② ③7.5GY8/1明緑灰	筒形碗。腰部外面1条の磨削と不明文様。見込み五弁花コシヤク印版。	肥前
113-12 PL49	陶器 土瓶	覆土	口〜体部片	口(8.5) ① ② 底— 高(4.8)	① ② ③5YR8/2灰白	体部外面窓状に白土をかけた後、染め付けによる山水文。	越前?
押印番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
113-13 PL49	石製品 砥石	覆土	1/2	砥石石	長さ4.3 幅4.1 厚さ1.6 重量39	使用は前小口を除く5面。前小口は旧時欠損。石材質は中硬ながら細目目で滑り上質目。	中級級 手持砥
押印番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm, g)	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
113-14 PL49	鉄製品 不明	覆土	完形	長さ5.8 幅2.4 厚さ0.5 重量10.2		箱鉄種の錆化で、黒味あり真鉄を思わせる。下方が湾く刃物か。	
113-15 PL49	鉄製品 鍔金具	覆土	完形	厚さ0.5 重量7.4	外輪径3.1〜3.7 内輪径2.2〜2.7	箱鉄種。錆割少なく、黒味あり真鉄か。厚さ0.5cmと薄く、鍔具等の鍔金具か。	

遺物観察表

A区78号土坑遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
114-1 PL49	出器 碗	覆土	口～体部片	口(7.2) 底— 高(4.6)	① ② ③10Y8/1灰白	口縁部外面削れた雷文帯。体部外面に文が。肥前(幕末)	

A区79号土坑遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
114-1 PL49	軟質陶器 焙烙	覆土	底部片	口— 底(29.0) 高(2.5)	① ② ③10YR7/2にふい貴體	耳欠損。	江戸時代
114-2 PL49	銅鉄の塊	覆土	寛永通寶	日本	長さ2.7 幅2.6 厚さ1.6 重量41.6	銅鉄(寛永通寶、元祐通寶)12枚が凝着している。	ほぼ完形
114-2-1 PL49	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量2.6	新寛永・背面文・1668年。	完形
114-2-2 PL49	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.3 内輪径0.5 重量3.7	古寛永・1636年。内輪に紐状の布付着。	完形
114-2-3 PL49	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量3.6	古寛永・1636年。	完形
114-2-4 PL49	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量3.8	新寛永・背面文・1668年。内輪に紐状の布付着。	完形
114-2-5 PL49	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量3.4	新寛永・背面文・1668年。内輪に紐状の布付着。	完形
115-2-6 PL49	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量3.9	新寛永・背面文・1668年。内輪に紐状の布付着。	完形
115-2-7 PL49	銅鉄	覆土	元祐通寶	北宋	外輪径2.3 内輪径0.7 重量3.7	北宋・1086年・行書。	完形
115-2-8 PL49	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.5 重量3.0	新寛永・1697年。	完形
115-2-9 PL49	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量3.9	新寛永・背面文・1668年。内輪に紐状の布付着。	完形
115-2-10 PL49	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量3.2	古寛永・1636年。	完形
115-2-11 PL49	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量3.5	古寛永・1636年。	完形
115-2-12 PL50	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.6 内輪径0.6 重量3.0	古寛永・1636年。	完形
115-3 PL50	銅鉄の塊	覆土	寛永通寶	日本	長さ3.5 幅2.6 厚さ0.4 重量9.8	銅鉄(寛永通寶)3枚が凝着している。	ほぼ完形
115-3-1 PL50	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量3.3	新寛永・背面文・1668年。僅かに欠損。	ほぼ完形
115-3-2 PL50	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.5 重量3.6	新寛永・背面文・1669年。	完形
115-3-3 PL50	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量2.7	新寛永・背面文・1670年。僅かに上部欠損。	ほぼ完形
115-4 PL50	銅鉄の塊	覆土	寛永通寶	日本	長さ2.6 幅2.7 厚さ0.3 重量6.2	銅鉄(寛永通寶)3枚が凝着している。	ほぼ完形
115-4-1 PL50	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量3.6	古寛永・1636年。	完形
115-4-2 PL50	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量2.5	新寛永・背面文・1670年。僅かに欠損。	ほぼ完形

A区80号土坑遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	材質	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
116-1 PL50	木製品 櫛	覆土	ほぼ完形	黄楊か作	長さ4.9 幅5.2 厚さ1.0 重量7.2	材質は黄楊(つげ)か作(いす)の木。	
押戻番号 図版番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm, g)	書体・初鋳年等	備考
116-2 PL50	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量2.1	新寛永・1697年。	完形
116-3 PL50	銅鉄2枚と布編	覆土	寛永通寶	日本	長さ3.8 幅2.5 厚さ0.5 重量6.9	寛永通寶2枚と布編。当初、遺物番号4～20の古銭が布に包まれた状態で出土しているが、取り上げ時に、4～19は測られる。	
116-4 PL50	銅鉄	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量1.2	新寛永・1697年。2破片。	破片
116-5 PL50	銅鉄	覆土	寛永通寶?	日本	外輪径2.4 内輪径0.5 重量2.9	新寛永・1697年。布付着。	完形

採回番号 図版番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm, g)	書体・初铸年等	備考
116-6 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.3 内輪径0.6 重量 2.9	新寛永・1698年。布付着	完形
116-7 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量 3.3	新寛永・1697年。布付着	完形
116-8 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶?	日本	外輪径 - 内輪径 - 重量 0.8	破片のため拓本不可。写真のみ掲載。	破片
116-9 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 2.7	古寛永・1636年。	完形
117-10 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量 2.0	新寛永・1697年。	完形
117-11 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量 2.7	新寛永・1697年。	完形
117-12 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量 2.7	新寛永・1697年。	完形
117-13 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 4.0	古寛永・1636年。	完形
117-14 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量 3.4	新寛永・1697年。	完形
117-15 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.5 重量 2.4	新寛永・1697年。2箇所欠損(穴)あり。	ほぼ完形
117-16 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量 2.2	新寛永・1697年。	完形
117-17 PL50	銅銭	覆土	元祐通寶	北宋	外輪径2.3 内輪径0.7 重量 2.1	北宋・1093年。中世末～近世の日本産の模造銭か。筆書	完形
117-18 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量 2.5	新寛永・1697年。	完形
117-19 PL50	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量 2.1	新寛永・1697年。2箇所欠損。	ほぼ完形

A区3号ビット遺物観察表

採回番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
117-1 PL50	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (8.1) 底高 (3.2)	①10YR7/3にぶい焼成	口縁部外面刷毛目。内面へラ撫で。平底の小型甕口縁部片。	

B区1号井戸遺物観察表

採回番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
119-1 PL50	土師器 壺	覆土	口縁部片	口 (15.0) 底高 (2.9)	①細砂粒、小礫 ②酸化焼 ③7.5YR7/6橙	内外面口縁部横撫で。折返し口縁。	
119-2 PL50	土師器 台付甕	覆土	結合部片	口 - 底高 (3.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい焼	外面横撫で。	

B区2号井戸遺物観察表

採回番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
120-1 PL50	土師器 直口甕	覆土	口縁部片	口 (13.0) 底高 (6.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/3にぶい焼	外面縦位のへラ磨き。内外面口唇部横位のへラ磨き。内面縦位のへラ磨き。	器面やや厚薄。
120-2 PL50	土師器 壺	覆土	ほぼ完形	口 12.3 底高 7.0 底高 25.8	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい焼	外面浅い刷毛目後、粗い撫で。口縁部内外面横撫で。内面浅い刷毛目。	
120-3 PL50	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (11.0) 底高 (3.7)	①細砂粒、小礫 ②酸化焼 ③5YR5/6明赤褐	外面縦位の刷毛目後。内面へラ撫で。S字状の口縁部は丁寧な面取り調整。	
120-4 PL50	土師器 台付甕	覆土	口～胴部片	口 (15.0) 底高 (9.3)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/6橙	外面斜位の刷毛目後、胴部横撫で。内外面口縁部横撫で。内面へラ撫で。	5と同ーか。
120-5 PL50	土師器 台付甕	覆土	胴～台部片	口 - 底高 9.6 底高 (20.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/6橙	外面縦位の刷毛目。内面へラ撫で。	4と同ーか。

遺物観察表

B区2号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
121-1 PL50	土師器 直口甕	覆土	口縁部片	口 (11.0) 底 - 高 (3.1)	①細砂粒、褐色灰物 ②酸化層 ③7.5YR7/4にぶい層	外面横撫で、内外面口縁部横撫で、内面へら撫で。	

B区6号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
121-1 PL50	土師器 壺	覆土	底部片	口 - 底 3.8 高 (2.5)	①細砂粒、褐色灰物 ②酸化層 ③5YR5/4にぶい赤層	外面へら撫で後、甕いへら磨き。内面へら撫で。	

B区10号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
122-1 PL50	土師器 手埴り形 土器	覆土	面片	長さ 11.8 幅 5.6 厚さ 0.6	①細砂粒 ②酸化層 ③5YR7/6層	脚で規則的な刺突痕を施す。円形貼付2ヵ所あり。調整は丁寧な横撫で。	

B区14号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
122-1 PL50	土師器 高坏	覆土	脚部片	口 - 底 - 高 (5.8)	①細砂粒、白色粒 ②酸化層 ③7.5YR6/4にぶい層	外面へら磨き。内面へら撫で。	

B区20号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
122-1 PL50	土師器 甕	覆土	ほぼ完形	口 18.8 底 6.3 高 25.3	①細砂粒、白色粒 ②酸化層 ③5YR5/4にぶい赤層	外面浅い刷毛目。口縁部内外面横撫で、内面へら撫で。器面厚減。	
122-2 PL50	土師器 甕	覆土	口へら脚部片	口 16.2 底 - 高 (12.5)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化層 ③5YR5/4にぶい赤層	外面浅い刷毛目後、粗い撫で。肩部前面圧痕残る。口縁部内外面横撫で。内面へら撫で。	

B区30号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
124-1 PL51	土師器 直口甕	覆土	口縁部片	口 (14.3) 底 - 高 (5.7)	①細砂粒 ②酸化層 ③5YR7/6層	外面粗いへら磨き。内面へら撫で後、へら磨き。外面厚減。	
124-2 PL51	土師器 甕	覆土	底部片	口 - 底 4.3 高 (1.8)	①細砂粒 ②酸化層 ③5YR6/6層	外面浅い刷毛目。内面刷毛目。	

B区32号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
124-1 PL51	土師器 高坏	覆土	坏部片	口 (18.0) 底 - 高 (4.5)	①細砂粒 ②酸化層 ③2.5YR5/6明赤層	外面丁寧な横撫で。内面横撫で。	

B区34号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
124-1 PL51	土師器 付付壺	覆土	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 (4.9)	①細砂粒、白色粒 ②酸化層 ③7.5YR7/3にぶい層	外面斜位の刷毛目後、肩部に横位の刷毛目。内面へら撫で。	

B区39号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
125-1 PL51	土師器 聯合	覆土	結合へら部 片	口 - 底高 (3.8)	①細砂粒、白色粒 ②酸化層 ③7.5YR5/4にぶい層	外面丁寧なへら磨き。内面へら磨き。孔を3穴穿つ。	
125-2 PL51	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 (4.7)	①細砂粒 ②酸化層 ③5YR4/4にぶい赤層	内外面口縁部横撫で。	

B区40号土坑遺物観察表

探出番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
125-1 PL51	土師器 鉢	覆土	口~胴部片	口 (12.6) 底 - 高 (5.0)	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR5/3にふい塵	外面へう磨き。内外面口縁部横線で、内面刷毛目。	

B区169号ピット遺物観察表

探出番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
125-1 PL51	土師器 台付甕	覆土	台部片	口 - 底 (9.0) 高 (4.3)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③7.5YR6/4にふい塵	外面刷毛目。内面刷毛目。台部端部横線で、	

C区1号井戸遺物観察表

探出番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
127-1 PL51	土師器 鉢	覆土	2/3	口 (13.3) 底 6.2 高 (8.4)	①細砂粒、小礫 ②酸化態 ③5YR6/6橙	外面へう削り。内面へう擦で。内外面口縁部横線で、	
127-2 PL51	土師器 鉢	覆土	2/3	口 - 底 6.5 高 (8.8)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③7.5YR7/4にふい塵	外面へう擦で。外面に塵が残る。内面へう擦で。口縁部欠損。底部に積層が残る。	
127-3 PL51	土師器 高坏	覆土	坏部片	口 - 底 - 高 (6.3)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③7.5YR8/4浅黄橙	外面丁寧なへう磨き。内面へう擦で、	4と同一個体か。
128-4 PL51	土師器 高坏	覆土	胴部片	口 - 底 - 高 (9.0)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③7.5YR8/5浅黄橙	外面丁寧な藍位のへう磨き。内面へう擦で。内面に横線模様残る。	3と同一個体か。
128-5 PL51	土師器 高坏	覆土	坏部	口 22.0 底 - 高 (8.2)	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR7/4にふい塵	外面横線で後、粗いへう磨き。内外面口縁部横線で、内面横線で後、へう磨き。	6と同一個体か。
128-6 PL51	土師器 高坏	覆土	胴部片	口 - 底 - 高 (8.7)	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR7/5にふい塵	外面丁寧なへう磨き。内面へう擦で、	5と同一個体か。
128-7 PL51	土師器 高坏	覆土	胴部片	口 - 底 - 高 (10.0)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③7.5YR7/4にふい塵	外面へう擦で、底部へう磨き。内面へう擦で。内面に縦線残る。	
128-8 PL51	土師器 直口壺	覆土	完形	口 7.8 底 4.5 高 13.5	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR8/3浅黄橙	外面底部・胴部下半へう削り。胴部上半へう擦で後、粗いへう磨き。内外面口縁部横線で、	
128-9 PL51	土師器 直口壺	覆土	ほぼ完形	口 10.3 底 丸底 高 14.6	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR7/2明褐灰	外面底部・胴部下半へう削り。胴部上半へう擦で後、粗いへう磨き。内外面口縁部横線で、	
128-10 PL51	土師器 直口壺	覆土	口縁部片	口 (11.7) 底 - 高 (6.0)	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR6/3にふい塵	外面へう磨き。内外面口縁部横線で、内面へう擦で。内外面赤色塗彩。	
128-11 PL51	土師器 手控ね土器	覆土	完形	口 5.4 底 5.1 高 8.5	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR7/3にふい塵	外面へう削り。指握痕残る。内外面口縁部粗い横線で、ミニチュアの直口壺。	
128-12 PL51	土師器 手控ね土器	覆土	完形	口 5.7 底 4.3 高 4.5	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR7/3にふい塵	外面へう削り。指握痕残る。内外面口縁部粗い横線で、ミニチュアのコップ型土器。	

C区2号土坑遺物観察表

探出番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
130-1 PL51	土師器 埴	覆土	1/2	口 12.0 底 2.0 高 5.7	①細砂粒 ②酸化態 ③5YR6/6橙	外面へう磨き。内外面口縁部横線で、内面へう磨き。	
130-2 PL51	土師器 埴	覆土	1/3	口 (9.8) 底 2.2 高 5.9	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR7/4にふい塵	外面へう磨き。内外面口縁部横線で、内面へう擦で。	器面やや摩滅。
130-3 PL51	土師器 壺	覆土	口縁部片	口 (15.8) 底 - 高 (7.5)	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③5YR6/8橙	内外面口縁部丁寧な横線で、	
130-4 PL51	土師器 壺	覆土	口縁部片	口 19.0 底 高 (8.5)	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR8/4にふい塵	外面胴部筋横線。口縁部刷毛目。口唇部に棒状付文3条を3組施す。内面口縁部に矢羽根状刺突文を2段施す。口縁部内外面赤色塗彩。	
130-5 PL51	土師器 甕	覆土	胴~底部	口 - 底 7.5 高 (10.5)	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR6/6橙	外面へう磨き。内面へう擦で。底部は平底、胴部は球筒形を呈す。	

遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
130-6 PL51	土師器 台付甕	覆土	口～頸部片	口 (15.0) 底 - 高 (6.2)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③7.5YR7/4にふい粉	外面胴部刷毛目。内外面口縁部横溝で。内面へう襷で。	
130-7 PL51	土師器 台付甕	覆土	ほぼ完形	口 14.5 底 - 高 (24.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③10YR7/4にふい粉	外面胴部刷毛目。内外面口縁部横溝で。内面横溝で。内面に炭付着。	外面や中厚減。
130-8 PL51	土師器 台付甕	覆土	胴～台部片	口 - 底 10.0 高 (15.5)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③7.5YR7/4にふい粉	外面胴部刷毛目。内面へう襷で。内面台部下端折返し。	
131-9 PL52	土師器 台付甕	覆土	口～胴部片	口 13.6 底 - 高 20.3	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③10YR7/3にふい粉	外面胴部刷毛目。内外面口縁部横溝で。内面へう襷で。	

C区3号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
131-1 PL52	須恵器 環	覆土	底部片	口 - 底 5.7 高 (2.5)	①細砂粒、白色粒 ②還元塩 ③10YR6/2灰黄褐色	右回転輪軸形。底部は静止糸切り。	
131-2 PL52	土師器 手ね土器	覆土	脚部片	口 - 底 - 高 (3.6)	①細砂粒 ②酸化塩 ③5YR7/6黄	外面へう襷で。指頭圧痕残る。ミニチュアの高杯の脚部か。	
131-3 PL52	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (20.0) 底 - 高 (5.4)	①粗砂粒 ②酸化塩 ③7.5YR8/3浅黄褐色	内外面口縁部横溝で。	

C区6号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
132-1 PL52	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (17.2) 底 - 高 (3.0)	①細砂粒 ②酸化塩 ③7.5YR8/3にふい粉	外面刷毛目。内外面口縁部横溝で。内面へう襷で。	

C区10号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
132-1 PL52	土師器 甕	覆土	底部片	口 - 底 5.5 高 (2.2)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③10YR6/2灰黄褐色	外面へう襷で。外面に指頭圧痕残る。内面へう襷で。底部へう襷で。	

C区11号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
133-1 PL52	土師器 甕台	覆土	台部片	口 - 底 12.2 高 (3.3)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③10YR7/2にふい粉	外面へう襷で。粗いへう磨き。胴部内外面横溝で。内面へう襷で。孔を4穴穿つ。	器面や中厚減。
133-2 PL52	土師器 甕	覆土	胴～底部片	口 - 底 8.0 高 (21.8)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③10YR7/3にふい粉	外面胴部へう磨り。内面へう襷で。胴部は球胴形。底部は平底を呈す。	

C区12号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
133-1 PL52	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (28.0) 底 - 高 (6.1)	①細砂粒 ②酸化塩 ③7.5YR6/4にふい粉	外面へう襷で。へう磨き。内面横溝で。口縁部に棒状貼付文。有段口縁。	

C区14号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
133-1 PL52	土師器 甕	覆土	胴～底部片	口 (9.7) 底 - 高 (5.1)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③2.5YR6/6黄	外面へう襷で。口縁部内外面横溝で。内面へう襷で。	

C区15号土坑遺物観察表

探洞番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
133-1 PL52	土師器 台付甕	覆土	胴～台部片	口 - 底 (7.8) 高 (6.7)	①細砂粒 ②酸化塩 ③7.5YR5/4にふい粉	外面胴部刷毛目。台部へう襷で。台部内面へう襷で。	

C区18号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
134-1 PL52	土師器 杯	覆土	口～体部片	口 (13.4) 底 - 高 (4.9)	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR6/3にぶい濁	成・整形技法の特徴	備考
134-2 PL52	土師器 壺	覆土	底部片	口 - 底 (5.0) 高 (3.5)	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR6/4にぶい濁	外面へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。	
134-3 PL52	土師器 高杯	覆土	杯部片	口 - 底高 (3.9)	①細砂粒、小礫 ②酸化態 ③7.5YR6/4にぶい濁	外面へラ削り。内面丁寧なへラ磨き。	
採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm, g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
134-4 PL52	石製品 銅形	覆土	完形	長さ 4.0 幅 1.7 厚さ 0.5 重量 4.23		孔径0.15。両面に研削痕が残る。表面光沢あり。表面中央に紐を作り出す。	

C区22号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
134-1	土師器 壺	覆土	口縁部片	口 (20.0) 底 - 高 (4.4)	①細砂粒、礫石 ②酸化態 ③7.5YR7/4にぶい濁	外面へラ削りで後へラ磨き。内面横撫で後、粗いへラ磨き。	

C区29号ピット遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
138-1 PL52	土師器 台付甕	覆土	口～胴部片	口 (14.6) 底 - 高 (18.0)	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR6/4にぶい濁	外面胴部刷毛目。内外面口縁部横撫で。内面浅い刷毛目。口縁部は単口縁。	

C区34号ピット遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
136-1 PL52	土師器 台付甕	覆土	口～脚部片	口 - 底 10.8 高 (6.9)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化態 ③7.5YR7/4にぶい濁	外面刷毛目。内面へラ削り。台座部横撫で。	器面厚減。

C区78号ピット遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
138-1 PL52	土師器 台付甕	覆土	口～胴部片	口 (23.5) 底 - 高 (7.3)	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR8/2灰黄褐	外面刷毛目。内外面口縁部横撫で。内面横刷のへラ磨き。	

D区4号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
138-1 PL52	土師器 甕	覆土	口～胴部片	口 (31.0) 底 - 高 (8.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化態 ③10YR6/4にぶい黄褐	外面へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。	
139-2 PL52	土師器 台付甕	覆土	口～胴部片	口 (14.0) 底 - 高 (7.8)	①細砂粒 ②酸化態 ③5YR7/2明黄灰	外面刷毛目。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。	外面器面厚減。

D区5号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
139-1 PL52	土師器 高杯	覆土	杯部2/3	口 - 底 (3.4) 高 (4.1)	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR7/2にぶい黄褐	外面へラ磨き。内面へラ磨き。	
139-2 PL52	土師器 甕	覆土	口～胴部片	口 (29.0) 底 - 高 (15.4)	①細砂粒 ②酸化態 ③10YR5/1黄灰	外面胴部へラ磨き。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。	

D区10号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
140-1 PL52	土師器 埴	覆土	口～底部 1/2	口 (9.8) 底 (3.4) 高 7.0	①細砂粒、白色粒 ②酸化態 ③5YR5.6明赤褐	外面体部へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。	
140-2 PL52	土師器 小型甕	覆土	口～胴部 1/4	口 (8.6) 底 - 高 (5.8)	①細砂粒 ②酸化態 ③7.5YR5/3にぶい濁	外面胴部へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面刷毛目。	

遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値 (cm, g)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
140-3 PL52	土製品 土罐	覆土	完形	①6.3②5.0③0.7~1.3④160		外面ヘラ削り。押輪巻き付けにより成形か。	
140-4 PL52	土製品 土罐	覆土	完形	①6.3②5.3③0.7~1.0④170		外面ヘラ削り。押輪巻き付けにより成形か。	
140-5 PL52	土製品 土罐	覆土	完形	①7.0②5.0③0.7~1.0④172		外面ヘラ削り。押輪巻き付けにより成形か。	
140-6 PL52	土製品 土罐	覆土	完形	①6.8②4.9③0.7~1.0④155		外面ヘラ削り。押輪巻き付けにより成形か。	
140-7 PL52	土製品 土罐	覆土	1/2	①7.0②4.9③1.2~1.8④100		外面ヘラ削り。押輪巻き付けにより成形か。 1/2欠損。	

D区6号ピット遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
141-1 PL52	土師器 甕	覆土	胴部片	口 - 底 - 高 (12.4)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③10YR7/2にぶい黄褐色	外面胴部ヘラ削り。内面ヘラ撫で。	

D区12号ピット遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
141-1 PL52	土師器 埴	覆土	体部	口 - 底 3.1 高 (6.0)	①細砂粒 ②酸化塩 ③2.5YR5/4にぶい赤褐色	外面丁寧なヘラ磨きで、平滑に仕上げる。底部に焼成後、孔を穿つ。口縁部赤色塗彩。	
141-2 PL52	土師器 高坪	覆土	環部	口 (18.0) 底 - 高 (6.7)	①細砂粒 ②酸化塩 ③10YR6/2反黄褐色	外面横撫で後、粗いヘラ磨き。内外面口縁部横撫で。内面環部横撫でのヘラ磨き。	

D区22号ピット遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
141-1 PL52	土師器 鉢	覆土	口~胴部	口 (13.0) 底 - 高 (4.4)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③7.5YR7/4にぶい橙	外面ヘラ削り。外面に接合痕、磨残る。内外面口縁部横撫で。内面ヘラ撫で。	
141-2 PL52	土師器 杯	覆土	口~胴部	口 (13.0) 底 3.8 高 7.5	①細砂粒 ②酸化塩 ③10YR7/3にぶい黄褐色	外面ヘラ削り。内外面口縁部横撫で。内面ヘラ撫で。	器面やや摩滅。

D区30号ピット遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
141-1 PL52	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (16.0) 底 - 高 (4.1)	①細砂粒、小礫 ②酸化塩 ③7.5YR5/6明赤褐色	外面ヘラ削り。内外面口縁部横撫で。内面ヘラ撫で。	

E区1号土坑遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
143-1 PL53	土師器 甕	覆土	口~胴部片	口 (17.3) 底 - 高 (6.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③5YR6/6橙	外面肩部磨き波状文を施す。内面口縁部ヘラ磨き。内面横撫で。	
143-2 PL53	土師器 甕	覆土	底部片	口 - 底 9.3 高 (2.9)	①細砂粒、小礫 ②酸化塩 ③7.5YR淺黄褐色	外面ヘラ磨き。底部に木炭痕残る。	

F区1号井戸遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
145-1 PL53	石製品 瓶用破	覆土	ほぼ完形	粗粒輝石安山岩	長さ 9.7 幅 7.1 厚さ 3.6 重量 230.0	石鉢の片口部付近を再利用。重直線。石鉢の部位は左平面が内面。右平面に工具痕あり。砥石は表・裏2面。手持ち感。軟質。	

F区5号ピット遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
146-1 PL53	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (17.9) 底 - 高 (7.3)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③5YR6/8橙	外面ヘラ撫で。口縁部内外面横撫で。内面ヘラ撫で。	器面摩滅。

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
146-2 PL53	土師器 台付甕	覆土	台部片	口 — 底 10.0 高 (7.7)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/6橙	外面刷毛目。接合部に砂粒を多く含む。内面へう襷で。	

A区1号溝遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
148-1 PL53	土師器 鉢形土器	覆土	体へ底部 2/3	口 — 底 4.0 高 (4.5)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR8/3浅黄橙	外面へう削り。内面へう襷で。小型の鉢形土器。	
148-2 PL53	土師器 直口壺	覆土	体へ底部 2/3	口 — 底 4.0 高 (4.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR7/2にぶい黄橙	外面横位の丁寧なへう削り。内面へう襷で。体部に焼成後穿孔の穴あり。	
148-3 PL53	土師器 高杯	覆土	脚部片	口 — 底 — 高 (5.6)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR7/2にぶい黄橙	外面丁寧なへう磨き。内面へう襷で。	外面赤色塗彩
148-4 PL53	土師器 高杯	覆土	脚部2/3	口 — 底 — 高 (5.2)	①細砂粒、輝石 ②酸化焼 ③7.5YRにぶい橙	外面丁寧なへう磨き。器部は横襷で。内面へう襷で。孔は3穴か。	
148-5 PL53	土師器 高杯	覆土	口へ脚部 1/3	口 (8.7) 底 (7.2) 高 7.0	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR8/2灰白	外面丁寧なへう磨き。内面へう襷で。脚部に孔が3穴あり。	
148-6 PL53	土師器 高杯	覆土	杯部4/5	口 — 底 — 高 (3.7)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③5YR6/4にぶい橙	外面杯部下へう磨きで、上部へう磨き。内面放射状線状のへう磨き。	
149-7 PL53	土師器 高杯	覆土	杯部4/5	口 16.0 底 — 高 (5.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい黄	外面へう削り。内外面口縁部横襷で。内面へう襷で。	内外面厚肉 濃しい
149-8 PL53	土師器 台付甕	覆土	口へ脚部	口 (12.0) 底 — 高 (12.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR5/2灰褐	外面へう削り後上半部のみ刷毛目。内面へう襷で。内面に輪積み痕残り。小型の台付甕。	
149-9 PL53	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (16.7) 底 — 高 (5.9)	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR4/2灰褐	外面刷毛目。内外面口へう襷部横襷で。内面へう襷で。	
149-10 PL53	土師器 壺	覆土	肩部片	口 — 底 — 高 —	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR8/3浅黄橙	肩部に器縁横襷。その上に斜位、下には横位の棒状工具による連続的突文を施す。	パレス壺

A区2号溝遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
150-1 PL53	土師器 高杯	覆土	脚部片	口 — 底 (16.6) 高 (2.8)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR7/4にぶい黄橙	外面丁寧なへう磨き。器部は横襷で。内面へう襷で。	
150-2 PL53	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (16.0) 底 — 高 (3.3)	①細砂粒、小輝 ②酸化焼 ③5YR4/4にぶい赤褐	外面斜位の刷毛目後、横位の刷毛目。内外面口縁部横襷で。内面へう襷で。	

A区4号溝遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
153-1 PL53	磁器 碗	覆土	口縁部片	口 (9.0) 底 — 高 (2.9)	① ② ③N8/灰白	口縁部吹き墨による施文が、近・現代。	瀬戸・美濃
153-2 PL53	磁器 碗	覆土	1/2	口 8.0 底 4.0 高 4.3	① ② ③N8/灰白	赤(菊冠部分)と酸化コバルトによる銅版転写。高台内無輪。近・現代。	瀬戸・美濃
153-3 PL53	磁器 碗	覆土	ほぼ完形	口 8.1 底 3.4 高 4.8	① ② ③N8/灰白	青磁染付。クロム青磁輪縁を施す。外面刷毛。一箇所吹墨で緑の葉を、手書きで草書かを染め付ける。近・現代。	瀬戸・美濃
153-4 PL53	磁器 碗	覆土	口縁部片	口 15.7 底 6.0 高 6.4	① ② ③N8/灰白	染付。柿の実と帯を茶色で描く。近・現代。	瀬戸・美濃
153-5 PL53	磁器 碗	覆土	1/2	口 11.5 底 3.9 高 5.2	① ② ③N8/灰白	平商型。外面縁の下輪で葉を、ピンクで花を置く。近・現代。	瀬戸・美濃
153-6 PL53	磁器 碗	覆土	1/2	口 12.0 底 4.2 高 5.2	① ② ③N8/灰白	平商型。外面銅版転写により菊花状の文様を染め付ける。中心部分のみ緑色。近・現代。	製作地不詳
153-7 PL53	磁器 碗	覆土	2/3	口 11.9 底 4.0 高 5.0	① ② ③N8/灰白	平商型。外面銅版転写により梅窓文を染め付ける。花のみ緑色。近・現代。	瀬戸・美濃
153-8 PL53	陶器 香炉	覆土	1/4	口 (11.2) 底 (10.2) 高 5.1	① ② ③7.5YR2/灰白	口縁部から体部外面灰輪。江戸時代。	瀬戸・美濃?

遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
153-9 PL53	磁器 皿	覆土	1/2	口 11.2 底 6.4 高 2.3	① ② ③N8/灰白	銅板転写による緑色染め付け。近・現代。	製作地不詳
153-10 PL53	磁器 皿	覆土	口縁部片	口 (13.4) 底 (6.8) 高 3.1	① ② ③10Y7/1灰白	口縁部内面黄褐色化した唐草文。底部内面紋の目録測り。18世紀末から19世紀前半。	肥前、佐賀の 見系
153-11 PL53	陶器 皿	覆土	口縁部片	口 (34.0) 底 - 高 (4.8)	① ② ③10Y7/1灰白	厚手の灰胎大皿。いわゆる石皿。19世紀中から後半。	益子・笠間
153-12 PL53	陶器 徳利	覆土	体部片	口 - 底 - 高 (6.0)	① ② ③10Y7/1灰白	外面に灰胎。体部上位片。江戸時代。	瀬戸・美濃
154-13 PL53	陶器 片口鉢	覆土	口縁部片	口 (18.6) 底 - 高 (5.6)	① ② ③10Y7/1灰白	胎輪。口縁部を除き、小さい白泥が生じて失透する。17世紀中頃。	瀬戸・美濃
154-14 PL53	陶器 おろし具	覆土	1/4	長さ11.9 幅 (5.1) 厚さ 0.8	① ② ③N8/灰白	底部無胎でも残れる。側面から上面に透明釉。近・現代。	製作地不詳
154-15 PL53	陶器 すり鉢	覆土	1/4	口 (34.0) 底 - 高 (13.3)	① ② ③2.5YR3/2暗赤褐	口縁部外面3段に作る。口縁部から外面鉄胎。近現代。	益子・笠間
154-16 PL53	土器 甕蓋輪	覆土	1/5	口 (29.6) 底 (23.8) 高 7.8	① ② ③7.5YR7/4にぶい橙	内面保付器。円形透かしの個数は不明。近現代。	在地系
154-17 PL54	土器 植木鉢	覆土	2/3	口 (15.1) 底 8.4 高 8.3	① ② ③測2.5YR2/1	甕蓋整形。左回転糸切り無調整。横し焼成。底部中央に水抜き穴。近現代。	在地系
154-18 PL54	土器 植木鉢	覆土	4/5	口 21.1 底 14.0 高 12.0	① ② ③測2.5YR2/1	甕蓋整形。左回転糸切り無調整。横し焼成。底部中央に水抜き穴。近現代。	在地系
154-19 PL54	土器 植木鉢	覆土	1/3	口 28.8 底 17.3 高 18.3	① ② ③測2.5YR2/1	甕蓋整形。底部外面砂粒。脚一カ所残存。横し焼成。水抜き穴は残存しない。近現代。	在地系
154-20 PL54	土器 植木鉢	覆土	2/3	口 25.7 底 16.8 高 15.1	① ② ③測2.5YR2/1	甕蓋整形。底部外面砂粒。脚三カ所。横し焼成。底部中央に水抜き穴。体部外面回転施文具により髹文。近現代。	在地系
154-21 PL54	硝子 瓶	覆土	完形	口 15.1 底 5.8 高 18.3	① ② ③	ミルトン400ミリリットル透明瓶。底部に「M」、「13」の陽刻。取っ手中央と反対側に歪み。	
検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
154-22 PL54	石製品 砥石	覆土	ほぼ完形	砥沢石	長さ 8.2 幅 3.0 厚さ 2.2 重量 95	両小口は欠損か不明。使用4面。裏面に削目痕あり。削目の深さは19世紀前半以前。	流紋岩 手持砥
154-23 PL54	石製品 砥石	覆土	2/3	砥沢石	長さ 9.0 幅 4.2 厚さ 1.6 重量 95	両石、裏面にやや粗い削目。両小口は旧時欠損。先尖りの刃付砥。使用は裏。右側面の2面。削目の深さから19世紀前半以前。	流紋岩 中砥 手持砥
154-24 PL54	石製品 磨き石	覆土	旧時 半欠か	粗粒輝石安山岩	長さ 5.1 幅 3.1 厚さ 1.9 重量 30.0	自然円磨の平面を使用。研削主体は金属か不明。摩耗面には後の別時点で作られた状態あり。下半の欠損は旧時。	
検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm, g)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
154-25 PL54	鉄製品 棒状	覆土	棒状割片	長さ 6.7 幅 1.0 厚さ 0.8 重量 32.3		旧時通りであるが、下端は旧欠再利用かやや内なる。質は和鉄か古代鉄か層状剥落少なく不明。	
検出番号 図版番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm, g)	書体・初铸年等	備考
154-26 PL54	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.2 内輪径0.7 重量 0.8	新寛永・1697年	ほぼ完形
154-27 PL54	銅銭	覆土	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.6 重量 1.8	新寛永・1697年	完形

A区5号溝遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
155-1 PL54	軟質陶器 焙烙	覆土	破片	口 (27.0) 底 (23.8) 高 5.3	① ②無し焼成 ③2.5YR6/1黄灰	口縁部上面わずかに窪む。耳下端は体部に貼り付ける。	16から17世紀

A区12号溝遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値 (cm, g)	①長さ②幅③孔径④重さ	成・整形技法の特徴	備考
157-1 PL54	土製品 土埴	覆土	完形	①3.7②0.8③0.3④2.2		中央部がやや膨らむ管状土埴。	

A区14号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
158-1 PL54	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (14.8) 底 - 高 (2.6)	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR6/6橙	内外面口縁部横撫で。	9C

A区15号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
159-1 PL54	土製品 鉤銭形	覆土	3/4	長さ 1.2 厚さ 0.3 重量 0.6	① ②酸化焼 ③5YR6/6橙	上方は旧跡欠損。型押で片側に「顔口常貫」・片側に「兩脚ハ口小判一両」とあり南 断面を形どる。	近世中頃の

A区19号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
161-1 PL54	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 (4.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい橙	外面縦位の網毛目。内外面口縁部横撫で。 内面へラ撫で。	

A区20号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm, g)	①長さ②幅③孔径④重量	成・整形技法の特徴	備考
162-1 PL54	土製品 土鐘	覆土	完形	①4.1②1.1③0.3④3.5		中央部が膨らむ管状土鐘。	

A区25号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
164-1 PL54	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 (3.1)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR8/2灰白	外面網毛目。内外面口縁部横撫で。内面へ ラ撫で。	
164-2 PL54	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (14.8) 底 - 高 (3.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR8/2灰白	外面網毛目。内外面口縁部横撫で。内面へ ラ撫で。	
164-3 PL54	土師器 壺	覆土	底部片	口 - 底 7.4 高 (2.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR8/3浅黄橙	外面へラ削り。内面へラ撫で。底部は平底 を呈す。	

B区2号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
166-1 PL54	土師器 杯	覆土	口縁部片	口 (13.0) 底 - 高 4.5	①細砂粒、小礫 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にぶい橙	外面体部へラ削り。内外面口縁部横撫で。	

B区3号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
167-1 PL54	土師器 埴	覆土	口縁部片	口 - 底 - 高 (4.0)	①細砂粒、小礫 ②酸化焼 ③10YR7/4にぶい黄橙	口縁部に2段の横を持つ。外面へラ磨き。 内面へラ撫で。	内外面厚成。
167-2 PL54	土師器 高杯	覆土	脚部片	口 - 底高 (7.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR7/3にぶい黄橙	外面縦位のへラ磨き。内面へラ撫で。	外面厚成。
167-3 PL54	土師器 台付甕	覆土	口～胴部片	口 (13.5) 底 - 高 (6.2)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にぶい橙	外面網毛目。内外面口～胴部横撫で。内面 へラ撫で。	
167-4 PL54	土師器 台付甕	覆土	台部	口 - 底 9.8 高 -	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR6/2灰黄橙	外面網毛目。内面へラ撫で。	
押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
167-5 PL54	石製品 凹石	覆土	完形	二ッ岳軽石	長さ 11.6 幅 10.0 厚さ 6.3 重量 360.0	自然円錐の平面を加工。加工は打ち欠きと 磨りで、部分的に刃傷あり。中央の凹みに 回転軸痕はなく、主として突き込みに見え る。用途不明。	

遺物観察表

B区4号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
168-1 PL54	土師器 台付鉢	覆土	2/3	口 9.8 底 4.0 高 10.4	①細砂粒、白色粒 ②酸化鉛 ③7.5YR7/3にぶい黄	外面体部へう削り、頸部に指環圧痕残る。 内面体部へう削り。	
168-2 PL54	土師器 台付鉢	覆土	口縁部片	口 (13.2) 底 - 高 (8.7)	①細砂粒 ②酸化鉛 ③10YR7/3にぶい黄	外面磨毛目。内外面口～頸部横線で、内面へう削り。	器面やや厚減。

B区5号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
168-1 PL54	土師器 小型甕	覆土	口縁部片	口 (12.0) 底 - 高 (5.5)	①細砂粒、輝石 ②酸化鉛 ③10YR7/4にぶい黄	外面体部へう削り。内外面口縁部横線で、体部へう削り。	

B区7号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
168-1 PL54	土師器 器台?	覆土	接合部片	口 - 底 - 高 (2.1)	①細砂粒、白色粒 ②酸化鉛 ③2.5YR5/8明赤褐	外面へう削り。内面へう磨き。	

B区8号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
168-1 PL54	土師器 坏	覆土	口縁部片	口 (12.0) 底 - 高 (4.0)	①細砂粒 ②酸化鉛 ③10YR6/4にぶい黄	外面体部へう削り。内外面口縁部横線で、内面へう削り。	器面やや厚減。
168-2 PL54	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (18.0) 底 - 高 (3.0)	①細砂粒、褐色藍物 ②酸化鉛 ③7.5YR7/4にぶい黄	外面頸部磨毛目。内外面口縁部横線で。	

B区11号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
169-1 PL54	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (10.0) 底 - 高 (2.1)	①細砂粒 ②酸化鉛 ③10YR6/4にぶい黄	外面頸部磨毛目。内外面口縁部横線で。	

B区14号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
172-1 PL54	焼締陶器 鉢	覆土	底部片	口 - 底 (14.8) 高 (2.8)	① ② ③7.5Y6/1灰	常滑片口鉢。13～14世紀。	
172-2 PL55	石製品 寛砥	No. 4	旧時 平欠か	滑結凝灰岩	長さ 11.6 幅 8.2 厚さ 5.7 重量 649	自然円礫を利用。摩耗は表面のみ。上方に刃ならし様の備あり。下半は旧時欠損。磨きの主体は金属が不明。刃ならしは金属に見える。	
172-3 PL55	石製品 台石・磨き石	No. 7	完存	滑結凝灰岩	長さ 29.7 幅 12.4 厚さ 9.5 重量 6100	自然円礫、川原石。平面図の上面と右側部に摩耗痕あり。非金属。上面に小凹みが多くあり。それは自然の凹みのものであるが、その中も摩耗あり。上方は風化摩耗。	
172-4 PL55	石製品 加工品	No. 43	完存	二ツ岳軽石	長さ 9.4 幅 9.6 厚さ 7.8 重量 430.0	図表下半のみに自然円礫面あり。それを除き、加工時の刃傷と削り、割れあり。刃傷は工具痕か。用途不明。	

B区15号溝遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
174-1 PL54	土師器 高坏	覆土	脚部片	口 - 底 (13.0) 高 (1.5)	①細砂粒 ②酸化鉛 ③5YR5/4にぶい赤褐	外面磨部横線で、内面横線で。	
174-2 PL54	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 (5.2)	①細砂粒 ②酸化鉛 ③10YR6/3にぶい黄	内外面口縁部横線で。	

B区19号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
175-1 PL54	磁器 碗	覆土	底部片	口 - 底 (10.7) 高 (2.6)	① - ② - ③ 10YR/1灰白	製作上不詳白磁。	時期不詳
175-2 PL54	磁器 皿	覆土	底部片	口 - 底 (5.8) 高 (1.2)	① - ② - ③ 7.5YR/1灰白	内面不明文様。胎土灰白色で貫入がある。 やや焼成不良。	肥前

B区21号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
177-1 PL54	土師器 舞台	覆土	器受け部片	口 - 底 - 高 (4.4)	① 細砂粒 ② 酸化胎 ③ 5YR6/6橙	外面へラ削で。内面へラ削で後へラ磨き。 口唇部に使途不明の孔を穿つ。	
177-2 PL55	土師器 高杯	覆土	口へら部片	口 (17.0) 底 - 高 (4.0)	① 細砂粒 ② 酸化胎 ③ 7.5YR7/6橙	外面へラ削で。内外面口縁部横削で。内面へラ削で。器面厚減。	
177-3 PL55	土師器 器台	覆土	台部片	口 - 底 - 高 (4.5)	① 細砂粒 ② 酸化胎 ③ 7.5YR7/6橙	外面へラ削で後、へラ削り。内面へラ削で。 孔を3穴穿つ。	
177-4 PL55	土師器 直口壺	覆土	頸へら部片	口 - 底 - 高 (2.9)	① 細砂粒 ② 酸化胎 ③ 2.5YR7/2灰黄	外面へラ磨き。内面へラ磨き。	
177-5 PL55	土師器 埴	覆土	体部片	口 - 底 - 高 (3.7)	① 細砂粒 ② 酸化胎 ③ 7.5YR6/4にふい橙	外面へラ磨き。内面へラ削で。	
177-6 PL55	土師器 台付甕	覆土	台部片	口 - 底 - 高 (3.8)	① 細砂粒、小練 ② 酸化胎 ③ 7.5YR7/4にふい橙	外面磨毛目。内面へラ削で。	
177-7 PL55	土師器 手取ね土 器	覆土	ほぼ完形	口 6.8 底 4.5 高 (4.1)	① 細砂粒 ② 酸化胎 ③ 7.5YR7/4にふい橙	外面へラ削り。内面へラ削で。口唇部を波状に整形。	

B区24号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
178-1 PL55	軟質陶器 内耳環	覆土	破片	口 - 底 - 高 -	① - ② - ③ 10YR7/3にふい黄橙	口縁部断面面わずかに窪む。体部下位の器壁厚1。酸化焼成。	江戸時代

C区1号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
180-1 PL55	土師器 杯	覆土	口へら部片	口 (12.0) 底 - 高 5.5	① 細砂粒、白色粒 ② 酸化胎 ③ 10YR8/4黄橙	外面横削のへラ削り。内外面口縁部横削で。 内面へラ削で。	器面やや厚減。
180-2 PL55	土師器 壺	覆土	口縁部片	口 (13.0) 底 - 高 (4.8)	① 細砂粒、小練 ② 酸化胎 ③ 7.5YR7/3にふい橙	内外面口縁部横削で。外面頸部に環状工具 による割突痕を認らす。	
180-3 PL55	土師器 小型甕	覆土	口縁部片	口 (13.0) 底 - 高 (4.0)	① 細砂粒、白色粒 ② 酸化胎 ③ 7.5YR7/3にふい橙	外面へラ削り。内外面口縁部横削で。内面へラ削で。	
180-4 PL55	土師器 甕	覆土	口へら部片	口 (15.6) 底 - 高 (7.2)	① 細砂粒、白色粒 ② 酸化胎 ③ 10YR7/2にふい黄橙	外面へラ削り。内外面口縁部横削で。内面へラ削り。	

C区2号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
180-1 PL55	土師器 高杯	覆土	口へら部片	口 (11.8) 底 - 高 (4.0)	① 細砂粒 ② 酸化胎 ③ 10YR7/2にふい黄橙	外面へら削り。内外面口縁部横削で。	
180-2 PL55	土師器 不明	覆土	体部片	口 - 底 - 高 -	① 細砂粒 ② 酸化胎 ③ 10YR2/1黒	外面へら削り。焼成後、孔を穿つ。器種は 定かからず。	

C区3号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
183-1 PL55	土師器 高杯	覆土	脚部片	口 - 底 - 高 (8.7)	① 細砂粒、白色粒 ② 酸化胎 ③ 7.5YR7/3にふい橙	外面へラ削で。内面へラ削で。	

遺物観察表

神宮番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
183-2 PL55	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (16.0) 底 - 高 (4.6)	①細砂粒 ②酸化塩 ③7.5YR7/4にふい煙	外面へラ削り。内外面口縁部横撫で。	
183-3 PL55	土師器 甕	覆土	底部片	口 - 底 6.0 高 (1.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③5YR5/4にふい赤褐	外面へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。	

C区4号溝遺物観察表

神宮番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
183-1 PL55	土師器 杯	覆土	口縁部片	口 (16.0) 底 - 高 (3.5)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③7.5YR5/4にふい煙	外面体部へラ削り。内外面口縁部横撫で。	
183-2 PL55	土師器 甕	覆土	口～胴部片	口 (17.0) 底 - 高 (8.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③5YR3/1黒褐	外面胴部へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。	
183-3 PL55	須恵器 横瓶	覆土	口縁部片	口 - 底 - 高 -	①緻密 ②還元焼 ③2.5YR7/1灰白	横瓶の口縁部。他に7片の胴～胴部片あり。胴部にはカキ目整形痕が残る。口～胴部に自然割が見られる。	

C区5号溝遺物観察表

神宮番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
183-1 PL55	土師器 杯	覆土	口～底部 1/3	口 (11.0) 底 (6.0) 高 3.9	①細砂粒 ②酸化塩 ③7.5YR5/4にふい煙	外面体部へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。底部は平底を呈す。	
183-2 PL55	土師器 高杯	覆土	脚部片	口 - 底 - 高 (3.8)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③7.5YR7/3にふい煙	外面へラ削り。内面へラ削り。	

C区6号溝遺物観察表

神宮番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
183-1 PL55	土師器 鉢	覆土	口縁部片	口 (12.8) 底 - 高 (6.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③10YR7/3にふい黄煙	外面体部へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。	
183-2 PL55	土師器 杯	覆土	口～体部片	口 (13.0) 底 - 高 (4.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③5YR6/6煙	外面体部へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。	断面やや厚減。
183-3 PL55	土師器 高杯	覆土	脚～底部片	口 - 底 (13.0) 高 (8.0)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化塩 ③7.5YR7/3にふい煙	外面脚部へラ削り。断面横撫で。内面へラ削り。	
183-4 PL55	土師器 甕	覆土	底部片	口 - 底 (10.0) 高 (3.0)	①細砂粒 ②酸化塩 ③10YR8/3煙	外面体部へラ削り。内面へラ削り。平底の中心部が円形に凹む。	
183-5 PL55	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (14.0) 底 - 高 (4.3)	①細砂粒 ②酸化塩 ③10YR7/2にふい黄煙	外面へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。外反するS字状口縁。	
183-6 PL55	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (11.0) 底 - 高 (5.0)	①細砂粒、小礫 ②酸化塩 ③7.5YR4/6褐	外面へラ削り。内外面口縁部横撫で。内面へラ削り。口縁部は面取り調整を施す。	

C区7号溝遺物観察表

神宮番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
183-1 PL55	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (17.0) 底 - 高 (2.3)	①細砂粒 ②酸化塩 ③7.5YR4/1褐灰	外面頸部刷毛目。内外面口縁部横撫で。近江系の甕か。	

C区9号溝遺物観察表

神宮番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
183-1 PL55	土師器 甕	覆土	底部片	口 - 底 (8.4) 高 (0.8)	①細砂粒 ②酸化塩 ③7.5YR6/4にふい煙	底部へラ削り。	
183-2 PL55	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 (2.5)	①細砂粒 ②酸化塩 ③10YR7/3にふい黄煙	内外面口縁部横撫で。口縁部は面取り調整を施す。	

D区1号溝遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
186-1 PL55	土師器 器台	覆土	脚部片	口 — 底高 (5.9)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR7/3にぶい黄褐色	外面へラ拽で、内面へラ拽で、孔を3穴穿つ。	
186-2 PL55	土師器 高坏	覆土	脚部片	口 — 底高 (6.2)	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼 ③5YR8/6焼	外面へラ拽で、内面へラ拽で、内面に穀り 難見られる。	3と同一個 体か。
186-3 PL55	土師器 高坏	覆土	坏部片	口 — 底高 (3.2)	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼 ③5YR8/6焼	外面へラ拽で、内面へラ拽で後、へラ磨き。	2と同一個 体か。
186-4 PL55	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (18.0) 底高 (6.3)	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼 ③10YR7/3にぶい黄褐色	内外面口縁部横側で、内面へラ拽で、	
186-5 PL55	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (25.0) 底高 8.2	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR7/3にぶい黄褐色	口縁部に段を持つ。内外面口縁部横側で、	
187-6 PL55	土師器 甕	覆土	底部片	口 — 底高 (6.1)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR8/3浅黄褐色	外面へラ削り、底部へラ削り、内面へラ拽 で、	
187-7 PL55	須恵器 坏	覆土	ほぼ完形	口 12.4 底 9.0 高 3.3	①細砂粒 ②還元焼 ③10YR7/1灰色	右回転軸壺形。底部は回転へラ削り（へ ラ起こし）。	
探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
187-8 PL55	石質品 小型	覆土	2/3	蛇紋岩	長さ 3.2 幅 2.4 厚さ 0.4 重量 5.15	孔径0.2、表面斜位、裏面横位の研磨板残る。 突起なし。	

D区2号溝遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
187-1 PL55	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (16.6) 底 — 高 (5.5)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR8/2灰黄褐色	内外面口縁部横側で、口縁部は有段口縁。	
187-2 PL55	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (19.0) 底 — 高 (4.0)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR4/1黒灰	外面頸部刷毛目。口縁部横側で、内面刷毛 目。	
187-3 PL55	土師器 小型甕	覆土	口縁部片	口 (13.0) 底 — 高 (5.6)	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼 ③5YR5/4にぶい赤褐色	外面へラ削り、口縁部横側で、内面へラ拽 で、甕の可能性もある。	

D区4号溝遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
189-1 PL55	軟質陶器 内耳鍋	覆土	口縁部片	口 — 底高 —	① ② ③7.5YR7/3にぶい黄褐色	酸化焼焼成。口縁部上面平坦。口縁部内 面段差あり。	16から17 世紀
189-2 PL55	軟質陶器 内耳鍋	覆土	口縁部片	口 — 底高 —	① ② ③2.5Y8/2灰白	焼し焼成。口縁部丸みを帯びる。外部外 面中位接合痕明瞭。	江戸時代
189-3 PL55	陶器 皿	覆土	底部片	口 — 底高 —	① ② ③2.5Y7/2灰黄	灰釉。内面鉄釉。江戸時代。	瀬戸・美濃
189-4 PL55	磁器 猪口	覆土	口～底部片	口 (6.0) 底 3.4 底高 3.3	① ② ③10YR/1灰白	透明釉やや青みを帯びる。江戸時代。	製作地不詳

D区5号溝遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
189-1 PL55	軟質陶器 内耳鍋	覆土	口縁部片	口 — 底高 —	① ② ③5Y8/2灰白	口縁部上面平坦で、内側にわずかに張り 出す。口縁部内面に段あり。	16から17 世紀
189-2 PL55	軟質陶器 内耳鍋	覆土	口縁部片	口 — 底高 —	① ② ③10Y6/1灰	内耳下縁は体部に貼り付ける。	16から17 世紀
189-3 PL55	軟質陶器 火舎	覆土	脚部片	口 — 底高 —	① ② ③10Y4/1黒灰	低い脚一カ所残存。焼し焼成。	江戸時代

遺物観察表

D区6号溝遺物観察表

探頭番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
190-1 PL55	軟質陶器 内耳鍋	覆土	口縁部片	口 - 底 - 高 -	① - ② - ③ 5YR/2灰白	口縁端部上面平坦で内側は張り出す。器表は酸化燻だが、内側は黒灰色を呈す。	時期不詳
190-2 PL55	軟質陶器 内耳鍋	覆土	口縁部片	口 - 底 - 高 -	① - ② - ③ 10Y6/1灰	口縁端部上面は平坦。器表は酸化燻だが、内側は黒灰色を呈す。	時期不詳
190-3 PL55	軟質陶器 内耳鍋	覆土	口縁部片	口 - 底 - 高 -	① - ② - ③ 10Y6/1灰	口縁端部上面は平坦。わずかに窪む。器表は酸化燻だが、内側は黒灰色を呈す。	時期不詳

D区8号溝遺物観察表

探頭番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
191-1 PL56	須恵器 高台付壺	覆土	底部片	口 - 底 (7.4) 高 (1.8)	① 細砂粒、白色粒 ② 還元燻 ③ 5Y6/1灰	縦輪整形。付高台。高台は進台形状を呈する。	器面摩滅。

D区12号溝遺物観察表

探頭番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
192-1 PL56	土師器 坏	覆土	口～底部	口 (14.0) 底 - 高 (3.0)	① 細砂粒 ② 酸化燻 ③ 5YR5/4にふい赤褐	外面体～底部へラ削り。内外面口縁部横溝で。内面へラ削り。	
192-2 PL56	須恵器 蓋	覆土	口縁部片	口 - 底 (14.0) 高 (1.5)	① 細砂粒 ② 還元燻 ③ N6/1灰	縦輪整形。天井部は回転へラ削り。	
探頭番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
192-3 PL56	石製品 砥石	覆土	半欠	砥石	長さ 6.8 幅 7.8 厚さ 3.8 重量 230.0	透紋岩。中砥粒。使用は表・裏・内側部の4面。奥小口に削り跡らしき面あり。裏面と奥小口は被熱色変あり。裏面に刃ならし傷あり。手持ち痕。欠損は旧時。	

D区13号溝遺物観察表

探頭番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
193-1 PL56	土師器 坏	覆土	口～体部片	口 (11.6) 底 - 高 (3.7)	① 細砂粒 ② 酸化燻 ③ 7.5YR7/4にふい橙	外面粗いへラ磨き。内外面口縁部横溝で。内面丁寧なへラ磨き。	器面摩滅。
193-2 PL56	土師器 甗	覆土	口～体部片	口 (21.6) 底 - 高 (11.7)	① 細砂粒 ② 酸化燻 ③ 10YR8/3洗黄橙	外面縦位のへラ磨き。内外面口縁部横溝で。内面丁寧なへラ磨き。	
193-3 PL56	土師器 甗	覆土	胴～底部	口 - 底 (8.0) 高 (11.0)	① 細砂粒 ② 酸化燻 ③ 10YR8/4洗黄橙	外面縦位のへラ磨き。内面丁寧なへラ磨き。	
193-4 PL56	土師器 甗	覆土	底部	口 - 底 (7.6) 高 (4.3)	① 細砂粒、白色粒 ② 酸化燻 ③ 10YR6/4にふい黄橙	外面へラ削り。内面へラ削り。	
193-5 PL56	土師器 甗	覆土	口～頸部片	口 - 底 (7.6) 高 (7.6)	① 細砂粒、褐色粒 ② 酸化燻 ③ 10YR7/3にふい黄橙	外面へラ磨き。内面へラ削り。	器面中摩滅。
193-6 PL56	土師器 手捏ね土器	覆土	完形	口 3.4 底 2.0 高 2.1	① 細砂粒 ② 酸化燻 ③ 10YR7/3にふい黄橙	外面へラ削り。内面へラ削り。器面に指面圧痕残る。ミニチュアのゴップ型土器。	
探頭番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
193-7 PL56	石製品 有孔円盤	覆土	2/4	蛇紋岩	長さ 2.2 幅 1.0 厚さ 0.3 重量 1.04	孔径0.15。両面に斜位の研削痕残る。光沢あり。	

E区2号溝遺物観察表

探頭番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
196-1 PL56	土師器 甗	覆土	口縁部片	口 (20.2) 底 - 高 (4.8)	① 細砂粒、白色粒 ② 酸化燻 ③ 7.5YR5/6橙	外面刷毛目。内外面口縁部横溝で。内面刷毛目。	
196-2 PL56	土師器 台付甗	覆土	台部	口 - 底 8.5 高 (5.3)	① 細砂粒、白色粒 ② 酸化燻 ③ 7.5YR6/6橙	外面刷毛目。内面へラ削り。	

E区3号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
197-1 PL56	軟質陶器 内耳皿	覆土	口縁部片	口 底 高 — — —	① ② ③	口縁部平坦。胎土内面に小さく張り出す。横し脱成。江戸時代。	在地系
197-2 PL56	陶器 灯明皿	覆土	口～底部 1/2	口 (9.9) 底 (4.2) 高 2.2	① ② ③2.5YR/2灰白	胎土。内外面胎部に油痕残る。底部から体部外面の輪を拭い取る。	瀬戸・美濃
197-3 PL56	陶器 碗	覆土	口～底部 1/3	口 底 高 — — —	① ② ③10YR/1灰白	丸碗。「孟宗瀧」を描く。	波佐見系?
197-4 PL56	陶器 すり鉢	覆土	口縁部片	口 底 高 — — —	① ② ③7.5Y7/1灰白	口縁部大きく三段に作る。口縁部内面突帯や不明瞭。	塘・明石
197-5 PL56	瓦	覆土	破片	口 底 高 — — —	① ② ③	十能瓦。	在地系

E区4号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
199-1 PL56	軟質陶器 蓋?	覆土	口縁部片	口 底 高 — — —	① ② ③	圓錐形。胎土焼成。	時期不詳
199-2 PL56	陶器 碗	覆土	破片?	口 底 高 — — —	① ② ③(3.0)	外面に花卉文。呉製の色が濃く、近代の所産であろう。	製作地不詳

E区6号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
199-1 PL56	瓦	覆土	破片	口 底 高 — — —	① ② ③	十能軒先瓦。	在地系

E区7号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
199-1 PL56	陶器 小瓶	覆土	口～体部片	口 底 高 — — —	① ② ③10YR/1灰白	内面から高台輪灰胎。	瀬戸・美濃

E区8号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
202-1 PL56	土師器 器台	覆土	器受け部～ 結合部	口・底 高 (7.3) 孔径 0.6	①細砂粒、褐色粒 ②酸化染 ③5YR6/8橙	外面へう磨き。内面へう磨で。結合器台。器受け部中央に孔を穿つ。	器面厚減。

E区10号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
202-1 PL56	土師器 坏	覆土	口～体部片	口 (15.0) 底 高 (2.7)	①細砂粒 ②酸化染 ③5YR6/橙	外面へう磨り。口縁部内外面横撫で。内面へう磨で。	
202-2 PL56	土師器 坏	覆土	口～体部片	口 (14.8) 底 高 (2.7)	①細砂粒 ②酸化染 ③5YR6/7橙	外面へう磨り。口縁部内外面横撫で。内面へう磨で。	

E区11号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
203-1 PL56	陶器 すり鉢	覆土	胴部片	口 底 高 — — —	① ② ③	体部片。外面上位に鉄肥。	丹波

F区1号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
205-1 PL56	土師器 高坏	覆土	脚部片	口 底 高 (6.7)	①細砂粒、白色粒 成 ②酸化染 ③7.5YR7/6橙	外面へう磨で。内面へう磨で。内面に輪積み痕・絞り痕が残る。	

遺物観察表

F区4号溝遺物観察表

採回番号 図数番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①輪土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
206-1 PL56	カワラケ	覆土	底部片	口 - 底高 (6.0)	①細砂粒、白色粒 ②酸化層 ③7.5YR5/4浅黄橙	左回転糸切り無調整。	江戸時代?
206-2 PL56	軟質陶器 土鍋	覆土	破片	口 - 底高 -	① - ② - ③黒褐色2.5Y3/1	体部外面中位接合痕明瞭。内面は磨かれ、口縁部は尖り気味となるなど始胎とは異なる特徴を持つ。	江戸以降
206-3 PL56	陶器 碗	覆土	体~底部片	口 - 底高 (3.6)	① - ② - ③10Y8/1灰白	内面から高台輪粘。江戸時代。	瀬戸・美濃

遺構外出土遺物(縄文) 遺物観察表

採回番号 図数番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①輪土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
208-1 PL56	縄文土器 深鉢	B-1区	胴部片	口 - 底高 -	①細砂粒、小礫 ②良好 ③2.5YR4/4にぶい赤褐	目録復縁を交互に引きずるようにロッキングしている。	前期後半浮島式
208-2 PL56	縄文土器 深鉢	B-4区	胴部片	口 - 底高 -	①細砂粒、黒色炭粉粒 ②良好 ③5YR4/6赤褐	幅の狭い半截竹管による平行沈線を縦位に施文。地文の縄文は、単節しRの斜行縄文。	前期後半諸磯a式
208-3 PL56	縄文土器 深鉢	B-2区	胴部片	口 - 底高 -	①細砂粒、白色粒 ②良好 ③10YR6/3にぶい黄橙	器面に粘土粒を貼り付けた浮線文。浮線文には、深いへう状の工具による刻みが付けられる。	前期後半諸磯b式
208-4 PL56	縄文土器 深鉢	B-2区	胴部片	口 - 底高 -	①細砂粒、白色粒 ②良好 ③7.5YR6/4にぶい橙	幅の狭い半截竹管による平行沈線。縦位に区画した後斜線を引く。粘土瘤による棒状・ボタン状の貼付。	前期後半諸磯c式
208-5 PL56	縄文土器 深鉢	B-3区	胴部片	口 - 底高 -	①細砂粒、白色粒 ②良好 ③7.5YR6/6橙	粘土粒を貼り付けた結節浮線文。曲線を描く。	前期後半諸磯c式
208-6 PL56	縄文土器 深鉢	C-1区	口縁部片	口 - 底高 -	①細砂粒、白色粒 ②良好 ③7.5YR5/4にぶい橙	平行沈線により口縁部文様帯を区画。区画内を斜線により格子目状に文様を描く。	前期末
208-7 PL56	縄文土器 深鉢	B-2区	胴部片	口 - 底高 -	①細砂粒、白色粒 ②良好 ③7.5YR5/5にぶい橙	結節の縄文。結節部が縦位に施文される。厚圧が強い。縄文原形は見えない。	中期初頭五瀬ヶ台式
208-8 PL56	縄文土器 深鉢	B-4区	胴部片	口 - 底高 -	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③10YR6/3にぶい黄橙	口縁部は、隆帯による橋門の文様区画。胴部は、隆帯が垂下する。縄文は、LRの斜行縄文。	中期後半加賀利E3式
208-9 PL56	縄文土器 深鉢	A-1区	胴部片	口 - 底高 -	①細砂粒、小礫 ②良好 ③7.5YR6/4にぶい橙	沈線で文様帯を区画。縄文原形は摩滅して見えない。	後期初頭鉢名寺式
208-10 PL56	縄文土器 深鉢	C-4区	口縁部片	口 - 底高 -	①細砂粒、小礫 ②良好 ③7.5YR6/5にぶい橙	口縁部は、小波状になる。口筒突起の両端に円形の刺突。縄文は、単節しR。	後期前半堀之内式
採回番号 図数番号	種類	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
208-11 PL56	石器	A区 KE-26	完形	チャート	長さ 2.55 幅 1.30 厚さ 0.30 重量 0.97	有基石。 有基石。 有基石。	
208-12 PL56	石器	A区 表土	完形	珪質頁岩	長さ 2.45 幅 1.50 厚さ 0.40 重量 1.05	有基石。 有基石。 有基石。	
208-13 PL56	石器	B区 表土	完形	珪質頁岩	長さ 7.50 幅 2.70 厚さ 0.95 重量 18.57	右側縁一部欠損。断面は扇状を呈する。	
208-14 PL56	石器	B区 表土	完形	黒曜石	長さ 1.50 幅 1.45 厚さ 0.20 重量 0.36	凹器無茎。	
208-15 PL56	石器	B区 表土	完形	黒曜石	長さ 2.10 幅 1.50 厚さ 0.35 重量 0.94	凹器無茎。	
208-16 PL56	石器	C区 1住覆土	完形	黒曜石	長さ 2.05 幅 1.70 厚さ 0.30 重量 0.79	凹器無茎。	
208-17 PL56	石器	C区 表土	完形	チャート	長さ 2.45 幅 1.70 厚さ 0.25 重量 0.92	凹器無茎。	
208-18 PL57	石器	C区 9住覆土	完形	チャート	長さ 1.90 幅 1.35 厚さ 0.33 重量 0.62	凹器無茎。先端部及び脚部一部欠損。	
209-19 PL57	石器	D区 13溝覆土	完形	チャート	長さ 2.40 幅 1.70 厚さ 0.35 重量 1.29	凹器無茎。	
209-20 PL57	石器	D区 表土	完形	チャート	長さ 2.60 幅 1.75 厚さ 0.35 重量 1.18	凹器無茎。脚部僅かに欠損。	
209-21 PL57	石器	D区 表土	完形	チャート	長さ 2.83 幅 1.83 厚さ 0.45 重量 1.95	凹器無茎。先端部及び脚部欠損。	
209-22 PL57	石器	D区 表土	完形	チャート	長さ 3.40 幅 1.45 厚さ 0.35 重量 1.40	有基石。 有基石。	
209-23 PL57	石器	D区 6溝覆土	完形	珪質頁岩	長さ 4.60 幅 2.70 厚さ 1.05 重量 12.40	先端部に新しい割れあり。	

遺構外出土遺物 (古代) 遺物観察表

採区番号 図取番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形技法の特徴	備考
210-1 PL57	土師器 小型甕	B-4区	口縁部片	口 底 高 (18.8) — — 3.0	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼、良好 ③10YR7/4にふい貴橙	外面刷毛目。内外面口縁部横撫で。	古墳初頭
210-2 PL57	土師器 甕	B-3区	口縁部片	口 底 高 — — —	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼、良好 ③10YR7/4にふい貴橙	外面刷毛目状遺糸文、口縁下縁に板小口による刷毛を施す。内面は磨き。	古墳初頭
210-3 PL57	土師器 甕	B-3区	口縁部片	口 底 高 — — —	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼、良好 ③5YR4/4にふい赤褐	外面頸部へラ磨き。内外面口縁部横撫で。外面肩面部と内面口縁部に刺突痕を施す。近江系。	古墳初頭
210-4 PL57	土師器 甕	C-2区	口縁部片	口 底 高 — — —	①細砂粒、白色粒 ②良好 ③5YR6/4にふい橙	内外面口縁部横撫で。口縁は「5」の字状を呈す。千穂焼か。	古墳初頭
210-5 PL57	土師器 高坏	C-2区	胴部片	口 底 高 — — —	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR6/6橙	外面磨きによる同心円文と短線文を施す。瀬内内系。	古墳初頭
210-6 PL57	土師器 埴	B-4区	体部片1/3	口 底 高 3.6 (2.8)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③5YR6/5にふい橙	外面体部へラ磨き。内面へラ撫で。平底を呈す。	器底厚減
210-7 PL57	土師器 不明	B-4区	破片	口 底 高 — — —	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にふい橙	器台の台部片か器受け部片。台部片と想定して同化。上下逆の可能性あり。	
210-8 PL57	土師器 坏	C-1区	2/3	口 底 高 15.0 (4.3)	①細砂粒、白色粒 ②酸化焼 ③5YR6/4にふい橙	外面へラ磨り。内外面口縁部横撫で。内面へラ撫で後、粗いへラ磨き。	
210-9 PL57	土師器 器台	C-4区	器脚	口 底 高 — (5.6) —	①細砂粒 ②酸化焼 ③5YR6/4にふい橙	外面へラ磨で後、へラ磨き。内面へラ撫で。孔を5穴穿つ。	
210-10 PL57	土師器 器台	B-4区	器へ台部 3/4	口 底 高 7.3 (4.6)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR6/4にふい貴橙	外面へラ磨り。内外面口縁部横撫で。内面へラ撫で。孔を3穴穿つ。	
210-11 PL57	土師器 直口壺	B-4区	胴部2/3	口 底 高 — (8.8) —	①細砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③7.5YR7/4にふい橙	外面へラ磨り?撫で。内面へラ撫で。	
210-12 PL57	土師器 短頸壺	F-3区	体部片	口 底 高 — (7.5) —	①細砂粒、輝石 ②酸化焼 ③10YR8/3浅黄橙	外面へラ撫で後粗いへラ磨き。内面へラ撫で。	
210-13 PL57	土師器 壺	C-3区	底部片	口 底 高 6.8 (1.8)	①粗砂粒、褐色粒 ②酸化焼 ③10YR5/1黄灰	外面へラ磨り。内面へラ撫で。	
210-14 PL57	土師器 台付甕	C-2区	口縁部片	口 底 高 15.0 (3.7)	①細砂粒 ②酸化焼 ③7.5YR6/4にふい橙	外面粗い刷毛目。内外面口縁部横撫で。内面へラ撫で。	
210-15 PL57	土師器 小型壺	JS-25	口縁部片	口 底 高 10.0 (6.5)	①細砂粒 ②酸化焼 ③10YR4/6赤	内外面丁寧なへラ磨き後、赤色塗彩。瓢箪形の壺。	
210-16 PL57	須恵器 甕	D-4区	胴部片	口 底 高 — — —	①緻密 ②還元焼 ③7.5YR6/1灰	甕輪整形。欠け口の胎土は濃いセピア色に焼きしまっている。外面自然釉薬が残る。内面被り痕あり。	
210-17 PL57	須恵器 甕	E-1区	胴部片	口 底 高 — — —	①緻密 ②還元焼 ③2.5YR6/1黄灰	甕輪整形。外面刷毛目に刺突痕文を施す。自然釉が残る。掘入品。	
211-18 PL57	須恵器 大甕	I-1区	口縁部片	口 底 高 28.0 (8.0)	①緻密 ②還元焼 ③N5/灰	甕輪整形。外面平行印き目。内面弧状のアケ具痕。	
211-19 PL57	須恵器 大甕	I-1区	口縁部片	口 底 高 18.6 (7.3)	①緻密 ②還元焼 ③N5/灰	甕輪整形。外面平行印き目後、肩部は磨状工具による撫で。内面背海波紋。	
211-20 PL57	反輪陶器 甕	KJ-25	底部片	口 底 高 7.5 (1.5)	①緻密 ②還元焼 ③2.5YR7/2黄灰	付高台。高台は高く直線的である。虎渓山1号窯式期。	
211-21 PL57	埴輪 形象 (鈴)	D-4区	1/2	長さ 3.6 厚さ 1.5 孔径 0.5	①赤色・透明・灰色粒 ②酸化焼 ③5YR6/6橙	馬形埴輪に付属する鈴。板状あるいは塊状粘土を被り込んで成形し、中空部をもつ。縦・横線で調整。鈴との境は横位に強く撫で。肩部に磨状工具による一文字の刷毛後磨状工具による刺突で孔を穿つ。	

遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考	
211-22 PL57	埴 円筒	I-1区	胴部片	口 底高 —	— — —	①白色・透明・赤色粒、 チャート、凝灰岩 ②酸化燼 ③5YR6/6橙	外面 突帯貼付後、二次調整横刷毛で工具 静止痕あり。突帯断面台形状で端部の器表 が剥離。内面 斜め削で。	
211-23 PL57	埴 円筒	I-1区	底部片	口 底高 —	— — —	①白色・透明・赤色粒、 チャート、凝灰岩 ②酸化燼 ③7.5YR7/4鈍い橙	最下層断面中央の粘土層に内外面から粘土 紐を回して成形により肥厚する。底部調整 なし。外面 縦刷毛。内面 斜・横削で。 最下層横削で。	
211-24 PL57	埴 円筒	I-1区	胴部片	口 底高 —	— — —	①白色・赤色粒、輝石類、 凝灰岩 ②酸化燼 ③7.5YR6/4鈍い橙	外面 縦刷毛後、突帯貼付。器表が薄減し 刷毛目不明。突帯断面削いM字形で上縁 が突出。内面 斜め削で。	
211-25 PL57	埴 円筒	A区	胴部片	口 底高 —	— — —	①白色・透明・赤色粒、 凝灰岩、輝石類 ②酸化燼、良好 ③7.5YR6/8鈍い橙	外面 縦刷毛後突帯貼付。突帯断面M字 形で均整が取れるも下端の削でやや中傾。円 形と思われる透かし孔1/4径。内面 縦・斜 め削で。突帯直裏と下端付近に輪轡痕2段。	
211-26 PL57	埴 円筒	A区	胴部片	口 底高 —	— — —	①白色・赤色粒、凝灰岩 ②酸化燼 ③7.5YR6/5鈍い橙	外面 一次調整縦刷毛後突帯との境付近に 斜でランダムな斜め刷毛で、斜め刷毛と突 帯との前後関係は不明。突帯断面削いM字 形で下端の削で。内面 縦・斜め削で。	
211-27 PL57	埴 円筒	A区	底部片	口 底高 —	— — —	①赤色・透明・黒灰色 粒、凝灰岩 ②酸化燼 ③7.5YR6/6鈍い橙	外面 縦刷毛。内面 斜め削で。底部調整 なし。	
211-28 PL57	埴 形象	A区		口 底高 —	— — —	①白色・赤色粒、凝灰岩 ②酸化燼 ③7.5YR6/6鈍い橙	形象埴輪の一部だが詳細不明。外面調整の あり方から其の腹・肩の外縁真などの直接 目に触れない箇所が考えられるが、器内が 厚い。外面 単位約10mm斜・縦位刷毛後 斜め削。内面 縦削で。	
211-29 PL57	土製品 円筒	KJ-26	完形?	径 3.2 厚さ 0.5 重さ 6.6	①細砂粒 ②酸化燼 ③10YR7/2にふい責體	土師器片の断面を打ち抜いて円筒状に加工 する。表面は丁寧に削られているが、裏面未 調整。		
探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値 (cm.g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考	
211-30 PL57	土製品 土盤	E-3区	ほぼ完形	①5.3②2.6③1.2④25	—	外面へ丸削り。押轡色き付けにより成形か。		
211-31 PL57	土製品 土盤	E-3区	2/3	①(3.8)②1.7③0.6④10	—	押轡色き付けにより成形か。		
211-32 PL57	土製品 土盤	C-2区	ほぼ完形	①3.9②1.7③0.4④10	—	押轡色き付けにより成形か。		
探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm.g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考	
212-33 PL57	石製品 削形	D区表土	4/5	鑽石	長さ 2.7 幅 1.6 厚さ 0.25 重量 2.43	孔径0.15。両面傾位の研磨痕残る。欠孔あり。 孔を2穴穿つ。土器を研磨する磨き石か。長年使用したた め、全面に光沢あり。		
212-34 PL57	石製品 磨き石	D区表土	完形	珪化重質岩	長さ 2.7 幅 2.65 厚さ 2.5 重量 22.15	長さ 7.2 幅 5.2 厚さ 3.6 重量 130	奥、前小口は凹欠。使用は4面。砂岩ながら の粗く中・重感。やや中傾。表面に凹凸あり。	手持砥
212-35 PL57	石製品 砥石	A区	2/3	砂岩	長さ 7.2 幅 5.2 厚さ 3.6 重量 130			

遺構外出土遺物(中世以降) 遺物観察表

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
213-1 PL58	カワラケ	KE-27	完形	口 9.2 底 5.6 高 2.0	①細砂粒、白色粒 ②酸化燼 ③7.5YR8/4浅黄橙	左回転糸切り無調整。歪みあり。口縁部 丸みを帯びる。江戸時代。	
213-2 PL58	カワラケ	KE-27	完形	口 9.7 底 5.5 高 1.5	①細砂粒 ②酸化燼 ③7.5YR8/4浅黄橙	左回転糸切り無調整。1と口縁部は同様で あるが、器高が低い。江戸時代。	
213-3 PL58	カワラケ	A区表土 (口縁部2箇所欠損)	ほぼ完形	口 9.5 底 6.4 高 2.0	①細砂粒、褐色粒 ②酸化燼 ③7.5YR8/4浅黄橙	左回転糸切り無調整。口縁部丸みを帯び る。口縁部灯芯痕三カ所。	
213-4 PL58	カワラケ	A区1号 トレンチ	完形	口 9.0 底 5.4 高 1.9	①細砂粒 ②酸化燼 ③5YR7/4にふい橙	右回転糸切り無調整。底径小さい。江戸時 代。	
213-5 PL58	カワラケ	A区表土	ほぼ完形	口 9.0 底 5.4 高 1.8	①細砂粒、白色粒 ②酸化燼 ③7.5YR8/4浅黄橙	左回転糸切り無調整。口縁部丸みを帯び る。江戸時代。	
213-6 PL58	カワラケ	A区表土	3/4	口 9.3 底 5.8 高 2.0	①細砂粒 ②酸化燼 ③7.5YR8/4浅黄橙	左回転糸切り無調整。江戸時代。	
213-7 PL58	カワラケ	A区表土	1/2	口 10.3 底 6.0 高 2.1	①細砂粒 ②酸化燼 ③7.5YR8/4浅黄橙	口縁部内湾気味。江戸時代。	
213-8 PL58	カワラケ	JK-25 26	1/3	口 8.5 底 5.4 高 1.9	①細砂粒 ②酸化燼 ③10YR8/4浅黄橙	回転糸切り無調整。回転方向不明。江戸時 代。	

採掘番号 区取番号	種別 器種	出土位置	部位 現存	計測値(cm)	①粘土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
213-9 PL58	軟質土器 香炉	J K-25	1/4	口 底 高 — — 4.6	①(9.6) ②(6.4) ③5YR4/8赤褐	内面磨削調整痕。外面型のバリ痕が底部外 面から口縁部外面に残る。近現代か?	江戸17C頃 か
213-10 PL58	磁器 碗	K H-26	破片	口 底 高 — — —	①— ②— ③7.5YR6/2灰オリーブ	龍泉窯系か。	中国産
213-11 PL58	磁器 碗	A区旧水路	底～胴部片	口 底 高 — (3.5) —	①— ②— ③—	平形飯碗。ゴム印版。高台内「62」の生 産者番号陽刻。	美濃
213-12 PL58	磁器 皿	J L-26	4/5	口 底 高 — 8.0 4.0	①(16.4) ②— ③—	クロム青磁。底部に白土で花卉文描く。近 現代。	瀬戸・美濃
213-13 PL58	陶器 灯明皿	A区旧水路	破片	口 底 高 — (6.0) (1.0)	①— ②— ③7.5YR5/4にふい濁	内面から口縁部外面鉄泥。	志戸呂 (18C後半?)
213-14 PL58	陶器 灯明受皿	A区旧水路	4/5	口 底 高 — 10.2 4.6 2.2	①— ②— ③7.5YR5/4にふい濁	磨削。体部から底部外面の磨拭い取る。	瀬戸・美濃
213-15 PL58	軟質陶器 鉢か	J R-26	口縁部片	口 底 高 — (16.9) — (2.0)	①— ②— ③10YR3/1オリーブ照	滑し焼成。外面篋状工具で施文。	江戸か
213-16 PL58	中口磁器 合子	D区表土	破片	口 底 高 — (4.0) — (1.4)	①— ②— ③—	押し型成形。内面から口縁部外面磨削。外 面菊花状文様を型で施文。	肥前
214-17 PL58	磁器 碗	E区旧水路	破片	口 底 高 — (5.4) (5.1)	①— ②— ③10Y8/1灰白	筒形碗。見込み五弁花。外面菊花文。焼成 不良。	肥前?
214-18 PL58	磁器 碗	E区旧水路	破片	口 底 高 — (10.8) (5.1) 5.4	①— ②— ③10Y8/1灰白	外面花卉文。輪は青みを帯びる。	波佐見系
214-19 PL58	磁器 碗	E区旧水路	1/4	口 底 高 — (3.6) (3.8)	①— ②— ③10Y8/1灰白	丸碗。見込み五弁花。	肥前
214-20 PL58	磁器 碗	E区旧水路	体～底部片	口 底 高 — (4.6) (5.0)	①— ②— ③10Y8/1灰白	外面雪輪樹文。高台内磨削「大」?筋。	波佐見系
214-21 PL58	磁器 碗	E区旧水路	1/3	口 底 高 — (4.9) (4.8)	①— ②— ③10Y8/1灰白	外面雪輪樹文。高台内不明跡。	波佐見系
214-22 PL58	磁器 碗	E区旧水路	1/4	口 底 高 — (4.8) (4.7)	①— ②— ③10Y8/2灰白	外面雪輪樹文。高台内不明跡。	波佐見系
214-23 PL58	磁器 碗	E区旧水路	1/3	口 底 高 — (5.0) (4.6)	①— ②— ③10Y8/1灰白	外面雪輪樹文。高台内不明跡。	波佐見系
214-24 PL58	磁器 碗	E区旧水路	破片	口 底 高 — (11.2) (4.0) (5.6)	①— ②— ③10Y8/1灰白	平形飯碗。外面ゴム印版染付け。近現代。	瀬戸・美濃
214-25 PL58	磁器 碗	E区旧水路	破片	口 底 高 — (5.0) (4.5)	①— ②— ③10Y8/1灰白	京焼風陶器。内面鉄絵。高台脇以下無軸。	肥前
214-26 PL58	陶器 碗	E区旧水路	1/6	口 底 高 — (10.0) — (5.6)	①— ②— ③10Y8/1灰白	陶胎染付。桜を含む海浜風景か。	肥前
214-27 PL58	陶器 碗	E区旧水路	1/4	口 底 高 — (11.0) (5.4) (7.0)	①— ②— ③10Y8/1灰白	京焼風陶器。貝器手焼。	肥前
214-28 PL58	陶器 碗	E区旧水路	1/4	口 底 高 — (4.4) (4.2)	①— ②— ③10Y8/1灰白	京焼風陶器。高台内まで磨削。	肥前
214-29 PL58	陶器 碗	E区旧水路	1/5	口 底 高 — (5.4) (6.8)	①— ②— ③10Y8/1灰白	尾呂茶碗。胎輪。口縁部反輪掛ける。高台 脇以下無軸。	瀬戸・美濃
214-30 PL58	陶器 碗	E区旧水路	1/4	口 底 高 — (6.8) (6.2)	①— ②— ③10Y8/1灰白	内面から高台脇磨削。内面目帆3カ所。	瀬戸・美濃
214-31 PL58	陶器 碗	E区旧水路	1/3	口 底 高 — (3.7) (4.4)	①— ②— ③10Y8/1灰白	内面から高台脇磨削。高台はシャープ。体 部残存範囲に文様は認められない。	京・信楽系
214-32 PL58	磁器 碗	E区旧水路	1/3	口 底 高 — (8.2) (3.0) (3.4)	①— ②— ③10Y8/1灰白	白磁器。	瀬戸・美濃?
214-33 PL58	磁器 皿	E区旧水路	1/2	口 底 高 — (13.4) (7.4) (2.8)	①— ②— ③10Y8/1灰白	口磨。内面磨削転写。	製作地不詳

遺物観察表

検出番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②灰成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
214-34 PL58	磁器 皿	E区旧水路	1/2	口 - 底 (5.9) 高 (2.4)	① ② ③10Y8/1灰白	いわゆる御深井。内面整状工具により施文。高台外面以下無輪。17世紀か。	瀬戸・美濃
214-35 PL58	磁器 皿	E区旧水路	底部1/2	口 - 底 (5.0) 高 -	① ② ③10Y8/1灰白	いわゆる御深井。木瓜形であろう。高台幅以下無輪。	瀬戸・美濃
214-36 PL58	磁器 皿	E区旧水路	底部1/2	口 (13.2) 底 (8.0) 高 (3.4)	① ② ③10Y8/1灰白	口縁部内面墨弾き。高台内界線一条。	肥前
214-37 PL58	磁器 皿	E区旧水路	1/4	口 (12.1) 底 (7.0) 高 (3.0)	① ② ③10Y8/1灰白	見込み五弁花コンニャク版。高台内界線一条。	波佐見系
214-38 PL58	磁器 皿	E区旧水路	1/5	口 - 底 (8.6) 高 (4.7)	① ② ③10Y8/1灰白	内面無輪。	波佐見系
214-39 PL58	磁器 徳利	E区旧水路	底部1/2	口 - 底 (14.8) 高 (10.0)	① ② ③5Y8/2灰白	鉄輪。体部下位内面無輪。底部外面の輪拭い取る。	瀬戸・美濃
215-40 PL58	陶器 徳利	E区旧水路	体部片	口 - 底 (12.4) 高 (9.6)	① ② ③5Y8/2灰白	鉄輪。内面無輪。底部外面輪拭い取る。	瀬戸・美濃
215-41 PL58	陶器 徳利	E区旧水路	体部片	口 - 底 (8.8) 高 (4.4)	① ② ③5Y8/2灰白	外面鉄輪。	肥前?
215-42 PL58	陶器 茶碗	E区旧水路	脚部片	口 7.6 底 5.4 高 4.9	① ② ③5Y8/2灰白	脚部内面と底部外面無輪。	京・信楽系?
215-43 PL58	陶器 灯明皿	E区旧水路	1/3	口 (8.2) 底 (4.1) 高 (1.8)	① ② ③5Y8/2灰白	内面から口縁部外面給輪。	瀬戸・美濃
215-44 PL59	陶器 火入れ	E区旧水路	底部片	口 - 底 (6.2) 高 (5.4)	① ② ③5Y8/2灰白	灰輪。内面と高台幅以下無輪。体部外面下位に取っ手接合痕残る。	瀬戸・美濃
215-45 PL59	磁器 碗	F区旧水路	1/2	口 10.4 底 4.5 高 5.4	① ② ③5Y8/2灰白	雪輪梅樹文。高台内不明筋。	波佐見系
215-46 PL59	陶器 茶碗	F区旧水路	台部片	口 - 底 5.3 高 (5.4)	① ② ③10Y8/1灰白	脚部内面と底部外面無輪。	京・信楽系?
215-47 PL59	磁器 碗	H-5区	底部片	口 - 底 (2.6) 高 (4.4)	① ② ③10Y8/1灰白	高台外面染め付け。	肥前
215-48 PL59	陶器 蓋	H-4区	1/5	口 - 底 (7.4) 高 (1.2)	① ② ③10Y8/1灰白	灰輪。受け部無輪。	製作地不詳
215-49 PL59	磁器 皿	H-2区	1/3	口 (6.8) 底 (2.5) 高 (2.5)	① ② ③10Y8/1灰白	いわゆる御深井。内面鉄給具による型紙摺り。高台幅以下無輪。	瀬戸・美濃
215-50 PL59	磁器 碗	I-1区	破片	口 - 底 (3.4) 高 (5.4)	① ② ③10Y8/1灰白	丸碗。	肥前
215-51 PL59	磁器 碗	I-1区	破片	口 - 底 (3.0) 高 (5.4)	① ② ③10Y8/1灰白	若松文。やや焼成不良。	肥前
215-52 PL59	磁器 碗	I-1区	底部片	口 - 底 (8.6) 高 (3.1)	① ② ③10Y8/1灰白	灰輪。高台内、見込み目痕残る。	美濃
215-53 PL59	磁器 皿	I-1区	底部片	口 (13.2) 底 (8.0) 高 (2.6)	① ② ③10Y8/1灰白	内面鉄給。焼成不良のため輪は不明であるが、おそらく長石輪であろう。	瀬戸・美濃
215-54 PL59	磁器 皿	I-1区	口縁部片	口 (15.2) 底 - 高 (2.7)	① ② ③5Y8/2灰白	灰輪を薄く施す。	美濃
215-55 PL59	陶器 割り鉢	JR-25	口縁部片	口 (30.0) 底 - 高 (3.3)	① ② ③5YR3/3暗赤褐	外面鉄泥。内面すり目。	丹波
215-56 PL59	陶器 割り鉢	JR-25	胴~底部片	口 (15.0) 底 (9.3) 高 -	① ② ③7.5YR6/3にふい煙	外面胴上半部に鉄泥。外面胴部に指面状庄痕あり。胴下半部回転へつ削り。内面すり目。	丹波
215-57 PL59	陶器 甕	A区表土	胴部片	口 - 底 - 高 -	① ② ③5YR4/3にふい煙	外面自然胎が流れる。中世。	常滑
215-58 PL59	軟質陶器 烙塔	A区旧水路	1/5	口 (38.6) 底 (34.6) 高 5.0	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	焼し焼成。耳一方所残存。体部外面下階重摺り。	江戸時代

標頭番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
215-59 PL59	軟質陶器 鉢か	A区旧水路	口縁部片	口 29.4 底 - 高 7.6	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	横し焼成。断面中央部黒灰色。	江戸時代か
215-60 PL59	焼締陶器 甕	D区表土	破片	口 - 底 - 高 -	① ② ③5YR5/2灰褐	体部片。中世か。	常番
215-61 PL59	軟質陶器 内耳罎	E区旧水路	口縁部片	口 (40.2) 底 (30.6) 高 10.8	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	横し焼成。	時期不詳
216-62 PL59	軟質陶器 内耳罎	E区旧水路	1/6	口 (42.2) 底 (38.1) 高 5.9	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	横し焼成。体部外面下端直削り。	江戸時代
216-63 PL59	軟質陶器 内耳罎	E区旧水路	底部1/4	口 (33.2) 底 (7.4) 高 -	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	成形・調整ともに焙烙と同じであるが、器壁厚く盤状の鉢であろう。	江戸時代?
216-64 PL59	軟質陶器 内耳罎	E区旧水路	1/4	口 (43.2) 底 (38.2) 高 6.2	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	横し焼成。体部外面下端直削り。	江戸時代
216-65 PL59	軟質陶器 火鉢	E区旧水路	底部1/2	口 - 底 (13.2) 高 (6.4)	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	横し焼成。外面回転軸文具による筋文。脚二箇所残存。	江戸時代?
216-66 PL59	軟質陶器 火鉢	E区旧水路	底部片	口 - 底 - 高 -	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	底部片。脚一カ所残存。酸化焼成。	江戸時代?
216-67 PL59	軟質陶器 提ね鉢	E区旧水路	口縁部片	口 (27.4) 底 - 高 (11.2)	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	口縁部内面内側に張り出す。体部外面叩き状の筋文。	時期不詳
216-68 PL59	軟質陶器 提ね鉢	E区旧水路	口縁部片	口 (33.6) 底 - 高 (7.6)	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	体部外面下率直削り。	堺・明石
216-69 PL59	軟質陶器 提ね鉢	E区旧水路	口〜胴部 1/4	口 - 底 (14.9) 高 (7.8)	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	体部外面直削り。底部内面使用により摩滅する。	堺・明石
216-70 PL59	軟質陶器 提ね鉢	E区旧水路	破片	口 (15.9) 底 - 高 (9.0)	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	体部外面下端直削り。内面すり目。	丹波?
216-71 PL59	軒先瓦	E区旧水路	破片	口 - 底 - 高 -	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	十能瓦の軒先。	近現代
216-72 PL59	瓦	E区旧水路	破片	口 - 底 - 高 -	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	十能瓦片。	近現代
216-73 PL60	瓦	E区旧水路	破片	口 - 底 - 高 -	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	十能瓦。	近現代
216-74 PL60	土器 内 耳焙烙?	E区旧水路	破片	口 - 底 - 高 (5.4)	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	口縁部外方に張り出す。体部外面中位接合痕明顯。	江戸時代
216-75 PL60	土器 内 耳焙烙?	E区旧水路	底部片	口 - 底 - 高 -	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	焙烙の底部片であろう。内面に菊花状押印。	江戸時代
216-76 PL60	土器 鉢	E区旧水路	口〜胴部 片	口 - 底 - 高 (7.9)	① ② ③7.5YR5/1褐灰	器表摩滅。酸化焼成。	時期不詳
216-77 PL60	陶器 提ね鉢	E区旧水路	1/5	口 (10.6) 底 (5.6) 高 -	① ② ③5YR5/2灰褐	三島手。高台外面以下無輪。	肥前
216-78 PL60	焼締陶器 甕?	F区旧水路	破片	口 - 底 - 高 -	① ② ③5YR5/2灰褐	内面に自然輪が認められ、体部下位と思われる。中世か。	常番
217-79 PL60	瓦	F区旧水路	破片	口 - 底 - 高 -	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	胎土・焼成から十能瓦であろう。一端に接合部のような痕跡があり、轉脚に使用する瓦と考えられる。	近現代
217-80 PL60	軒先瓦	F区旧水路	破片	口 - 底 - 高 -	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	十能瓦の軒先。	近現代
217-81 PL60	焼締陶器 甕?	I-1区	底部片	口 - 底 - 高 -	① ② ③5YR5/2灰褐	体部片。器壁厚く中世後半か。	常番
217-82 PL60	焼締陶器 甕?	I-1区	底部片	口 - 底 - 高 -	① ② ③5YR5/2灰褐	体部片。江戸以降か。	常番
標頭番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値 (cm, g)	①粘土 ②焼成 ③厚さ ④重さ	成・整形技法の特徴	備考
217-83 PL60	土製品 泥団子	A区表土	完形	①1.4②1.5③0.6④1.0		片面の型に粘土を押し付けて成形する。	

遺物観察表

標記番号 図版番号	種類 器種	出土位置 部 位 残 存	石材	計測値(cm.g)	成・整形技法の特徴	備考	
217-84 PL60	石製品 砥石	J T-25	4/5	砥沢石	長さ 7.7 幅 2.8 厚さ 2.1 重量 70.0	図前小口が突る刃付。使用は4面。奥小口は旧時欠損。右側部に磨目タガネ痕あり。19世紀中～後半頃。手持砥。中砥級。	
217-85 PL60	石製品 板碑片	B区旧水路		緑色片岩	長さ 7.2 幅 6.8 厚さ 0.9 重量 90.0	表面に文字あり。石製板碑片を再加工し、内彫形を成す。右側部に小欠あり。	
217-86 PL60	石製品 磨き石・ 白石	C区旧水路	半欠か	石夷閃緑岩	長さ 15.9 幅 14.0 厚さ 10.6 重量 3270	自然内稜。用原石。下方は旧時欠損。左側部は風化摩耗。面はタンブリック以上の摩耗面となり、その主体は赤金風で平面に押し左がひずり。	
217-87 PL60	石製品 砥石	D区旧水路	半欠か	砥沢石	長さ 7.8 幅 2.9 厚さ 2.7 重量 96.0	貫は流紋岩。中砥級。使用は表・裏・両側部の4面。小口に削り目あり。磨削面に右利彫あり。手持ち砥。欠損は旧時。	
217-88 PL60	石製品 砥石	E区旧水路	1/3	砥沢石	長さ 4.8 幅 3.9 厚さ 2.5 重量 70.0	流紋岩。中砥級。手持ち砥。使用は奥小口の旧欠部を除く4面。左側部は使用浅い。	
217-89 PL60	石製品 砥石	E区旧水路	半欠か	砥沢石	長さ 4.8 幅 4.4 厚さ 2.6 重量 71.0	流紋岩。中砥級。手持ち砥。使用は表・裏・両側部の4面。左側部は厚肉残欠、磨目彫跡あり。欠損は旧時。磨目タガネ跡から18C後～19C前。	
標記番号 図版番号	種類 器種	出土位置 部 位 残 存		計測値(cm.g)	成・整形技法の特徴	備考	
217-90 PL60	鉄製品 釧刀	J N-24	ほぼ完形	長さ(14.9) 幅 2.9 厚さ 0.8 孔径 0.5 重量 70.3	平造。庵棟。表・裏の先側に擦落し。茎穴1。先・茎尻旧時欠損。刃側の凹みも旧状。梗区より1.5cm区間茎棟に段。区戻り。	目釘穴位置・区送り位置より古方。	
標記番号 図版番号	種類	出土位置	銭貨名	国名	計測値(cm.g)	書体・鋳年等	備考
218-91 PL60	銅銭	J K-25	一銭	日本	外輪径2.3 厚さ 0.1 重量 3.6	大正5年	完形
218-92 PL60	銅銭の塊	7号トレンチ	寛永通寶	日本	長さ 2.9 幅 2.9 厚さ 1.4 重量 36.2	銅銭(寛永通寶)3枚が層着している。	完形
218-92-1 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.5 重量 3.8	古寛永・1636年。裏面に布付着。	完形
218-92-2 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 3.3	新寛永・背面文・1669年。	完形
218-92-3 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 3.4	新寛永・背面文・1669年。	完形
218-92-4 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.6 内輪径0.6 重量 4.2	新寛永・背面文・1669年。	完形
218-92-5 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.5 重量 4.0	古寛永・1636年。	完形
218-92-6 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 3.2	古寛永・1636年。一部欠損。	ほぼ完形
218-92-7 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.6 内輪径0.6 重量 3.9	新寛永・1697年。	完形
218-92-8 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.6 内輪径0.6 重量 3.1	新寛永・背面文・1669年。	完形
218-92-9 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.6 内輪径0.6 重量 3.5	新寛永・背面文・1669年。	完形
218-92-10 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 3.5	古寛永・1636年。	完形
218-92-11 PL60	銅銭	7号トレンチ	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 3.8	新寛永・背面文・1669年。背面の「文」は布付着により不鮮明。	完形
218-93 PL60	銅銭	A-1区一括	寛永通寶	日本	外輪径2.3 内輪径0.7 重量 2.4	新寛永・1697年。	完形
218-94 PL60	銅銭	A-1区表採	元豊通寶	北宋	外輪径2.4 内輪径0.7 重量 2.6	北宋・1078年。行書。	完形
218-95 PL60	銅銭	A-1区表採	元豊通寶	北宋	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 3.4	北宋・1078年。行書。	完形
218-96 PL60	銅銭	A-1区表採	皇宋通寶	北宋	外輪径2.4 内輪径0.7 重量 2.7	北宋・1038年。真書。	完形
218-97 PL60	銅銭	A-1区表採	開元通寶	唐	外輪径2.4 内輪径0.7 重量 2.7	唐・845年。真書。	完形
218-98 PL60	銅銭	A-1区表採	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 3.8	新寛永・1697年。裏面布付着。一部欠損。	ほぼ完形
218-99 PL60	銅銭	A-2区表採	寛永通寶	日本	外輪径2.3 内輪径0.6 重量 2.3	新寛永・1697年。	完形
218-100 PL60	銅銭	A-3区表採	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 4.2	古寛永・1636年。	完形
218-101 PL60	銅銭	A-4区表採	寛永通寶	日本	外輪径2.5 内輪径0.6 重量 3.5	古寛永・1636年。表面に布付着。	完形
218-102 PL60	銅銭	A-5区表採	寛永通寶	日本	外輪径2.4 内輪径0.5 重量 3.7	古寛永・1636年。表面に布付着。	完形

遺物觀察表

八反田遺跡

遺物観察表

1号井戸遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
220-1 PL69	カワラケ	覆土	3/4	口 8.8 底 7.6 高 1.5	①細砂粒 ②酸化鉄 ③にぶい橙7.5YR8/4	底面外面へ丸削り。口縁部内外面横撫で。轆轤を使用していない。	
220-2 PL69	銅鏡 開元通寶	覆土上面	完形	計測値外輪径2.5cm、内輪径0.7cm。		重さ2.31g。国名唐。初跡年845年	
押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm.g)	成・整形技法の特徴	備考
PL70-3	石製品 五輪塔か	覆土	ほぼ完形	二ツ岳軽石	長さ 21.0 幅 16.0 厚さ 8.9 重量 2350	五輪塔水輪?の未製品か。表面・側面に金属製の整頓が多数残る。側面を丸く整形している。	
PL70-4	石製品 五輪塔か	覆土	3/4	二ツ岳軽石	長さ 21.1 幅 19.2 厚さ 11.8 重量 3030	五輪塔水輪?の未製品か。上面と左側面を厚さ 11.8 重量 3030	
PL70-5	石製品 五輪塔か	覆土	ほぼ完形	二ツ岳軽石	長さ 22.6 幅 18.0 厚さ 11.8 重量 3680	五輪塔地輪?の未製品か。4側面を平らに加工している。表面に金属製の整頓が多数残る。	

2号土坑遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm.g)	成・整形技法の特徴	備考
223-1 PL69	石製品 磁石	覆土	ほぼ完形	デイスait	長さ 11.7 幅 6.4 厚さ 2.6 重量 250	デイスaitでも目立つ。平や凹い仕上肌。左平面の上方から左上にかけ、用原石面あり。使用は両小口を除く4面。その4面に多くの刃ならし様の傷あり。使用解は手持ち砥で石削。	

2号溝遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
226-1 PL69	炊煮陶器 焙烙	2溝覆土 5溝覆土	口～体部片	口 (35.0) 底 (31.6) 高 5.1	① ② ③黒褐色2.5Y3/2	内面から口縁部外面横撫で。	江戸時代

6号溝遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
229-1 PL69	須磨器 坏	覆土	口～底部 1/2	口 (10.0) 底 5.4 高 2.5	①細砂粒 ②酸化鉄 ③にぶい橙7.5YR6/4	轆轤整形。底部右回転赤切り。口縁部内外面横撫で。	

13号溝遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
232-1 PL69	焼締陶器 甕	覆土	胴～胴部片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒。緻密 ②還元焼 ③灰オリーブ5Y5/2	泥美焼き。轆轤整形。外面自然釉。外面平行叩き目。内面横撫で。	11世紀
232-2 PL69	磁器 青磁碗	覆土	口縁部片	口 (18.0) 底 - 高 (5.0)	①緻密 ②還元焼 ③灰オリーブ5GY6/1	外面に扇形葉文を施し、内外面に淡青色の発色の良い青磁釉を施す。割れ口シャープ。使用痕跡ほとんど見えず。重宝室。	13世紀

15号溝遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm.g)	成・整形技法の特徴	備考
233-1 PL69	石製品 磁石	溝底部	完形	角四石 デイスait	長さ 17.7 幅 2.2 厚さ 2.3 重量 170	施設岩。近仕上中肌。使用は表面と両側部と奥小口の5面。右側部と奥小口の使用は浅い。右側部と奥小口に整形タガネ目あり。使用は右利。石材中に黒色物質多くれ以前か。	18C後半以降の規格外のため、それ以前か。

16号溝遺物観察表

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値 (cm.g)	国名、初跡年	備考
233-1 PL69	銅鏡 寛永通寶	溝底部	完形	外輪径2.4cm、内輪径0.6cm、重さ2.37g。	国名日本。初跡年1636年	

20号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	石材	計測値(cm, g)	成・整形技法の特徴	備考
235-1 PL69	石製品 磨石	覆土	ほぼ完形	砂岩	長さ 12.9 幅 4.4 厚さ 2.5 重量 230	帯石か、右側部に突き込み傷と自然を思わせる小凹み多数あり。それを除く面全体に真以上のツヤ光沢がある。非金属による摩耗。	18C後半以降の規格外のため、それ以前か。
235-2 PL69	石製品 砥石	覆土	1/2	砥沢石	長さ(7.9) 幅 2.9 厚さ 2.6 重量 110	砥紋直。中砥粒。使用は表・裏・両側部の4面。欠損は旧時。使用跡は手持ち砥で右母。砥沢砥。	
235-3 PL69	石製品 砥石	覆土	2/3	砥沢石	長さ(8.6) 幅 3.3 厚さ 3.1 重量 180	砥紋直。中砥粒。使用は表・裏・両側部の4面。要小口に作り跡あり。部分的に残り方ならし様の傷あり。欠損は旧時。使用跡少なく、手持ち砥。	

26号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
242-1 PL69	土師器 杯	覆土	口～底部片 1/4	口 (12.0) 底 (6.0) 高 2.8	①細砂粒 ②酸化釉 ③にょい黄褐10YR5/3	底部へう削り。口縁部内外面横撫で。内面横方向の撫で。	
242-2 PL69	土師器 杯	覆土	口縁部片	口 (11.0) 底 - 高 (2.4)	①細砂粒 ②酸化釉 ③橙5YR6/6	外面へう削り。口縁部内外面横撫で。	
242-3 PL69	土師器 高杯	覆土	口縁部片	口 (16.0) 底 - 高 -	①細砂粒 ②酸化釉 ③橙5YR6/6	口縁部内外面横撫で。	外面荒れ
242-4 PL69	土師器 埴	覆土	口縁部片	口 (10.0) 底 - 高 -	①粗砂粒 ②酸化釉 ③暗灰黄2.5Y5/2	口縁部内外面横撫で。	内外面荒れ
242-5 PL69	土師器 台付甕	覆土	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 -	①細砂粒、褐色賦物 ②酸化釉 ③にょい橙7.5YR6/4	やや外反するS字状口縁。頸部短毛目。口縁部内外面横撫で。	内外面荒れ
242-6 PL69	土師器 甕	覆土	口縁部片	口 (15.0) 底 - 高 -	①細砂粒 ②酸化釉 ③橙7.5YR6/6	口縁部内外面横撫で。	
242-7 PL69	石製品 勾玉	覆土	完形	蛇紋岩	長さ 3.0 幅 1.1 厚さ 0.7 重量 4.41	両面に斜位の研磨痕。光沢あり。孔径0.2	

29号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
240-1 PL69	土師器 杯	覆土	口～底部片 1/2	口 (10.6) 底 5.1 高 3.1	①細砂粒 ②酸化釉 ③にょい黄褐10YR5/3	底部へう削り。口縁部内外面横撫で。内面横方向の撫で。	

35号溝遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
244-1 PL69	土師器 杯	覆土	口～底部片 1/3	口 (11.0) 底 - 高 (3.1)	①細砂粒、小礫 ②酸化釉 ③橙5YR6/6	底部へう削り。口縁部内外面横撫で。内面横方向の撫で。	
244-2 PL69	土師器 杯	覆土	口縁部片	口 (11.0) 底 (3.1) 高 (3.1)	①細砂粒、褐色粒 ②酸化釉 ③にょい黄褐10YR8/3	体部に細やかな稜を持ち、口唇部は外反する。口縁部内外面横撫で。	内面荒れ
244-3 PL69	土師器 杯	覆土	口縁部片	口 (13.0) 底 (3.1) 高 (3.1)	①細砂粒 ②酸化釉 ③にょい橙7.5YR5/4	外面へう削り後横撫で。内面横撫で。口縁部内外面横撫で。	
244-4 PL69	須恵器 甕	覆土	胴部片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒 ②還元釉 ③灰N4/0	縦輪整形。外面平行叩き目。内面同心円状のアテ具痕あり。	5、6と同一個体か。
244-5 PL69	須恵器 甕	覆土	胴部片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒 ②還元釉 ③灰N5/0	縦輪整形。外面平行叩き目(やや薄減)。内面同心円状のアテ具痕あり。	4、6と同一個体か。
244-6 PL69	須恵器 甕	覆土	胴部片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒 ②還元釉 ③灰N4/0	縦輪整形。外面平行叩き目。内面同心円状のアテ具痕あり。	4、5と同一個体か。

遺物観察表

41号溝遺物観察表

採掘番号 図数番号	種類 器種	出土位置 グリッド	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
244-1 PL69	土師器 環	覆土	口～底部片 2/3	口 (11.6) 底 5.3 高 3.3	①細砂粒、小礫 ②酸化焼 ③濃5YR6/6	底部へうすり。口縁部内外面横撫で。内面 横方向の撫で。	
244-2 PL69	土師器 環	覆土	口～体部片 1/3	口 (12.0) 底 - 高 -	①細砂粒 ②酸化焼 ③明褐色2.5YR5/6	外面体部へうすり。内面体部へうすり。口 縁部内外面横撫で。	外面荒れ

遺構外遺物観察表

採掘番号 図数番号	種類 器種	出土位置 グリッド	部位 残存	計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
248-1 PL69	土師器 環	660-380	口縁部片	口 (19.0) 底 - 高 -	①細砂粒 ②酸化焼 ③にぶい濃7.5YR5/4	口縁部内外面横撫で。内面横方向の撫で。	
248-2 PL69	土師器 高環	640-330	胴部片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒、黒色鉱物 ②酸化焼 ③にぶい濃2.5YR4/6	外面へうすり。内面へうすり。	内外面荒れ
248-3 PL69	土師器 環	650-360	口～胴部片	口 (13.6) 底 - 高 -	①細砂粒 ②酸化焼 ③にぶい濃7.5YR6/4	外面胴部刷毛目。口縁部内外面横撫で。	内外面荒れ
248-4 PL69	須恵器 皿	640-340	胴部片	口 (10.0) 底 5.4 高 2.5	①細砂粒、緻密 ②酸化焼 ③灰N5/0	縦楕圆形。外面カキ目。胴部上位に自然釉 かかる。内面丁寧な横撫で。	5世紀中葉
248-5 PL69	埴輪陶器 振り鉢	640-340	底部片	口 - 底 (13.8) 高 -	① ②③にぶい黄褐色 10YR6/3	埴輪陶器。逆三角形の高台貼り付け。体部 下位外面回転削り。内面使用により厚紙。	1.2～1.3世 紀
248-6 PL69	灰質陶器 火鉢	660-320	底部片	口 - 底 (22.0) 高 -	① ② ③黒褐色2.5Y3/1	楕円焼成。天井部から口縁部外面回転削り により彫文。	江戸から近 代

報告書抄録

書名ふりがな	たかはやしみにゅういせき、はったんだいせき
書名	高林三八遺跡、八反田遺跡
副書名	東毛幹線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	なし
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	357
編著者名	今井和久
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20050731
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2

遺跡名ふりがな	たかはやしみにゅういせき
遺跡名	高林三八遺跡
所在地ふりがな	おおたしたかはやしきたまち、いわせがわまち、ふくざわまち
遺跡所在地	太田市高林北町、岩瀬川町、福沢町
市町村コード	10205
遺跡番号	651
北緯(日本測地系)	361600
東経(日本測地系)	1392149
北緯(世界測地系)	361611
東経(世界測地系)	1392138
調査期間	19990401-20000331,20031101-20040214, 20040401-20040930
調査面積	25373
調査原因	道路建設工事
種別	包蔵地/集落/墓/田畑/その他
主な時代	旧石器/縄文/古墳/奈良・平安/中近世
遺跡概要	包蔵地—石器ブロッカー接合資料+ナイフ形石器/集落—古墳—竪穴住居+掘立柱建物—土器+須恵器+手捏ね土器+石製模造品/墓—古墳—方形周溝墓—古式土師器/集落—奈良・平安—竪穴住居+溝+土坑—土師器+須恵器/中近世—水田+溝+井戸+土坑—焼締陶器+軟質陶器+陶磁器+カワラケ+人骨+馬骨+古銭+鉄製品
特記事項	古墳時代前～中期の集落と出土土器(土師器手埴り形土器、初期須恵器把手付埴)

遺跡名ふりがな	はったんだいせき
遺跡名	八反田遺跡
所在地ふりがな	おおたししもはまだまち
遺跡所在地	太田市下浜田町
市町村コード	10205
遺跡番号	885
北緯(日本測地系)	361559
東経(日本測地系)	1392224
北緯(世界測地系)	361610
東経(世界測地系)	1392212
調査期間	20020717-20021130,20040401-20040930
調査面積	7054
調査原因	道路建設工事
種別	集落/田畑/その他
主な時代	古墳/奈良・平安/中近世
遺跡概要	集落—古墳—溝—土師器+須恵器+石製模造品/集落—奈良・平安—溝+土坑—土師器+須恵器/中近世—溝+井戸—軟質陶器+陶磁器+カワラケ+古銭+鉄製品
特記事項	特になし

写 真 图 版

高林三入遺跡



高林三入・八反田遺跡全景 (西上空から)



高林三入・八反田遺跡全景 (南上空から)



A区全景 (南上空から)



A-1①区全景 (南から)



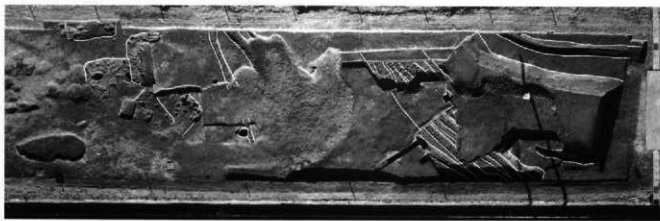
A-2区全景 (南上空から)



A-1②区全景 (西から)



A-3区全景 (西上空から)



B-1区全景 (南上空から)



B-2区全景 (南上空から)



B-3区全景 (西から)



B-4区全景 (西から)



C-1区全景 (東から)



C-2区全景 (東から)



C-3区全景 (東から)



C-3区東側 (南上空から)



C-4区全景 (東から)



D-1区全景 (東から)



D-3区全景 (東から)



D-4区全景 (東から)



E-1区全景 (西から)



E-2区全景 (西から)



E-3・4区全景 (西から)



F-3区全景 (東から)



F-4区全景 (西から)



A-1 ①区Bトレンチ全景 (南から)



A-1 ①区石器出土状況 (北から)



A-2 ①区Hトレンチ全景 (南から)



A-2 ①区石器出土状況 (南から)



A-1 ②区Hトレンチ全景 (西から)



A-1㊟区Ⅵ層石器出土状況 (南から)



A-1㊟区Ⅵ層礫群出土状況 (南から)



A-1㊟区Ⅶ層石器出土状況 (南から)



A-1㊟区Ⅶ層石器出土状況 (西から)



B-4区Aトレンチ全景 (西から)



B-4区1号ブロック石器出土状況（西から）



B-4区ナイフ形石器出土状況



B-4区石核出土状況（西から）



B-4区Aトレンチセクション（南から）



C-4区Bトレンチ全景（北から）



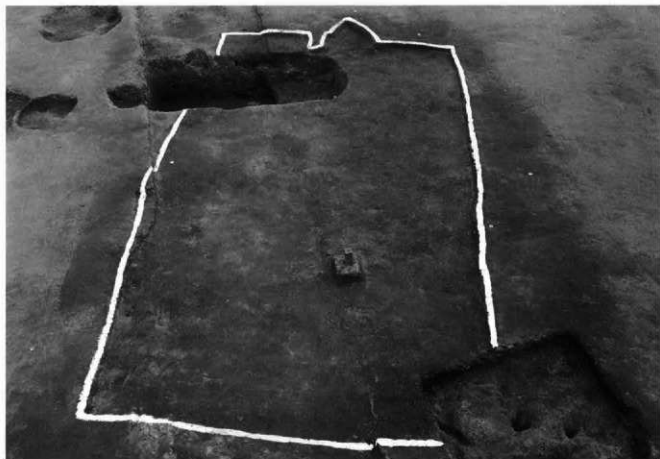
C-4区石器（石刃）出土状況（北から）



D-3区Aトレンチ全景（東から）



D-3区石器出土状況（東から）



A区1号住居全景 (西から)



A区1号住居断面セクション (北から)



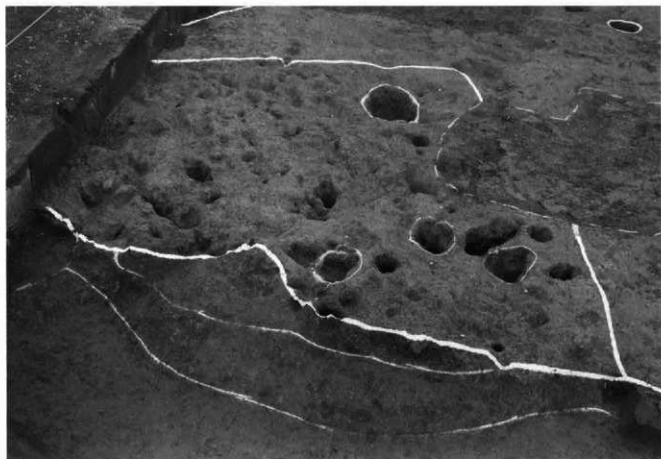
A区1号住居遺物出土状況 (西から)



A区2号住居全景 (西上空から)



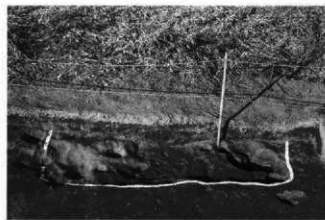
A区2号住居断面セクション (西から)



A区3号住居掘り方全景（西から）



B区1号住居掘り方全景（南から）



B区2号住居掘り方全景 (南から)



B区2号住居遺物出土状況 (南から)



B区3号住居掘り方全景 (西から)



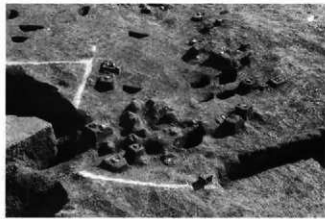
B区3号住居貯蔵穴遺物出土状況 (南から)



B区4号住居掘り方全景 (西から)



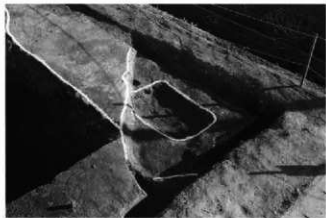
B区4号住居遺物出土状況 (南から)



B区5号住居遺物出土状況 (北から)



B区6号住居掘り方全景 (北から)



B区7号住居全景（北西から）



B区7号住居掘り方全景（北西から）



B区7号住居炉遺物出土状況（北から）



B区10号住居炉全景（東から）



B区10号住居掘り方全景（北から）



B区10号住居貯蔵穴上層遺物出土状況（南から）



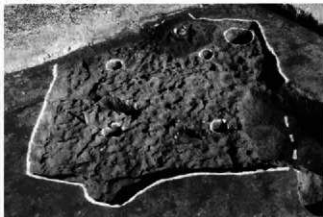
B区10号住居貯蔵穴下層遺物出土状況（南から）



B区11号住居遺物出土状況全景（東から）



B区11号住居全景（南から）



B区11号住居掘り方全景（南から）



B区11号住居南竈セクション (東から)



B区11号住居北竈全景 (南から)



B区12号住居掘り方全景 (西から)



B区12号住居貯蔵穴遺物出土状況 (東から)



B区13号住居掘り方全景 (南から)



B区13号住居P3セクション (北から)



B区14号住居掘り方全景 (西から)



B区14号住居炉検出状況 (東から)



C区1号住居全景 (南東から)



C区1号住居掘り方全景 (南東から)



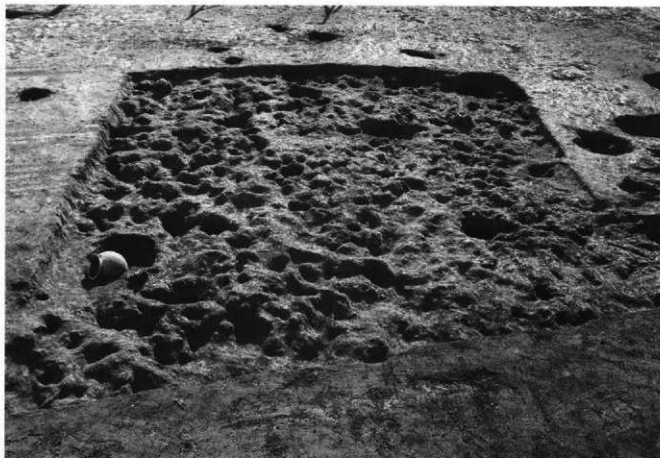
C区1号住居が全景 (北から)



C区2号住居全景 (南から)



C区2号住居貯蔵穴セクション (西から)



C区3号住居掘り方全景（北から）



C区3号住居貯蔵穴セクション（南から）



C区3号住居貯蔵穴遺物出土状況（北から）



C区4号住居炉全景（北から）



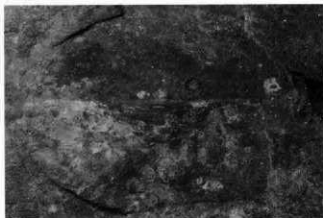
C区4号住居貯蔵穴全景（南から）



C区4号住居掘り方全景 (東から)



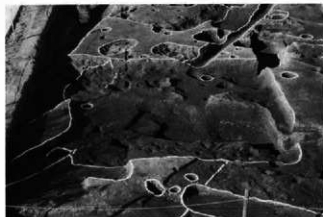
C区5号住居掘り方全景 (北から)



C区5号住居がセクション (南から)



C区6号住居調査風景 (北から)



C区6号住居掘り方全景 (東から)



C区6号住居全景 (北から)



C区7号住居遺物出土状況全景 (西から)



C区7号住居把手付壺出土状況（東から）



C区7号住居把手付壺出土状況（北から）



C区7号住居掘り方全景（東から）



C区7号住居貯蔵穴遺物出土状況（西から）



C区7号住居遺物出土状況（北から）



C区8号住居全景 (西から)



C区8号住居炉全景 (南から)



C区8号住居掘り方全景 (西から)



C区9号住居全景 (東から)



C区9号住居焼土塊セクション (南から)



B区1号壑穴状遺構全景（西から）



B区2号壑穴状遺構全景（北から）



A区1号方形周溝墓全景（南東から）



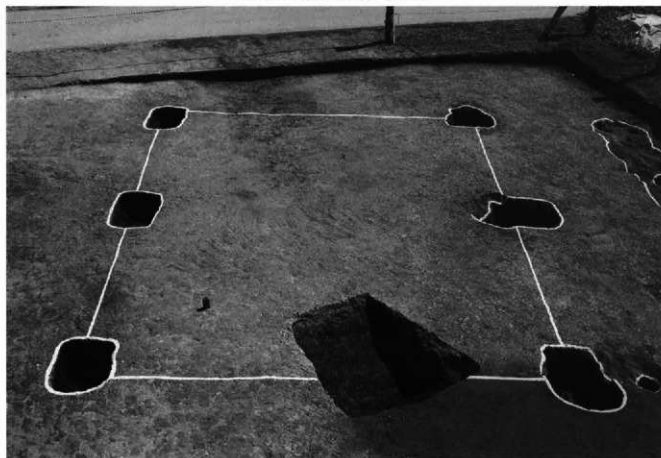
A区東周溝遺物出土状況（南から）



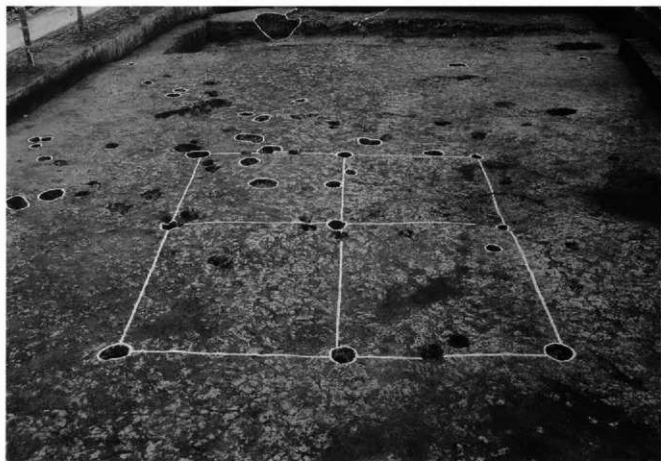
A区東周溝内壺出土状況（南から）



B区1号掘立柱建物全景（東から）



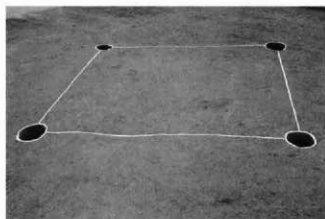
B区2号掘立柱建物全景（西から）



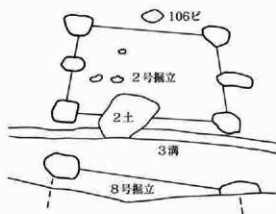
B区4号掘立柱建物全景（西から）



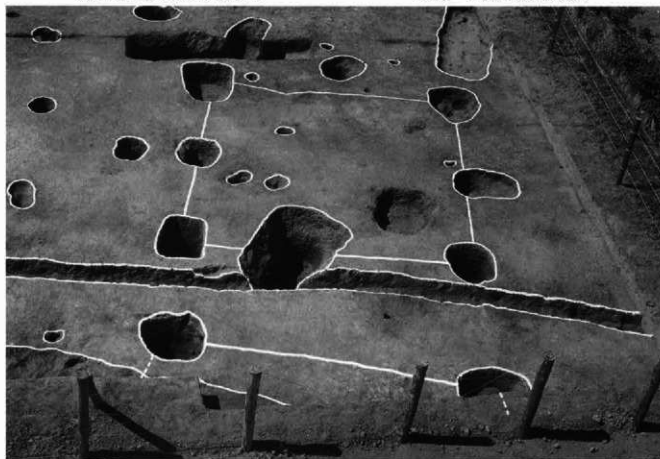
B区5号掘立柱建物全景（西から）



C区1号掘立柱建物全景 (南から)



C区2・8号掘立柱建物概念図



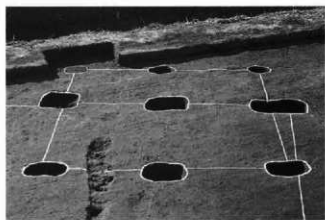
C区2・8号掘立柱建物全景 (南から)



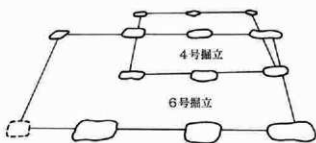
C区2号掘P5セクション (南から)



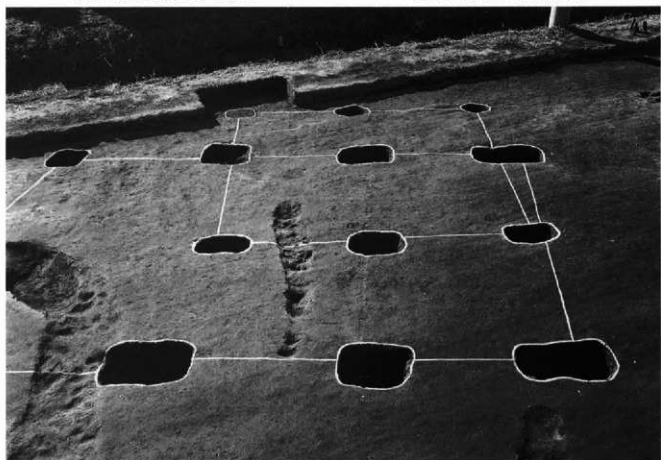
C区2号掘P5全景 (南から)



C区6号掘立柱建物全景 (北から)



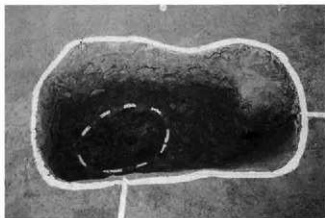
C区4・6号掘立柱建物概念図



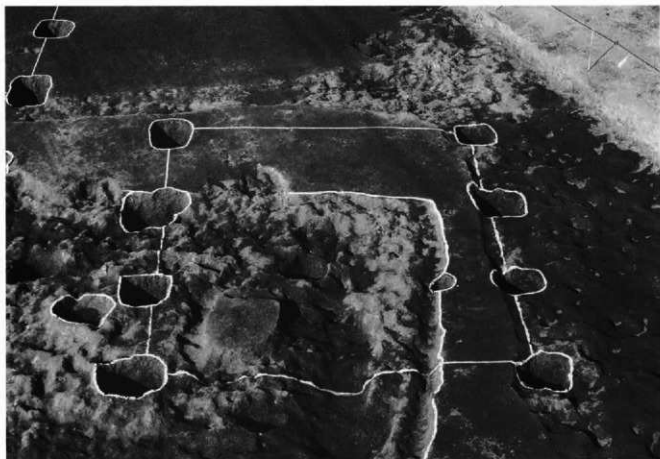
C区4・6号掘立柱建物全景 (北から)



C区4号掘P1セクション (南から)



C区4号掘P1全景 (南から)



C区5号掘立柱建物全景 (東から)



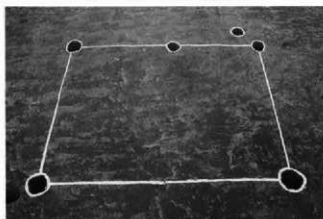
C区5号掘P1全景 (南から)



C区5号掘P2全景 (南から)



C区7号掘立柱建物全景 (東から)



F区1号掘立柱建物全景 (南から)



A区1号井戸セクション (北から)



B区1号井戸・10号土坑全景 (西から)



B区2号井戸全景 (南東から)



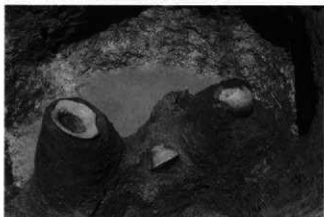
B区2号井戸遺物出土状況 (南から)



C区1号井戸全景 (南から)



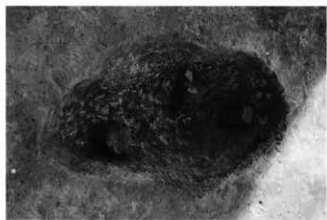
F区1号井戸セクション (南から)



A区1号土坑遺物出土状況 (南から)



A区3号土坑全景 (南から)



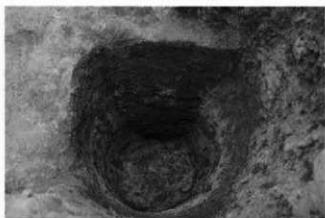
A区27号土坑全景 (東から)



A区31・32号土坑全景 (北から)



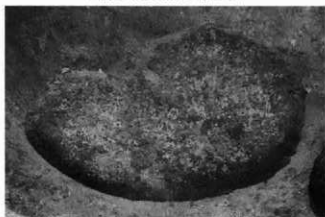
A区37号土坑全景 (西から)



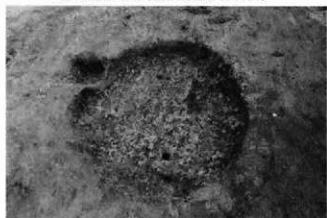
A区53号土坑全景 (東から)



A区56号土坑遺物出土状況 (北から)



A区60・61号土坑全景 (北東から)



A区62号土坑遺物出土状況 (北から)



A区65号土坑セクション (南から)



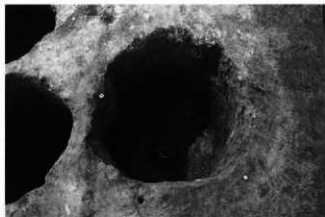
A区66号土坑セクション (西から)



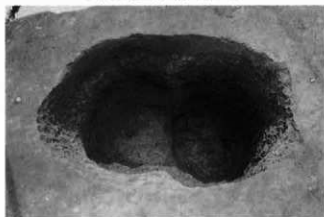
A区67・68号土坑全景 (北から)



A区69号土坑全景 (南から)



A区71号土坑全景 (北から)



A区73・74号土坑全景 (西から)



A区75号土坑セクション (東から)



A区76号土坑全景 (南から)



A区77号土坑全景 (南から)



A区78号土坑馬骨出土状況 (南から)



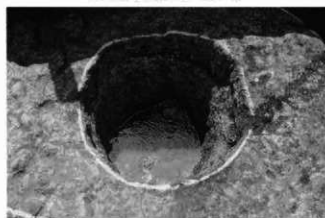
A区79号土坑全景 (西から)



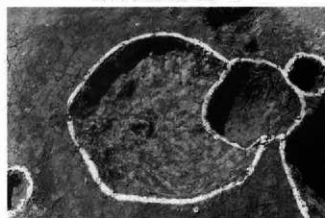
A区80号土坑全景 (南から)



B区2号土坑全景 (南から)



B区6号土坑全景 (北から)



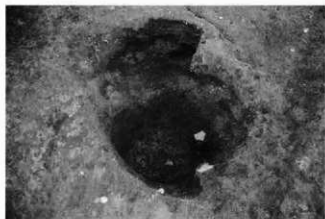
B区14号土坑全景 (東から)



B区20号土坑遺物出土状況 (西から)



B区30号土坑セクション (南から)



B区32号土坑全景 (南から)



B区34号土坑遺物出土状況 (南から)



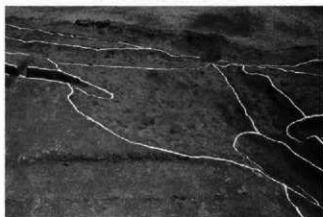
B区39号土坑遺物出土状況 (北から)



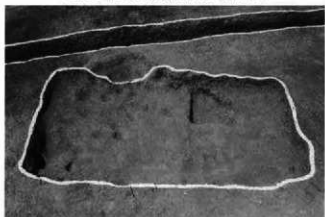
B区40号土坑全景 (北から)



C区2号土坑遺物出土状況 (西から)



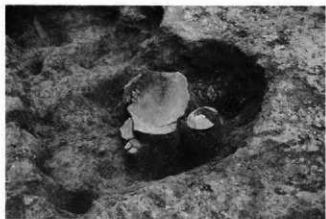
C区3号土坑全景 (南から)



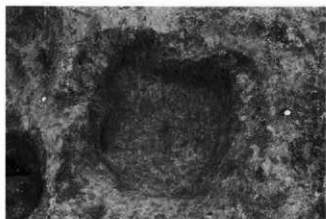
C区6号土坑全景 (南から)



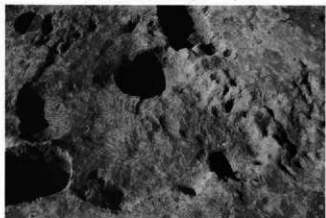
C区10号土坑全景 (南から)



C区11号土坑遺物出土状況 (南から)



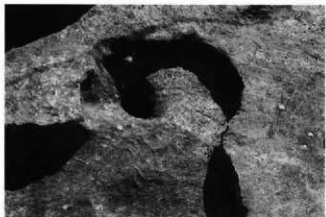
C区12号土坑全景 (東から)



C区14・15号土坑全景 (東から)



C区18号土坑セクション (東から)



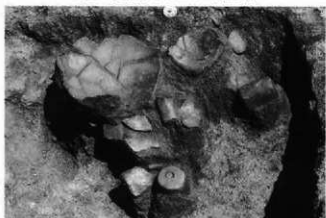
C区22号土坑全景 (西から)



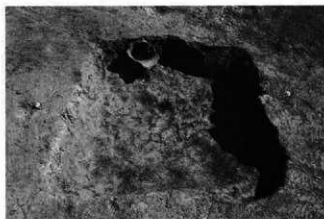
D区4号土坑セクション (東から)



D区5号土坑全景 (南から)



D区10号土坑遺物出土状況 (東から)



E区1号土坑遺物出土状況(西から)



A区3号ピット全景(南から)



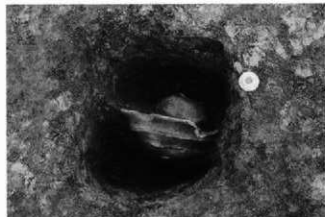
C区29号ピット遺物出土状況(東から)



C区34号ピット遺物出土状況(北から)



D区6号ピットセクション(東から)



D区12号ピット遺物出土状況(南から)



D区22号ピット遺物出土状況(南から)



F区5号ピット遺物出土状況(南から)



A区1A～E号溝全景（北から）



A区2号溝全景（北から）



A区5号溝全景（西から）



A-3区溝群（4号溝等）全景（東から）



A区23・25・26号溝全景（南上空から）



A区14号溝全景（北東から）



A区15号溝全景（南東から）



A区19号溝全景（北西から）



A区20号溝全景（北から）



B区2・10号溝全景 (南東から)



B区3～8号溝全景 (北西から)



B区11号溝全景 (西から)



B区15号溝全景 (南から)



B区14A～E号溝全景 (南西から)



B区19号溝全景 (東から)



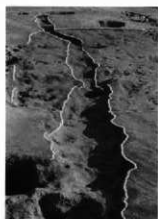
B区24号溝全景 (南から)



B区21号溝全景 (北西から)



C-4区1・2号溝全景 (南から)



C区7号溝全景 (北西から)



C区3～6号溝全景 (東から)



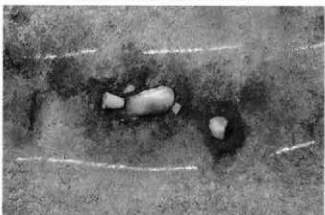
C区8号溝全景 (北西から)



C区9号溝全景 (南東から)



D区1・2号溝全景 (北西から)



D区1号溝遺物出土状況 (北から)



D区4・5号溝全景 (東から)



D区6号溝全景 (西から)



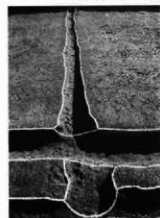
D区8号溝全景 (西から)



D区13号溝全景 (西から)



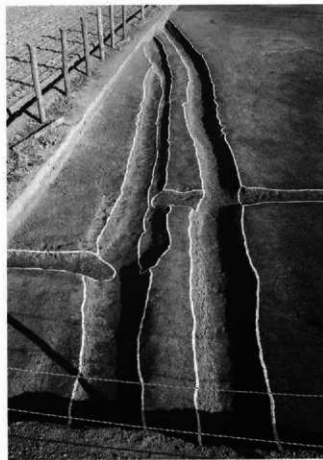
E区1～3・15号溝全景 (南から)



E-1区7号溝全景 (北から)



E-3区7号溝全景 (南から)



E区4～6号溝全景 (西から)



E区11～14号溝全景 (東から)



E区8～10号溝全景 (南東から)



F区1号溝全景 (南から)



F区2A・B号溝全景 (南から)



F区3・4号溝全景 (北東から)



G区トレンチ全景 (東から)



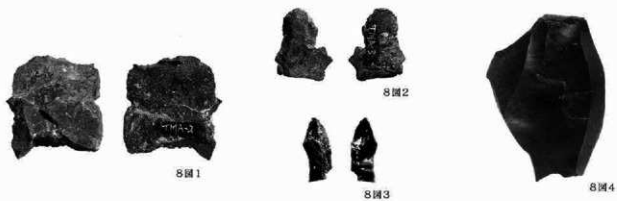
H区トレンチ調査状況 (東から)



I区南側トレンチ全景 (東から)



I区北側トレンチ全景 (東から)

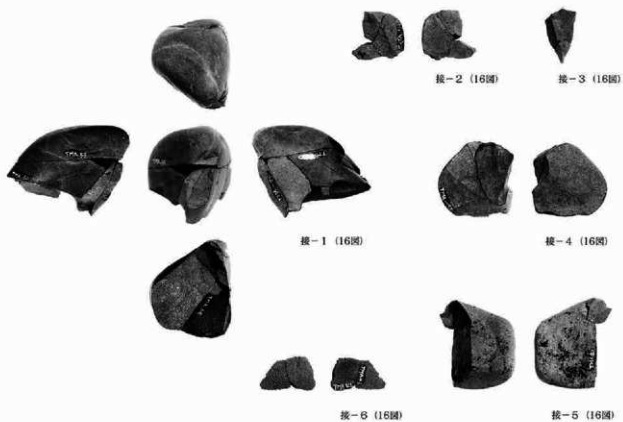


A-1㊸区出土石器

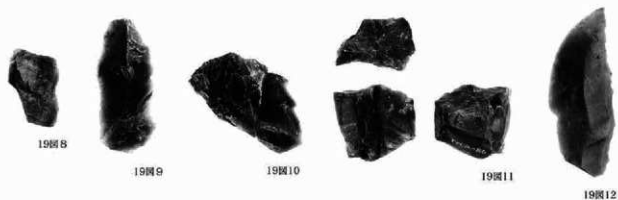
A-2区出土石器



A-1㊸区出土石器



A-1 ②区接合資料



B-4 区出土石器

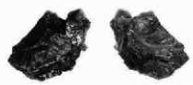


接-1 (20图)

接-2 (20图)



接-5 (21图)



接-3 (22图)



接-4 (21图)



接-6 (21图)



接-7 (21图)



接-8 (22图)



接-9 (21图)



接-10 (21图)



接-11 (22图)



接-12 (20图)



接-13 (22图)

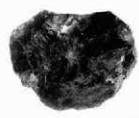
B-4区接合資料



1



1



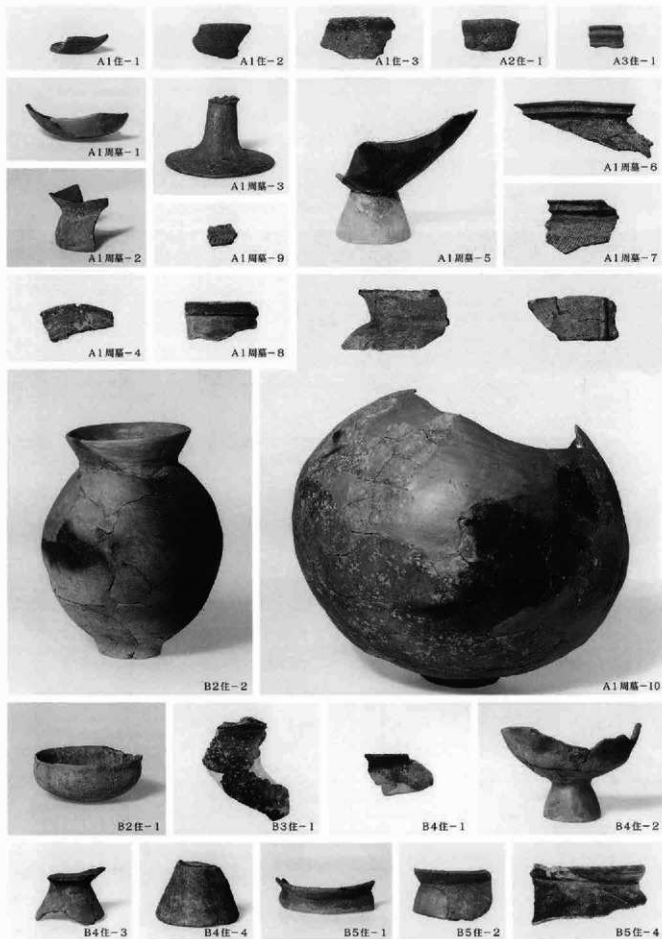
2

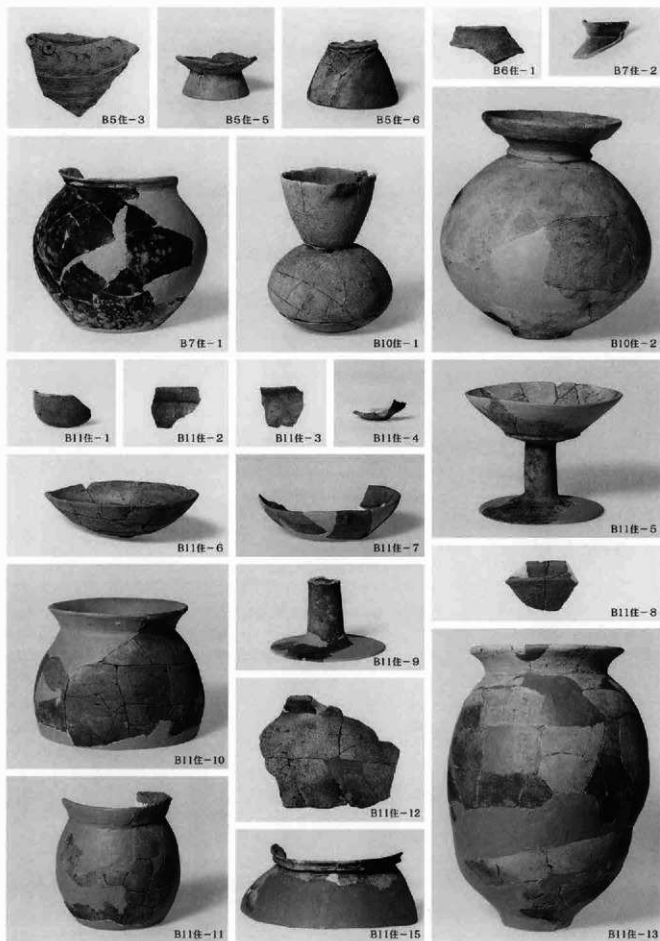


3

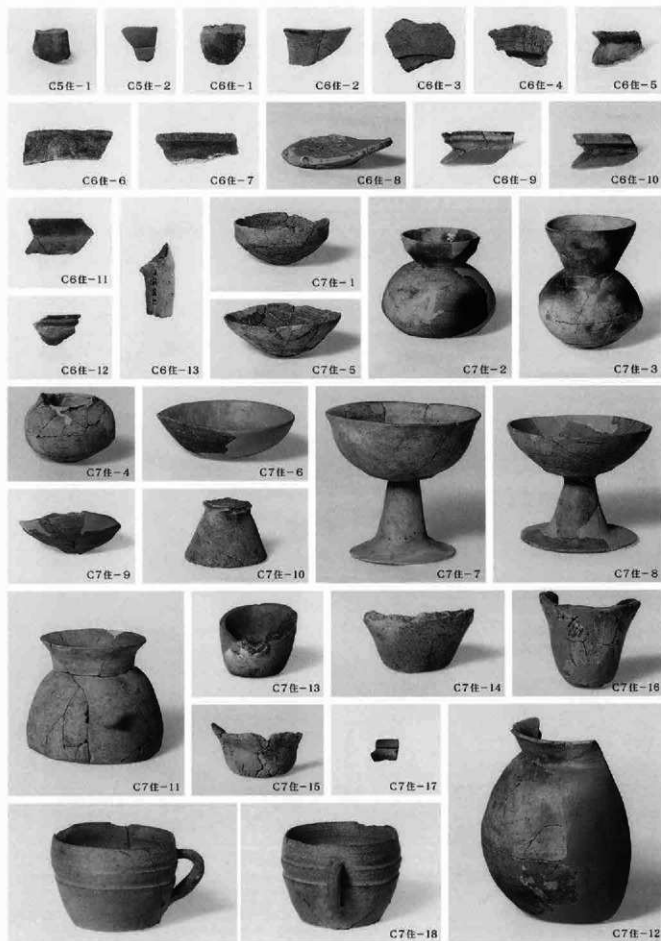
C-4区出土石器

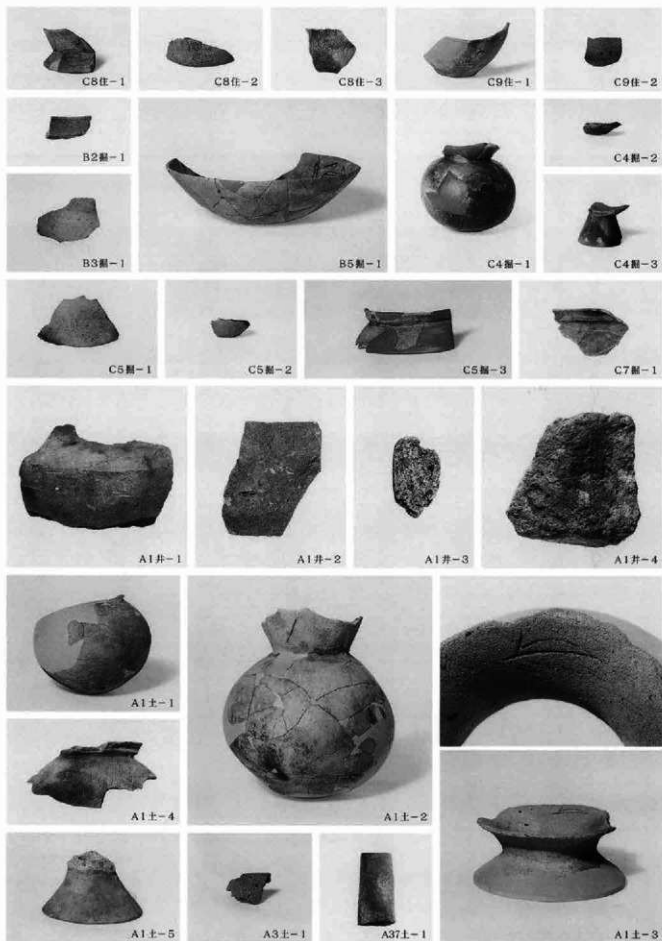
D-3区出土石器

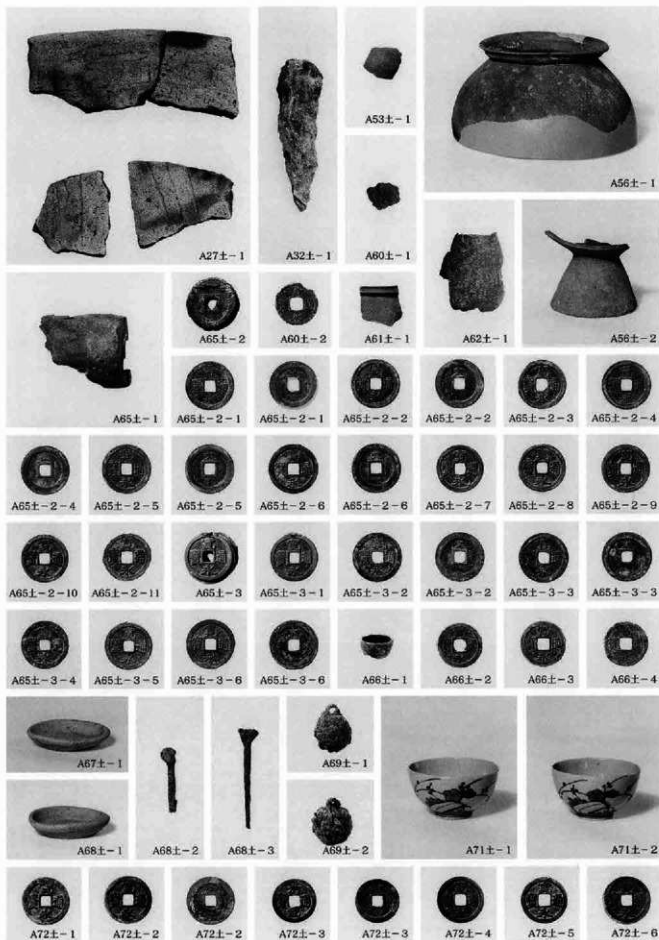




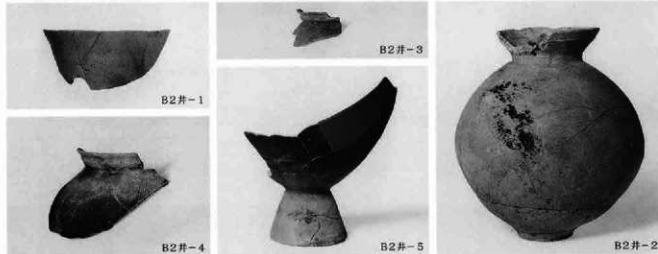
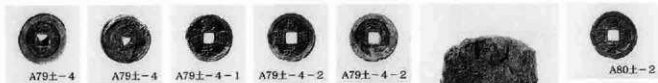






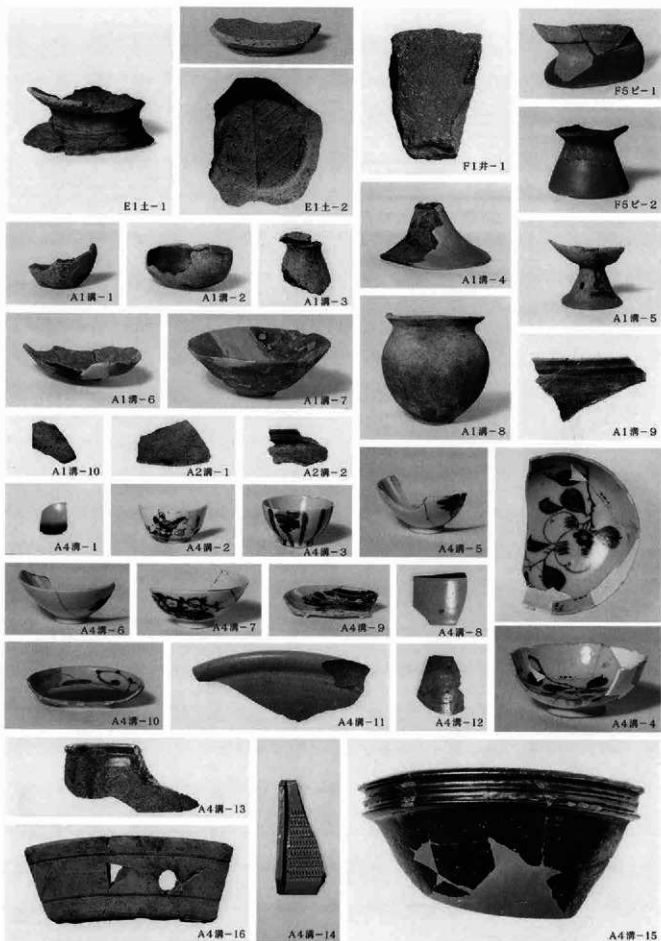








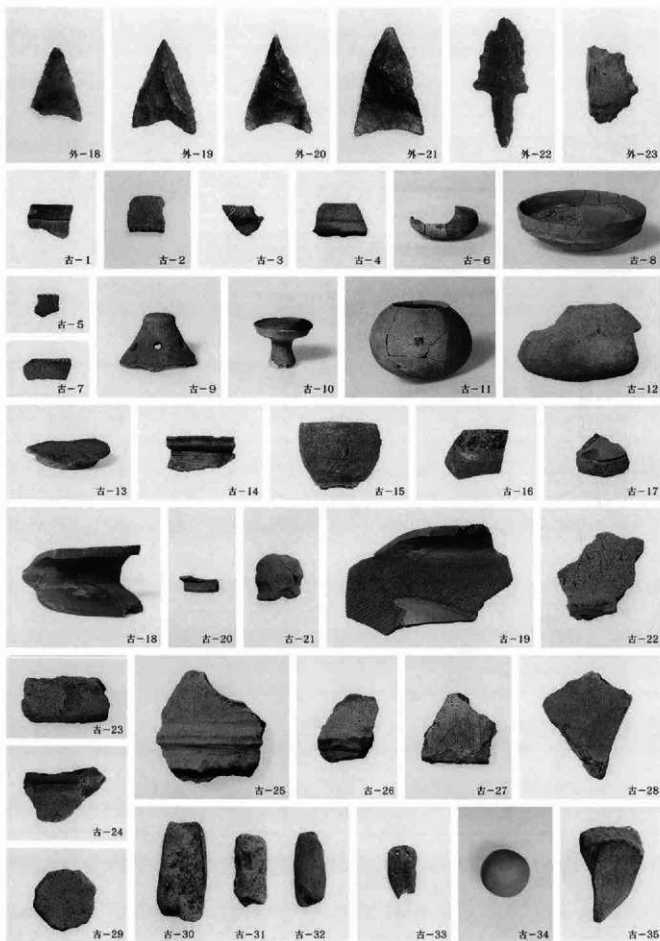


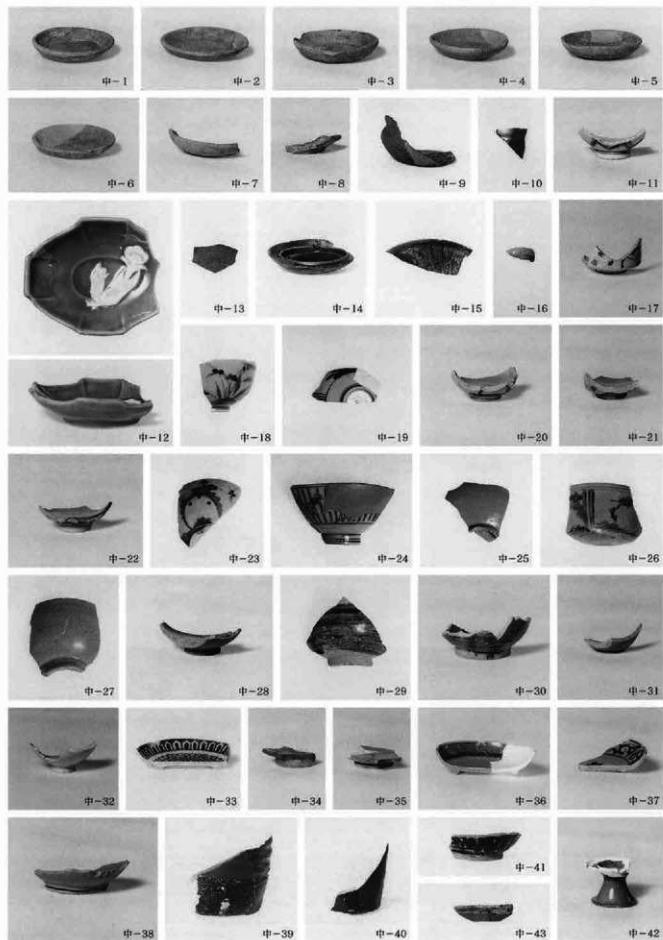


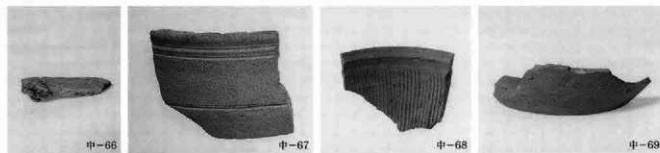
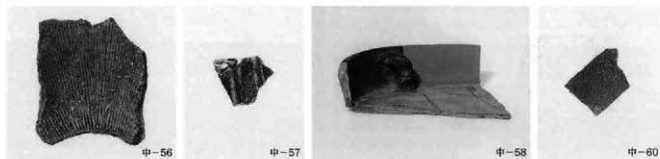
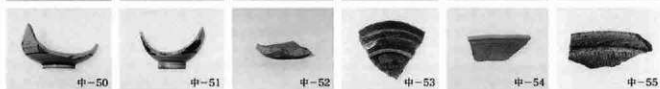


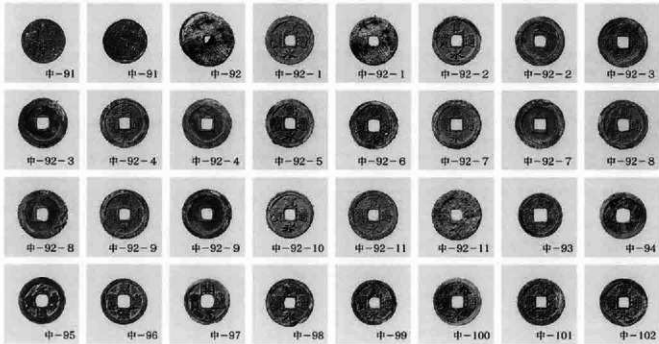
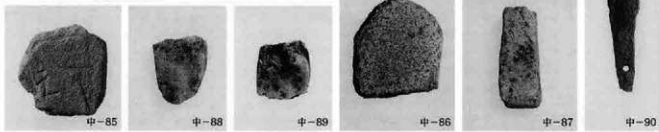
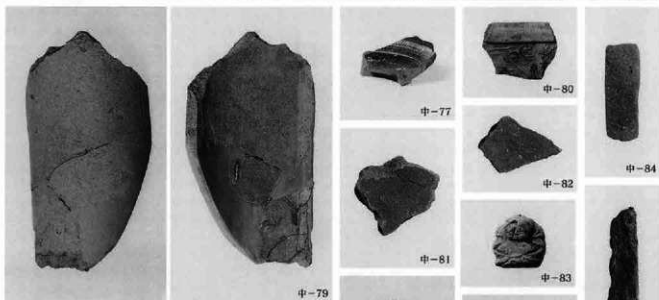
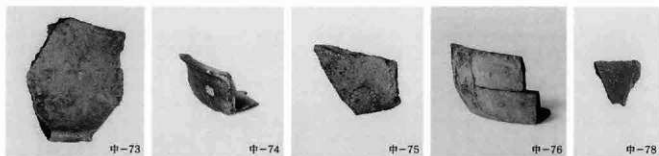












写 真 図 版

八 反 田 遺 跡



高林三入道跡を望む（東から）



調査区北の風景（南から）



I区全景 (東から)



II区全景 (北から)



III区上面東側全景 (北から)



III区上面西側全景 (北から)



III・IV区下面全景 (東から)



IV区上面全景 (東から)



IV区下面全景 (北から)



V区全景 (南から)



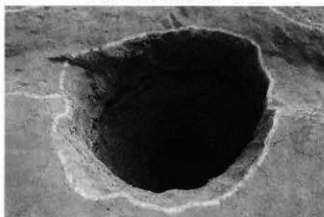
1号井戸全景 (北から)



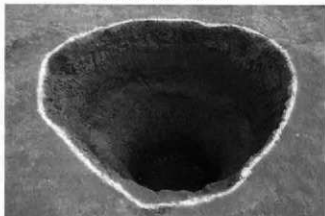
1号井戸礫出土状況 (北から)



2号井戸全景 (北から)



3号井戸全景 (北から)



4号井戸全景 (北から)



5号井戸全景 (北から)



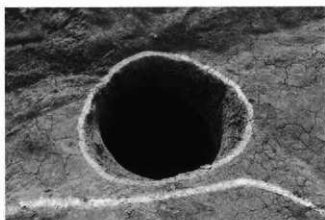
2号土坑全景 (北から)



3号土坑全景 (北から)



4号土坑全景 (北から)



5号土坑全景 (北東から)



9号土坑全景 (北から)



11号土坑全景 (北から)



1号溝全景 (南から)



2号溝全景 (南から)



3号溝全景 (北から)



4号溝全景 (東から)



5号溝全景 (南から)



6号溝と現市道全景 (南から)



6号溝セクション (北から)



6号溝遺物出土状況 (北から)



6・17・7号溝全景 (北から)



8・14号溝全景 (北から)



9号溝全景 (南から)



12号溝全景 (東から)



13号溝全景 (東から)



15・16号溝全景 (西から)



18号溝全景 (東から)



19・20・21号溝全景 (東から)



23・24号溝全景 (北から)



25号溝全景 (西から)



25・26号溝セクション (北から)



29号溝全景 (東から)



30号溝全景 (北から)



31・32号溝全景 (北から)



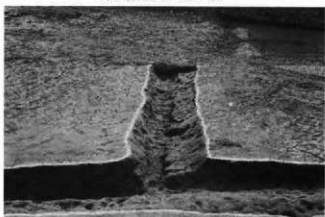
33号溝全景 (南から)



34号溝全景 (南から)



47号溝全景 (西から)



48号溝全景 (北から)



26号溝全景 (東から)



26号溝調査風景 (東から)



35・41号溝全景 (北から)



36・37・38・39号溝全景 (北から)



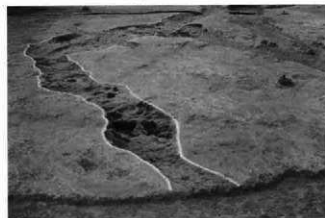
40号溝全景 (東から)



42号溝全景 (北から)

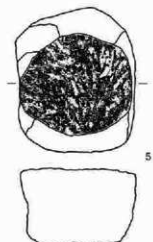
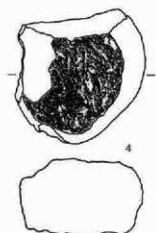


43・44・45号溝全景 (東から)



46号溝全景 (東から)





0 1 : 6 20cm

八反田遺跡1号井戸出土遺物

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第357集

高林三入遺跡・八反田遺跡

東毛幹線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年(2005年)11月25日印刷

平成17年(2005年)11月30日発行

編集／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県北橋村大字下箱田784番地の2

電話 0279-52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

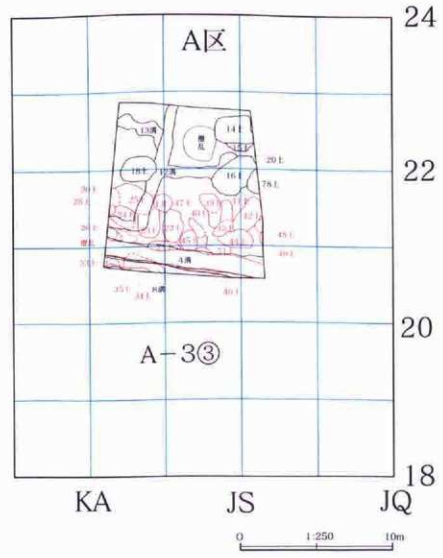
印刷／川島美術印刷株式会社



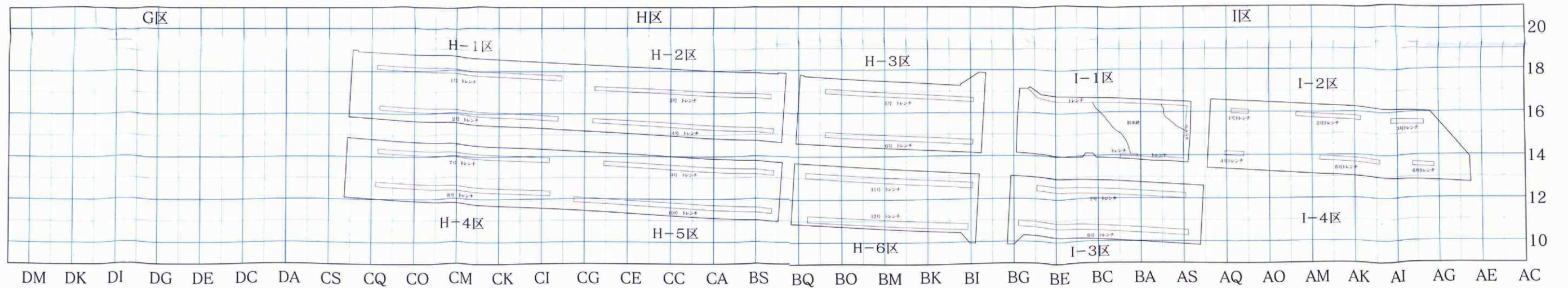
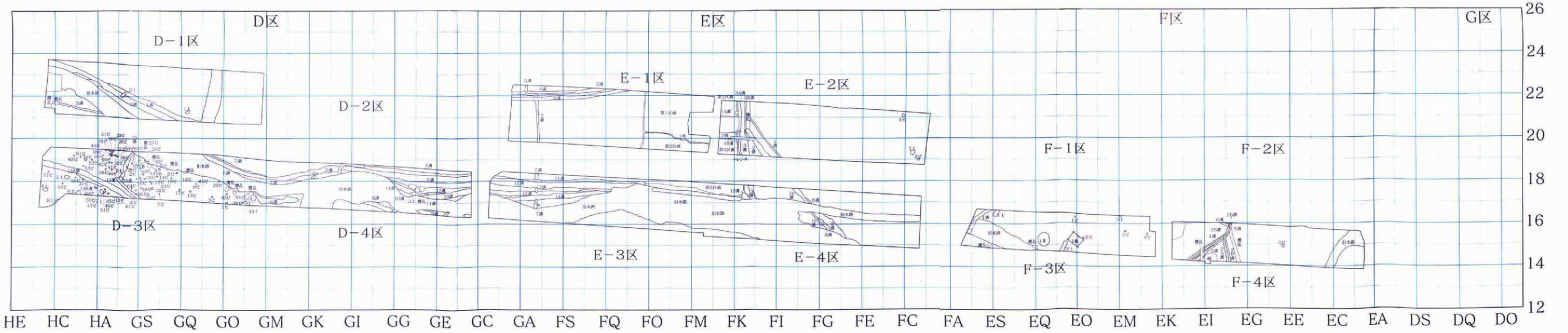
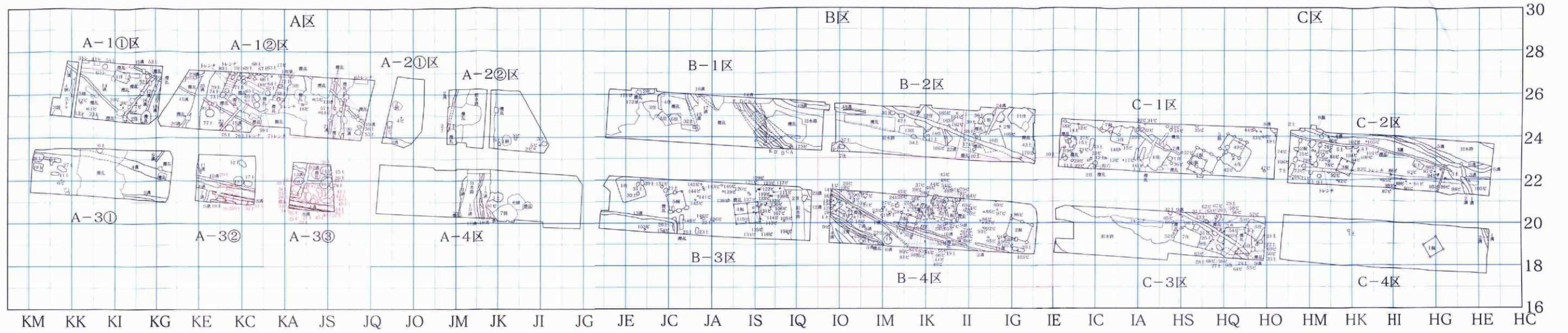
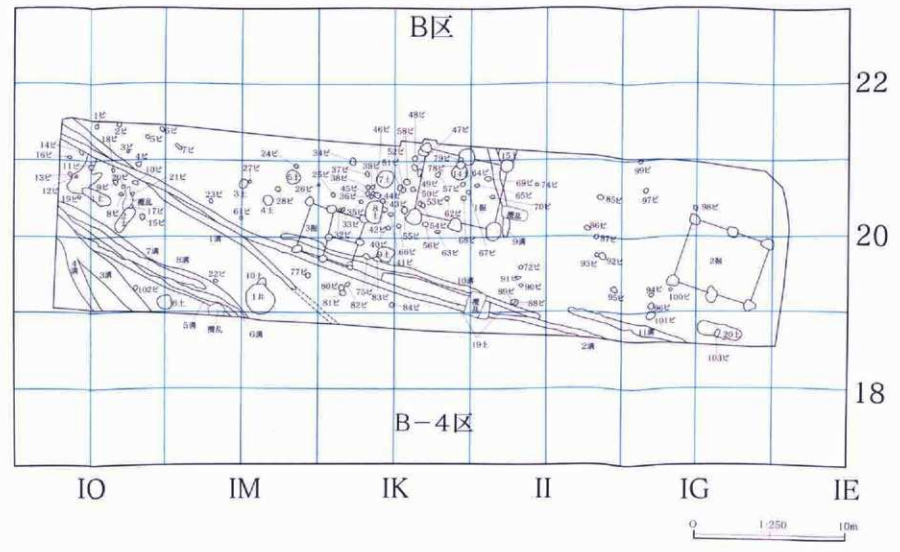
高林三入・八反田遺跡 正誤表

訂正箇所	誤	正
249頁左段18行目	第249図	第251図
249頁左段19行目	第36表	第37表
329頁報告書抄録 発行年月日	20050731	20051130

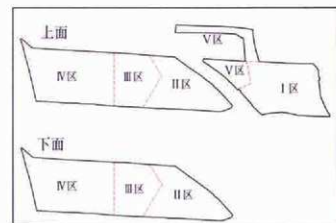
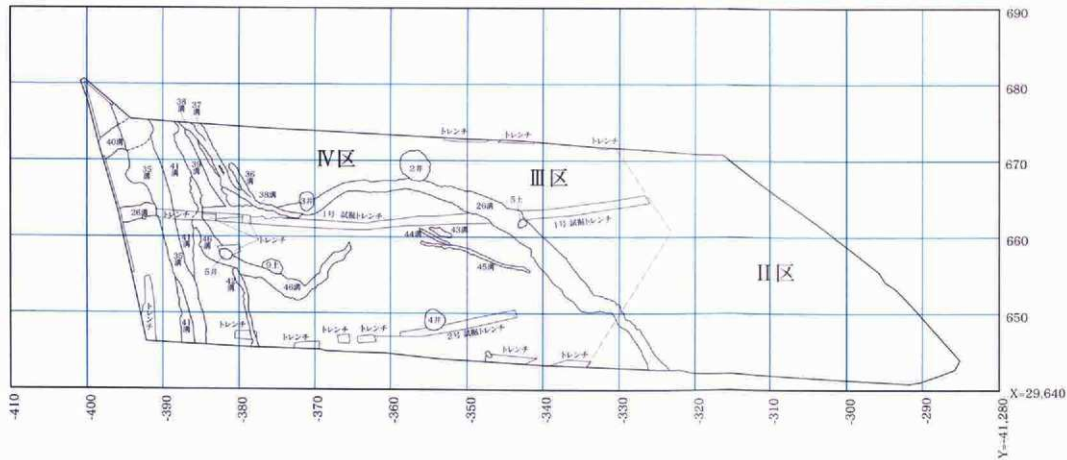
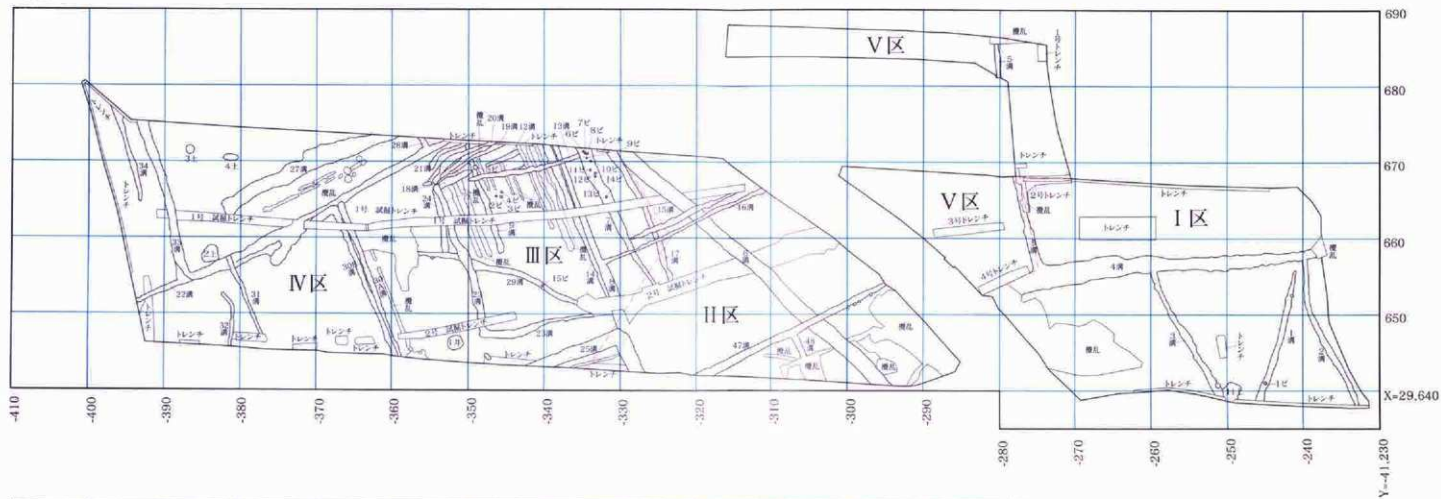
A-3㉓区拡大図



B-4区拡大図



付図1 高林三人遺跡全体図



調査区図

0 1:500 20m

付図2 八反田遺跡全体図